

港区における

75歳以上高齢者を含む2人世帯の生活に関する

調査報告書

平成25年(2013年)5月

港区政策創造研究所

(企画経営部)

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つ子どもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和 60 年 8 月 15 日

港 区

ご 挨 拶

このたび、港区政策創造研究所が平成24年度に実施した「港区における75歳以上高齢者を含む2人世帯の生活に関する調査」の報告書がまとまりました。

平成23年度に港区政策創造研究所で実施したひとり暮らし高齢者に関する調査では、買い物に困っているひとり暮らしの高齢者が多くいることなどの実態が明らかになり、買い物支援事業等の区の高齢者施策の充実に反映させました。

今回実施した75歳以上の高齢者を含む2人世帯への調査は、昨今大きな社会問題となっている所在不明高齢者問題や、高齢夫婦・親子世帯の孤立死の問題が契機となっています。このことは、複数の世帯員が含まれる家の中にも、孤立と貧困が存在していることを指し示しています。区として高齢者を含む2人世帯の現状をより詳細に把握する必要があると判断し、港区政策創造研究所で調査を実施しました。

調査の結果、75歳以上の高齢者を含む2人世帯の一定数は、生活が不安定で、家族・地域とのつながりが弱いなどの課題を抱えている現状が明らかになりました。区は、調査結果を踏まえ、課題を抱えた世帯への有効かつ具体的な対策を迅速に進めてまいります。

区では、これからも、港区政策創造研究所の調査研究機能を最大限に活用し、先見性のある政策を創造し、「区民とともに創る安全で安心できる港区」の実現に向けて積極的に取り組んでまいります。

調査研究にあたり、快くアンケート調査にご協力いただいた皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

平成25年5月

港区長 武井 雅昭

高齢者を含む2人世帯の生活をより豊かにするために

港区では、平成23年2月1日、企画経営部内に港区政策創造研究所を設置しました。研究所は、「各部門の個別情報の収集・分析等を踏まえて、横断的に課題を据え総合的な政策研究を行い、各支援部・総合支所を支援することを目的」としています。

港区政策創造研究所では、2回目の大規模な調査となる75歳以上高齢者を含む2人世帯の悉皆調査を平成24年9月に実施しました。今回の調査では、世帯主と同居者それぞれに健康状態や社会参加などの生活に関わる質問をいたしました。分析の過程で、高齢者を含む2人世帯は、夫婦世帯と親子世帯の2つに大きく分けることができ、それぞれの特徴、課題について詳細に分析し、報告書に掲載しています。

この調査研究は、区各領域の現場担当職員や専門家の方々に、ご協力いただき進めていきました。調査の設計、実施、分析にあたって、庁内の関係部署の職員が集まり関係者会議を組織し、その会議に専門家である長谷川博康氏（株式会社スタテックス代表取締役社長）と菅野道生氏（岩手県立大学専任講師）に「特任研究員」として参加していただきました。関係者会議の名簿は、本報告書の最後に掲載しています。調査研究に関わって下さった皆様に心より感謝したいと思います。

今回の調査研究をもとに、高齢者を含む2人世帯の生活がより豊かになるよう、研究所として政策のあり方をさらに探求していきたいと思います。今後も、現場の職員・専門家の方々と共同研究を行い、現場そして区民のための政策創造に貢献できるような研究所でありたいと思っています。

最後に、調査にご協力いただいた区民の方々に心より感謝申し上げます。

港区政策創造研究所所長 河合 克義

目 次

I	調査の目的と概要	1
1	調査の目的と視点	1
	(1) 同居高齢者世帯の孤立と生活困難	1
	(2) 調査にあたっての視点	3
2	調査の概要	4
	(1) 調査の名称	4
	(2) 調査主体	4
	(3) 調査の目的	4
	(4) 調査対象	4
	(5) 調査の方法	4
	(6) 調査時点及び期間	4
	(7) 回収数、回収率	4
	(8) 本報告書の執筆	4
II	港区の地域概況	5
1	港区の概況	5
	(1) 誕生	5
	(2) 位置	5
	(3) 地形	6
	(4) 面積	6
	(5) 人口	6
	(6) 産業	8
	(7) 住宅	9
2	港区の高齢者の状況	10
	(1) 高齢者数等の推移	10
	(2) 港区の高齢者を含む世帯の状況	10
	(3) 国勢調査結果から見る高齢者を含む2人世帯の状況	11
3	港区の地区ごとの特徴について	11
	(1) 芝地区	11
	(2) 麻布地区	11
	(3) 赤坂地区	11
	(4) 高輪地区	11
	(5) 芝浦港南地区	12
III	基本集計	13
1	性別・年齢	13
	(1) 性別	13
	(2) 年齢	13
2	住まいについて	14
	(1) 現在居住している地区	14
	(2) 港区内在住年数	14
	(3) 現住所在住年数	15
	(4) 世帯主から見た同居者の種類	15
	(5) ふたり暮らしの期間	16
	(6) 住宅の種類	16
	(7) 居住階	17
	(8) 住宅の困りごと	17

3	健康状態	18
	(1) 本人の健康状態についての意識	18
	(2) 日常生活での介助の必要性	18
	(3) 介護保険の要介護度	19
	(4) 介護保険サービスの利用状況	19
	(5) 保健福祉サービスの利用状況	20
4	職業について	20
	(1) 本人の最長職	20
	(2) 現在の仕事の有無	21
5	地域・生活での困りごと	21
	(1) 地域での困りごと	21
	(2) 日常生活での困りごと	22
	(3) 世帯主・同居者以外に困りごとを手伝ってもらう人	22
	(4) 家事や手続き	23
6	家族・親族関係について	23
	(1) 別居の生存子の有無	23
	(2) 別居の生存子の人数	23
	(3) 行き来する親族	24
	(4) 行き来する親族の居住地	24
	(5) 行き来する親族との連絡頻度	25
7	友人および近隣関係	25
	(1) 親しい友人・知人の有無	25
	(2) 親しい友人・知人の種類	26
	(3) 友人・知人との連絡頻度	26
	(4) 近所づきあいの程度	27
8	緊急時の支援者と正月を過ごした相手	27
	(1) 緊急時の支援者の有無	27
	(2) 緊急時の支援者の種類	28
	(3) 正月三が日を過ごした相手	28
9	外出状況について	29
	(1) 主な外出手段	29
	(2) 外出の頻度	29
	(3) 外出が少ない理由	30
	(4) 外出先での会話の程度	30
10	社会参加活動について	31
	(1) 参加している団体・集まり	31
	(2) 団体・集まりの活動に参加しない理由	31
	(3) 団体・集まりの活動への今後の参加希望	32
11	行政サービスの情報源	32
	(1) 行政サービスの情報源	32
	(2) 情報の充足	33
12	生活意識について	33
	(1) 暮らしの張り合いの程度	33
	(2) 暮らしのストレスの程度	34
	(3) 生活の充実の程度	34
	(4) 生活における不安・心配の程度	35
	(5) 趣味の時間の満足度	35
	(6) 友人関係の満足度	36
	(7) 近所づきあいの満足度	36

(8) 頼りにされていると感じる度合い／ 37	
(9) 取り残されていると感じる度合い／ 37	
(10) 将来の生活への安心感／ 38	
13 経済状況	38
(1) 年間収入／ 38	
(2) 収入の種類／ 39	
(3) 主な収入／ 39	
(4) 家計負担の大きい費目／ 40	
(5) 現在の経済状況の意識／ 40	
(6) 将来の不安や心配／ 41	
14 地区別の状況	42
(1) 地区別に見た世帯類型の分布／ 42	
(2) 住宅の種類と住宅の困りごとについて／ 42	
(3) 地域の困りごとについて／ 44	
(4) 近所づきあいの程度について／ 45	
(5) 緊急時の支援者について／ 46	
(6) 参加している社会活動について／ 46	
(7) 経済状況の感じ方について／ 48	
(8) 家計負担の大きい費目について／ 49	
IV 生活意識について.....	50
1 要介助者の有無と生活意識	50
(1) 世帯主の生活意識と要介助者の有無／ 50	
(2) 同居者の生活意識と要介助者の有無／ 51	
2 緊急時の支援者の有無と生活意識	52
(1) 世帯主の生活意識と緊急時の支援者の有無／ 52	
(2) 同居者の生活意識と緊急時の支援者の有無／ 53	
3 経済状況の感じ方と生活意識	54
(1) 世帯主の生活意識と世帯の経済状況／ 55	
(2) 同居者の生活意識と世帯の経済状況／ 58	
V 夫婦世帯の状況.....	62
1 夫婦世帯の基本的特徴	62
(1) 年齢／ 62	
(2) ふたり暮らしの年数／ 63	
(3) 住宅の種類／ 63	
(4) 健康状態と介護の状況について／ 63	
(5) 仕事の状況／ 65	
(6) 家事分担の状況と日常生活上の支援者の存在／ 65	
(7) 別居の子どもの有無／ 66	
(8) 行き来のある家族・親族について／ 66	
(9) 近所づきあい／ 67	
(10) 緊急時支援者の有無／ 67	
(11) 正月三が日の過ごし方／ 68	
(12) 外出頻度と外出時の会話の程度／ 68	
(13) 社会参加の状況／ 69	
(14) 情報の充足について／ 70	
(15) 経済状況について／ 70	
(16) 生活意識について／ 72	
(17) 将来の不安や心配／ 73	

2	夫婦世帯の地域ネットワークの状況	74
	(1) 夫婦世帯の友人・知人関係	74
	(2) 夫婦世帯の近所づきあいの程度	75
	(3) 夫婦世帯の外出時の会話の程度	75
3	介助の必要性と夫婦世帯の生活状況	76
	(1) 夫婦世帯と介助の必要性	76
	(2) 介助の必要性と家事分担	76
	(3) 同居相手が要介助である人の生活意識	79
	(4) 介助が必要な人がいる夫婦世帯の経済状況	82
4	ひとり暮らし高齢者社会調査との比較	84
	(1) 平均年齢	84
	(2) 住宅の種類	84
	(3) 生存子の有無	85
	(4) 最も行き来する家族・親族	85
	(5) 緊急時の支援者	85
	(6) 同居者以外に困りごとを手伝ってもらう人	86
	(7) 正月三が日を過ごした相手	87
	(8) 近所づきあい	87
	(9) 親しい友人・知人	88
	(10) 社会活動	89
	(11) 経済状況の感じ方	89
5	夫婦世帯の生活状況の分類－因子分析とクラスタ分析	90
	(1) 夫婦世帯の生活状況－因子分析・因子得点	90
	(2) 夫婦世帯の生活状況の分類－クラスタ分析	92

Ⅵ 親子世帯の状況 77

1	親子世帯の基本的特徴	97
	(1) 性別	97
	(2) 年齢	97
	(3) ふたり暮らしの年数	98
	(4) 住宅の種類	98
	(5) 健康状態と介護の状況について	98
	(6) 仕事の状況	99
	(7) 家事分担の現状と日常生活上の支援者の存在	100
	(8) 近所づきあい	101
	(9) 緊急時支援者の有無と正月三が日の過ごし方	102
	(10) 外出頻度と外出時の会話の程度	102
	(11) 社会参加の状況	104
	(12) 情報の充足について	105
	(13) 経済状況について	105
	(14) 生活意識について	107
	(15) 将来の不安や心配	108
2	介助の必要性と生活状況	109
	(1) 親子世帯における介助の状況	109
	(2) 介助の有無と仕事の状況	109
	(3) 介助の有無と支援ネットワーク	111
	(4) 介助の有無と外出行動	113
	(5) 介助の有無と生活意識・将来の不安	114
3	親子世帯の生活状況の分類－因子分析とクラスタ分析	119
	(1) 親子世帯の生活状況－因子分析・因子得点	119
	(2) 親子世帯の生活状況の分類－クラスタ分析	122

Ⅶ	自由回答	127
1	区への要望や生活についての自由意見	127
	(1) 内容について / 127	
	(2) 世帯主の自由意見について / 127	
	(3) 同居者の自由意見について / 133	
Ⅷ	調査から言えることーふたり暮らし世帯の生活状況と支援	139
1	結果の要約ー夫婦世帯・親子世帯の生活状況	139
	(1) 夫婦世帯の生活状況 / 139	
	(2) 夫婦世帯の生活状況の分析 / 146	
	(3) 親子世帯の生活状況 / 158	
	(4) 親子世帯の生活状況の分析 / 165	
2	75 歳以上高齢者を含む世帯の社会的孤立リスクについて	171
	(1) 社会的孤立リスク変数の作成 / 171	
	(2) 社会的孤立リスク変数に影響を持つと思われる変数との関係 / 171	
	(3) 社会的孤立リスク変数を従属変数とするロジスティック回帰分析 / 172	
3	調査から言えることーふたり暮らし世帯の生活状況と支援	173
	(1) 世帯類型による生活状況の違いー夫婦世帯と親子世帯 / 173	
	(2) 世帯ごとの生活状況とニーズー調査からわかったことと今後の課題 / 174	
Ⅸ	資料	177
資料 1	付表	177
資料 2	調査票	184
資料 3	港区政策創造研究所の概要	204
資料 4	港区における 75 歳以上高齢者を含む 2 人世帯の生活に関する調査 関係者会議名簿	205

I 調査の目的と概要

1 調査の目的と視点

(1) 同居高齢者世帯の孤立と生活困難

港区政策創造研究所は、平成 23（2011）年 2 月に設立され、研究所としての最初の研究テーマを「ひとり暮らし高齢者の生活実態と社会的孤立問題」と設定し、同年 6 月に区内のひとり暮らし高齢者の悉皆調査（対象者数 5,656 人、回答率 69.8%）を実施した。その結果は、平成 24 年 1 月に「港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書」にとりまとめられている。ひとり暮らし高齢者の調査研究からスタートさせた理由は、港区ではひとり暮らし高齢者の出現率（高齢者のいる世帯中の単身高齢者の割合）が全国的にも高く、孤立問題は無視できない課題であるという認識があったからである。

この調査結果の中で特に注目したことは、生活問題を抱え、孤立し、困り事を困り事として認識していない、そしてそれを解決すべき要望を声としてあげない高齢者の存在であった。

こうした人々に対して港区は、「ひとり暮らし高齢者等見守り推進事業」を創設した。この港区の新たな施策は、先駆的で先見性を持つものと言える。その理由は、行政自身がサービスを利用していないひとり暮らし高齢者等をリストアップし（平成 24 年 3 月現在、3,803 名）、新たに配置した「ふれあい相談員」という専任の専門職員 10 名で、全数訪問をしているからである。そして、声をあげない人々、潜在化している問題へのこうしたアプローチは、政策的・実践的に重要な問題提起をしていると言ってよい。

ところが、孤立と生活困難の問題がひとり暮らし高齢者以外のところでも発生していることが、いま、無視できない課題として注目されてきている。それが家族と同居している高齢者の世帯での孤立・貧困問題である。この問題に気付かされたのは、平成 22（2010）年の夏以降の、いわゆる所在不明高齢者問題であった。平成 22 年 7 月に足立区で、生きていれば 111 歳の男性が白骨死体で発見された。この男性は 30 年以上前に死亡しており、娘と孫が年金を長年にわたって受給していたとのことである。以後、同様の事件が全国に発生していることが明らかになった。

平成 22 年 8 月 5 日付けの朝日新聞は、同社の調べで所在がわからない全国の 100 歳以上の高齢者が 31 人いると報道した。表 1-1 はその一覧である。そして厚生労働省は、平成 22 年 8 月 27 日、日本全体で所在不明高齢者が 100 歳以上で 271 人、80 歳以上で 800 人いると発表した。

表 1-1 所在不明が判明した高齢者

（平成 22 年 8 月 4 日現在、朝日新聞本社取材）

北海道岩見沢市	100 歳	男
	100 歳	女
茨城県鉾田市	101 歳	男
千葉県野田市	104 歳	女
千葉県松戸市	103 歳	女
	100 歳	女
東京都杉並区	113 歳	女
東京都荒川区	108 歳	男
	103 歳	男
東京都港区	105 歳	男
	105 歳	女
東京都八王子市	102 歳	男
東京都清瀬市	104 歳	男
川崎市	109 歳	男
神奈川県秦野市	104 歳	男
長野市	110 歳	男
静岡県下田市	103 歳	女
静岡県熱海市	102 歳	女
名古屋市	106 歳	男
愛知県津島市	100 歳	男
京都府宇治市	103 歳	男
京都府笠置町	102 歳	男
大阪府大東市	105 歳	男
兵庫県川西市	102 歳	男
	101 歳	男
和歌山県海南市	112 歳	女
	107 歳	男
岡山市	108 歳	女
	107 歳	女
	101 歳	男
福岡市	101 歳	男

* 東京都足立区で 111 歳とみられていた男性は遺体で発見されたため、含まれない。

出所：「朝日新聞」平成 22 年 8 月 5 日付

こうした所在不明高齢者問題は、次の2つの問題を持つ。第1は、高齢者と子どもとの同居世帯において、子どもの収入が十分でなく、親の年金を当てに暮らしている現実が見えてきたことである。第2は、高齢者のいる種々の同居世帯から高齢者が家を出て、所在がわからなくなっている現実があることである。

特に後者の高齢者の「家出」問題は、現在も深刻な問題となっている。表1-2に示された5事例は杉並区で、平成24年に把握されたものである。いずれも家族等が「行き先がわからない」状態のままに過ごしている現実がある。

表1-2 所在が分からなくなっている杉並区の75歳上の高齢者

年齢	性別	住民票の家に住んでいる人	住んでいる人が区職員に話した不在の状況
94歳	男性	息子という男性	「2年以上前にいなくなった。どこに行ったかはわからない」
83歳	女性	娘	「(別の)娘と一緒に外国に行ったが、行き先はわからない」
79歳	男性	知人という女性	「以前は住んでいたが、今はどこに行ったかわからない」
76歳	男性	おいという男性	「40年以上前からどこに行ったかわからない」
76歳	男性	妻という女性	「2年前、警察に捜索願を出した」

注：杉並区保健福祉部高齢者在宅支援課の調査に基づいて作成 資料：『朝日新聞』平成24年9月29日付

家族関係の課題もあるものの、住民票をそのままにして住所不明になっている高齢者が、全国的に一定数いるのではないかと（河合克義・菅野道生・板倉香子編著『社会的孤立問題への挑戦—分析の視座と福祉実践』法律文化社、平成25年、参照）。

ところで、平成24年（2012）の1月から3月にかけて全国で孤立死事件が多発し、表1-3のように新聞報道が多くなされた。

表1-3 平成24年1月～3月の孤立死事件

1月12日	釧路市	84歳の夫と72歳の妻
1月20日	札幌市	42歳の姉（病死）と40歳の障害を持つ妹（凍死）
2月13日	立川市	45歳の母親と4歳の障害を持つ息子
2月20日	さいたま市	60歳代の夫婦と30歳代の息子
3月7日	立川市	都営アパート95歳の母と63歳の娘
3月11日	足立区	73歳の男性と84歳の女性
3月14日	川口市	92歳の母と64歳の息子
3月23日	埼玉県入間市	75歳の母（死亡）、45歳の精神疾患の息子が助け出されていた。母の死後10日後の発見。
3月25日	世田谷区	都営アパート93歳の父（白骨遺体）、62歳の息子（自殺）
3月27日	福島県南相馬市	69歳の母と47歳の息子、凍死（母は認知症、息子は病気）
3月30日	秋田県鹿角市	90歳代の母と60歳代の息子

注：日付は発見日

1月20日に発見された札幌市の42歳の姉と40歳の障害を持つ妹の死は、マスコミでも大きく取り上げられた。姉は、経済的困窮から福祉事務所に3回相談に行ったが、生活保護を受けることが出来ず、自分は仕事を探す努力が足りないと思うようになったようである。ガスと電気は料金滞納で止められ、姉は脳内出血で死亡、その後、妹が凍死した。

2月13日に発見された立川市の45歳の母親と4歳の障害を持つ息子の場合、母親がくも膜下出血で死亡し、その後、息子が餓死している。

3月7日には、同じく立川市の都営アパートで95歳の母と63歳の娘が死亡している状態で発見された。母が和室の布団の中で死亡、63歳の娘が居間のソファのわきでうつぶせ状態で死亡していた。娘が先に病死している。

こうしたケースから見えることは、複数の世帯員が含まれる家の中での孤立と貧困の問題、また制度が正しく機能していないことの問題である。

さて、港区における高齢者と家族・親族等と同居する2人世帯はどのような生活の課題を抱えているのであろうか。これまでのところ、そうした世帯の生活実態は十分に把握されているとは言い難い。そこで、この課題を考えるために、港区政策創造研究所は、高齢者を含む2人世帯の実態を明らかにしようと調査を実施することとした。

(2) 調査にあたっての視点

高齢者2人世帯という場合、多くは65歳以上の高齢者夫婦世帯を想定するが、細かく見るならば、構成員2人の設定の仕方にはいろいろある。つまり、2人とも65歳以上の世帯とするか、一方のみ65歳以上の者がいる世帯とするか、あるいは調査対象年齢を65歳ではなく別の基準でとるというような選択肢である。また、夫婦世帯のみではなく、親子世帯や兄弟との同居世帯等も考えられる。

われわれとして、調査対象を設定する際、まず年齢階層をどの辺からとるべきかについて議論をした。その結果、身体面、健康面から見て、65歳からではなく、いろいろな課題を抱えはじめる75歳以上の高齢者を含む2人世帯とし、もう一人の同居者の年齢は問わないことにした。

世帯構成員が2人いるということは、相互に支え合う面がある一方、構成員の一人が問題を抱えても、もう一人の支えによって、世帯単位で見ると問題がないように見えることがある。われわれとして、こうした世帯内に潜在化している問題の把握を重視したい。

ところで、家族等と同居している高齢者の生活問題は、介護問題を中心に扱われてきた傾向が強いように思われる。確かに年齢が高くなるにしたがって身体的な問題が多くなることは事実である。しかし、身体的問題・介護問題よりも広い視点で生活上に起こっている諸問題を把握する必要がある。すなわち世帯全体の生活実態把握の視点である。いわゆる所在不明高齢者問題もそのことをわれわれに課題として突きつけたと言えよう。また同時に、世帯の貧困問題がそこにあることも見えてきたのである。その意味でも社会階層ごとの生活問題整理の視点も重視したい。

さて、ふたり暮らしの世帯は、「ひとり暮らし予備軍」として位置づけることができる。とりわけ高齢者夫婦世帯は、一方の配偶者の入院や施設への入所、あるいは死亡によりひとり暮らしとなる可能性がある。世帯員の家事分担や地域とのかかわり度合いの違いなど、世帯主と同居者それぞれの状態を把握したい。その状態をふまえ、将来ひとり暮らしになった時、家事負担や地域ネットワークがどのようなものかを予測し、必要な支援やアプローチのあり方を検討したい。

また、調査対象とした75歳以上の高齢者を含む2人世帯の大方は夫婦世帯と考えられるが、一定割合は親子世帯であることが想定される。この親子世帯の実態把握も重視したい。とくに親の介助、子どもの仕事、世帯の収入等の状況をつかみ、親子世帯の生活上の諸課題を整理したい。

2 調査の概要

(1) 調査の名称

港区における 75 歳以上高齢者を含む 2 人世帯の生活に関する調査

(2) 調査主体

調査の主体は港区政策創造研究所である。なお、調査の設計は、「港区 75 歳以上高齢者を含む 2 人世帯の生活に関する調査関係者会議」(資料 4 を参照)において行った。

(3) 調査の目的

現在、高齢者の社会的孤立が大きな問題となっている。問題を抱えているのは、ひとり暮らし高齢者だけではなく、高齢者を含む 2 人世帯の孤立問題も深刻化している。高齢者を含む 2 人世帯内に潜在化している生活上の諸問題を把握し、今後の保健福祉施策を考えていく上での基礎資料を得ることを目的に本調査を行うこととした。

(4) 調査対象

平成 24 年 8 月 10 日現在で、住民票から区内に住む 75 歳以上の高齢者を含む 2 人世帯の全数 5,206 ケースを対象とした。

(5) 調査の方法

本調査は郵送によるアンケート調査である。

(6) 調査時点及び期間

調査の調査時点は平成 24 年 9 月 1 日現在である。調査期間は 9 月 11 日～ 25 日の 2 週間で、調査は郵送によって実施された。

(7) 回収数、回収率

回収数は、2,803 ケース、回収率は 53.8%であった。そのうち、回答が白紙または白紙に近い状態、あるいは世帯主または同居者の片方しか回答していない場合などの無効票を除いた有効回収数は 2,680 ケースで、有効回収率は 51.5%となった。調査結果の分析は、この有効票 2,680 ケースについて行った。

(8) 本報告書の執筆

本報告書の執筆については、港区政策創造研究所(所長：河合 克義)が行った。

報告書における表及び図表の見方

- ① グラフや数表では、各質問の回答者数を母数とした百分率(%)で回答比率を示している。百分率(%)は、原則として小数第2位を四捨五入し、小数第1位までを表示しているため、比率の合計が 100%を前後する場合がある。
- ② 複数回答を求めた質問では、回答比率の合計が 100%を超える。
- ③ 図表内の n は、回答の合計数である。例えば、n = 2,680 の場合、回答数は 2,680 となる。

Ⅱ 港区の地域概況

1 港区の概況

(1) 誕生

昭和 22 年 (1947) 3 月 15 日、旧赤坂区、旧麻布区、旧芝区の 3 区が合併され、今の「港区」が誕生した。なお、「港区」という名称は、3 区合併を期に、各区の関係者から提案されたもののうち、「今後の我が国の発展は貿易の振興にあるが、その素材とも言える東京港を包含している」として「東港区」が候補となり、そこから「東」の一字を除いて、「港区」となったことに由来する。

(2) 位置

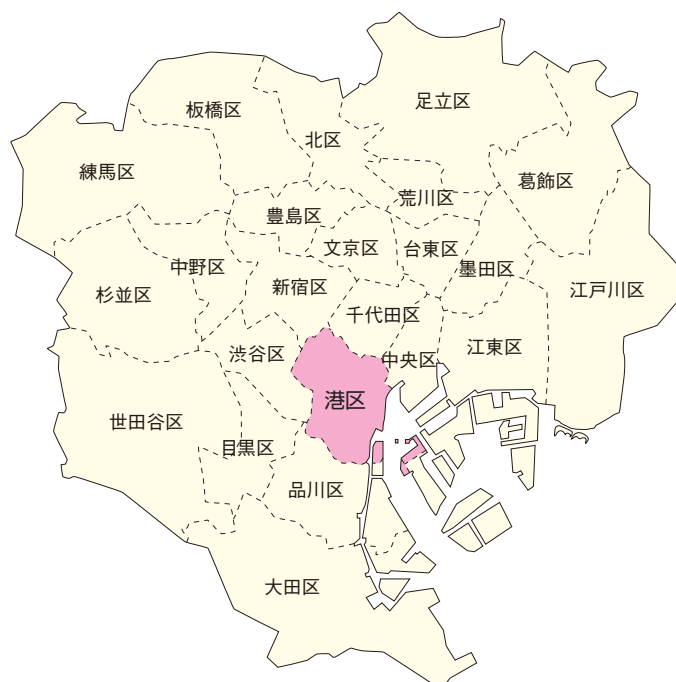
日本は、アジアの東方にある 4 つの弧状列島から成り立っていて、太平洋の西部にある島国である。その最南端でもあり最東端でもある東京都は、区部及び多摩地域の内陸部と伊豆諸島及び小笠原諸島などの島しょ部からなっている。

図2-1 日本、東京都の位置



港区は、東京都のほぼ東南部に位置して、東は東京港に面し、その北端でわずかに中央区に接し、北は千代田区と新宿区に、西は渋谷区、南は品川区、東は江東区にそれぞれ隣接している (図 2-2)。港区の東端は台場 2 丁目 (東経 139 度 47 分)、西端は北青山 3 丁目 (東経 139 度 42 分) で、南端は高輪 4 丁目 (北緯 35 度 37 分)、北端は元赤坂 2 丁目 (北緯 35 度 41 分) である。南北の距離は約 6.5km、東西は約 6.6km である。

図2-2 港区の位置



(3) 地形

地形は、西北一帯が高台地となっている一方、東南の東京湾に面した部分は、低地及び芝浦海浜の埋立地からなっている。高台地は秩父山麓に端を発している武蔵野台地の末端で、これらの台地は小さな突起状の丘陵となっており、そのため、東京 23 区の中では最も起伏に富んだ地形をもっている。土地の高低差が大きく、名前がついているものだけでも 80 余りの坂がある。そして区の中央部を西から東に流れる古川（金杉川）流域には、平地部が横たわっている。最高地は赤坂台地の北青山3丁目の海拔 34 m で、最低地は JR 浜松町駅前ガード下付近の 0.08 m である。

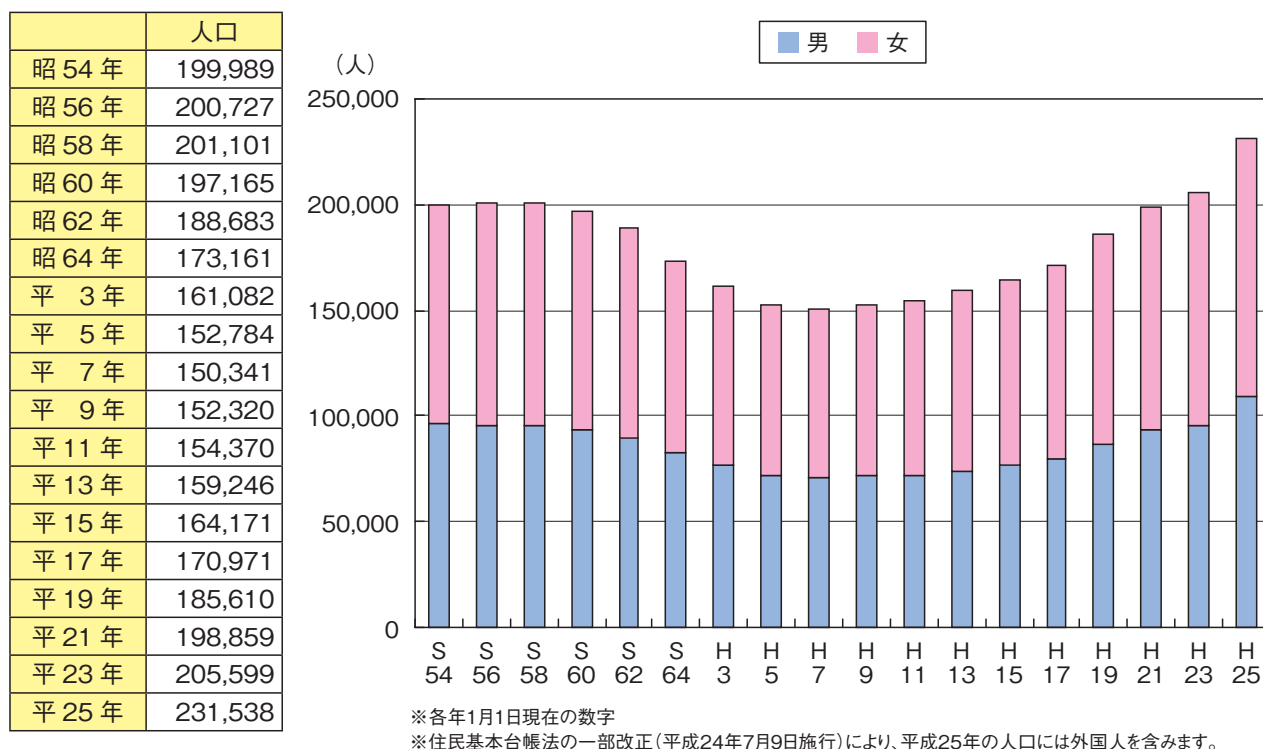
(4) 面積

港区の総面積は、20.34 平方 km（平成 23 年 10 月1日現在）である。この面積は、東京 23 区総面積 622.99 平方 km の約 3.26% にあたり、23 区中 12 番目の広さである。また最大区の大田区の3分の1強、最小区の台東区の約2倍に相当する。支所管内ごとにみると、芝地区総合支所管内は 4.42 平方 km、麻布地区総合支所管内は 3.79 平方 km、赤坂地区総合支所管内は 4.01 平方 km、高輪地区総合支所管内は 3.37 平方 km、芝浦港南地区総合支所管内は 4.76 平方 km となっている。

(5) 人口

平成 25 年1月1日現在の住民基本台帳によると、港区の人口は、231,538 人、世帯数 119,175 世帯（世帯数は、日本人のみの世帯の数）であった（図 2-3）。人口数は、昭和 59 年から長期的な減少傾向に転じ、平成7年4月には、15 万人を割り込んだが、近年の芝浦港南地域での人口増加に伴い、平成 21 年5月には 20 万人を突破し、四半世紀ぶりに 20 万人台を回復した。

図2-3 港区の人口動向



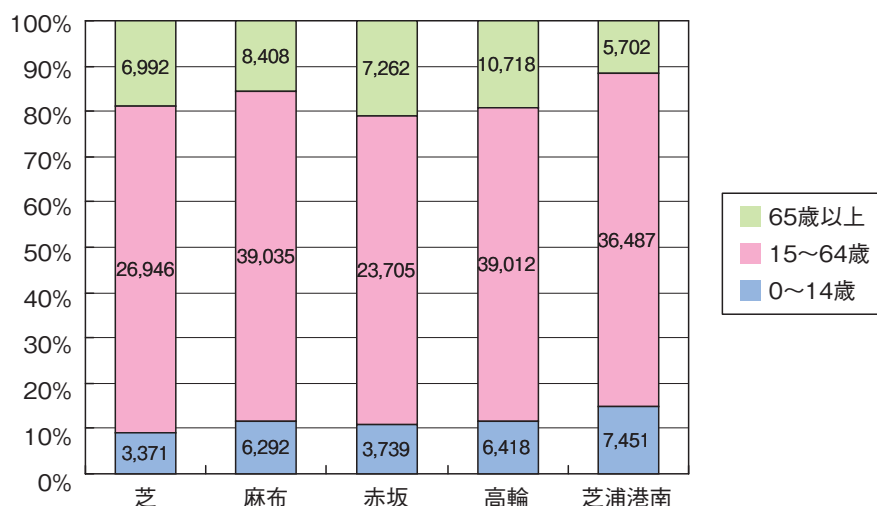
（資料）住民基本台帳より作成

総合支所管内ごとの人口をみると、芝地区総合支所管内は 37,309 人、麻布地区総合支所管内は 53,735 人、赤坂地区総合支所管内は 34,706 人、高輪地区総合支所管内は 56,148 人、芝浦港南地区総合支所管内は 49,640 人となっている。

総合支所管内別の人口構成で特徴的な部分として、赤坂地区の 65 歳以上の割合がやや高いこと（20.9%）、芝浦港南地区の 65 歳以上の割合が少なく（11.5%）、0～14 歳の割合が高い（15.0%）ことが挙げられる（図 2-4）。

外国人数は、平成 25 年 1 月 1 日現在、18,853 人（男 9,988 人、女 8,865 人）である。

図2-4 総合支所管内別の人口構成比較（単位：人）



※住民基本台帳法の一部改正（平成24年7月9日施行）により、平成25年の人口には外国人を含みます。

（資料）住民基本台帳より作成

(6) 産業

総務省統計局が実施した平成 21 年経済センサスによると、港区の事業所数は 42,664 所（事業内容等不詳を除く）、従業者数は 1,028,331 人であり、これは特別区の中で最も多い（表 2-1）。特に従業者数については、特別区全体の従業者数の 13.0%を占めている。港区の産業分類の事業所数の構成比率をみてみると、「卸売業，小売業」が 19.87%、「宿泊業，飲食サービス業」が 16.53%、「学術研究，専門・技術サービス業」が 13.71%と高い。特別区の構成比率と比較すると、港区は、「情報通信業」が 9.10%（特別区 4.16%）、「学術研究，専門・技術サービス業」が 13.71%（7.22%）と高く、一方「建設業」「製造業」はそれぞれ 2.64%（5.99%）、3.90%（9.25%）と低い。

表2-1 港区の産業

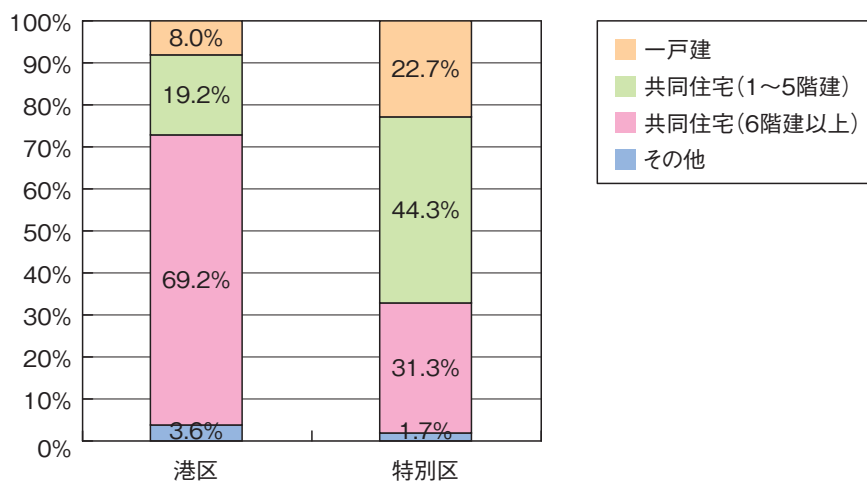
産業分類（実数、%）	事業所数				従業者数			
	港区		特別区		港区		特別区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
総数	42,664	100%	553,684	100%	1,028,331	100%	7,902,039	100%
農林漁業（合計）	19	0.04%	241	0.04%	124	0.01%	2,081	0.03%
農業，林業	16	0.04%	226	0.04%	90	0.01%	1,990	0.03%
漁業	3	0.01%	15	0.00%	34	0.00%	91	0.00%
非農林漁業（合計）	42,645	99.96%	553,443	99.96%	1,028,207	99.99%	7,899,958	99.97%
鉱業，採石業，砂利採取業	16	0.04%	56	0.01%	952	0.09%	2,087	0.03%
建設業	1,126	2.64%	33,148	5.99%	54,350	5.29%	408,092	5.16%
製造業	1,664	3.90%	51,241	9.25%	102,466	9.96%	731,225	9.25%
電気・ガス・熱供給・水道業	58	0.14%	399	0.07%	4,834	0.47%	31,165	0.39%
情報通信業	3,883	9.10%	23,051	4.16%	183,639	17.86%	804,389	10.18%
運輸業，郵便業	1,102	2.58%	16,931	3.06%	37,900	3.69%	426,053	5.39%
卸売業，小売業	8,478	19.87%	134,773	24.34%	198,702	19.32%	1,608,469	20.36%
金融業，保険業	1,025	2.40%	9,383	1.69%	41,547	4.04%	371,689	4.70%
不動産業，物品賃貸業	3,429	8.04%	49,474	8.94%	39,877	3.88%	301,662	3.82%
学術研究，専門・技術サービス業	5,848	13.71%	39,960	7.22%	75,688	7.36%	396,768	5.02%
宿泊業，飲食サービス業	7,054	16.53%	78,312	14.14%	89,690	8.72%	722,723	9.15%
生活関連サービス業，娯楽業	2,383	5.59%	37,462	6.77%	31,159	3.03%	288,799	3.65%
教育，学習支援業	651	1.53%	13,609	2.46%	17,753	1.73%	322,209	4.08%
医療，福祉	1,604	3.76%	30,073	5.43%	22,604	2.20%	444,246	5.62%
複合サービス事業	81	0.19%	1,392	0.25%	1,305	0.13%	15,230	0.19%
サービス業（他に分類されないもの）	4,174	9.78%	32,844	5.93%	117,936	11.47%	818,512	10.36%
公務（他に分類されるものを除く）	69	0.16%	1,335	0.24%	7,805	0.76%	206,640	2.62%

（資料）総務省統計局「平成 21 年経済センサス」より作成

(7) 住宅

「平成 20 年住宅・土地統計調査」によると、住宅総数は 140,440 戸、世帯総数は 120,590 世帯である。「専用住宅（居住のみを目的として建てられた住宅）」の建て方別にみると、港区は、「一戸建」が 8.0%、「共同住宅」が 88.4%で、「共同住宅」が「一戸建」の 11 倍を上回っている（図 2-5）。特別区全体でみると、「一戸建」が 22.7%、「共同住宅」が 75.6%であり、また港区は「6階建以上」の比率が 69.2%（特別区 31.3%）と非常に高いことから、特別区の中でも、高層の「共同住宅」の比率が高いことがわかる。

図2-5 港区と特別区全体の住宅の建て方の比較



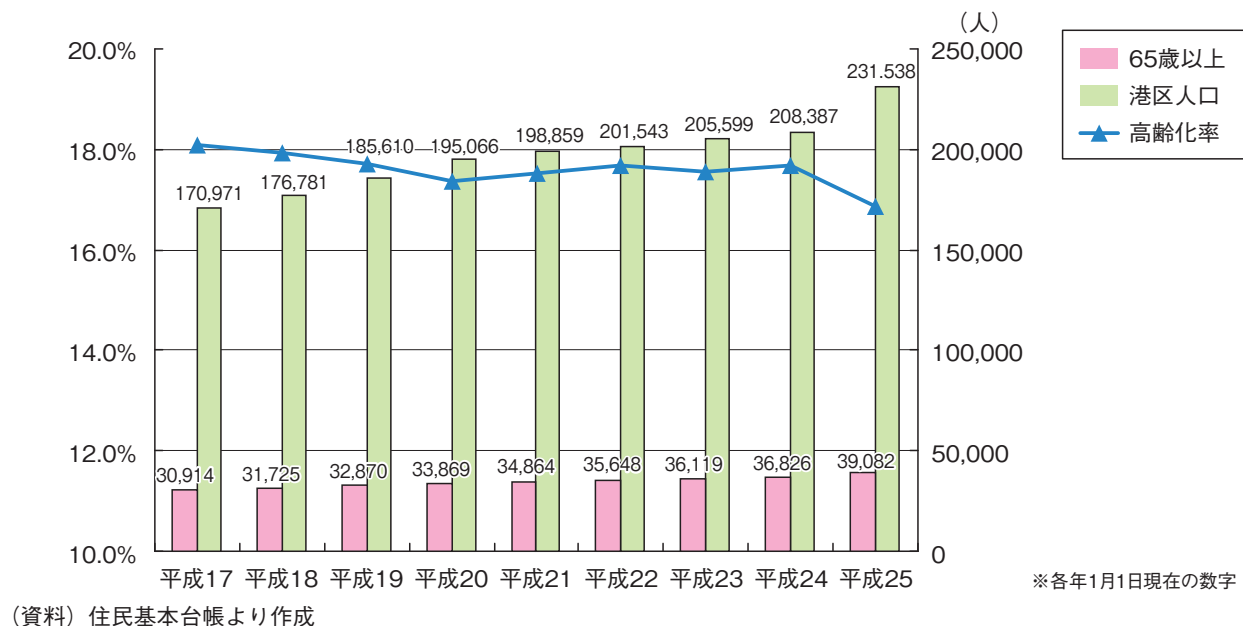
（資料）総務省統計局「平成 20 年住宅・土地統計調査」より作成

2 港区の高齢者の状況

(1) 高齢者数等の推移

港区の65歳以上の高齢者の人口は、「住民基本台帳（平成25年1月1日現在）」で39,082人、高齢化率は16.88%である。平成24年から平成25年の間に大きな変化があるのは、外国人が住民基本台帳に含まれたことによる（図2-6）。

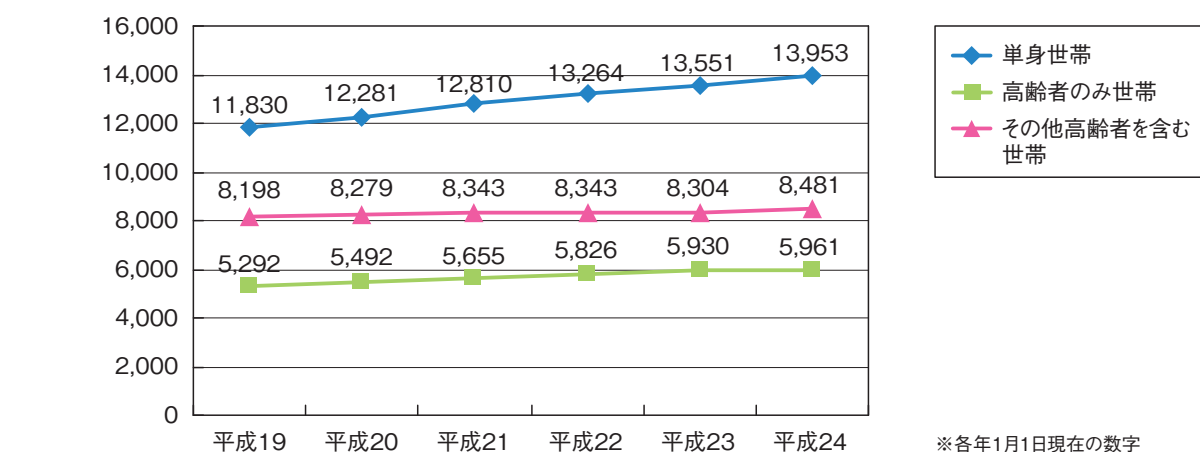
図2-6 港区の高齢者人口と高齢化率の推移



(2) 港区の高齢者を含む世帯の状況

港区の高齢者を含む世帯を、単身世帯、高齢者のみ世帯、その他の3類型に分けてその推移を示したのが図2-7である。平成19年から平成24年で最も増加しているのが単身世帯で2,123世帯増加しており、割合にして17.9%増加している。次いで増加しているのが高齢者のみ世帯数であり、669世帯増えている。割合にすると12.6%の増であった。その他の高齢者を含む世帯については、283世帯増えているが、割合にすると3.5%の増であり、他の2類型と比べて大きな変化は見られなかった。

図2-7 港区の高齢者を含む世帯の類型別推移



(3) 国勢調査結果から見る高齢者を含む2人世帯の状況

国勢調査から高齢者を含む2人世帯のうち、高齢者夫婦のみ世帯の割合をみると、港区は、54.2%(5,309世帯)であり、そのうち、どちらも75歳以上の夫婦が占める割合は19.0%(1,859世帯)であった。(表2-2)。特別区、東京都、全国の数字と比較しても、それほど違いは見られなかった。

表2-2 高齢者を含む2人世帯の状況

	港区	特別区	東京都	全国
高齢者(65歳以上)を含む2人世帯数	9,804	480,550	726,237	7,427,516
うち高齢者(65歳以上)夫婦のみ世帯数	5,309	264,413	412,426	4,339,235
高齢者(65歳以上)夫婦のみ世帯割合	54.2%	55.0%	56.8%	58.4%
うち75歳以上夫婦のみ世帯数	1,859	90,572	136,216	1,358,205
75歳以上夫婦のみ世帯割合	19.0%	18.8%	18.8%	18.3%

(資料)「平成22年国勢調査」より作成

3 港区の地区ごとの特徴について

(1) 芝地区

芝地区には、芝公園のように大規模な緑地がある一方で、新橋、汐留といった繁華街も存在する。新橋や虎ノ門、浜松町は多くの事業所が集積している地域であり、平成22年の国勢調査によると、芝地区は、夜間人口が32,369人なのに対し、昼間人口が388,819人となっており、昼夜間人口比率が港区全体で4倍強なのに対し、芝地区では約12倍と昼間人口が多いこともそれを示している。JRや地下鉄など交通網の整備も進んでいる。また大規模な開発等により、高層の事業所ビルやマンション等の建設が進められており、高層建築物も多い。

(2) 麻布地区

麻布地区は、地勢で見ると、高台や低地など起伏に富み、坂の多い地域である。区内にある大使館の半数以上が集中し、外資系企業も多く立地するなど、国際的な都市活動が展開されており、外国人居住者が区内で最も多い地域でもある。住宅地や地域に密着した工場や商業などの町並みが広がっていると同時に、六本木ヒルズ等に代表されるように新しく近代的なオフィス街や繁華街も数多く存在する。

(3) 赤坂地区

赤坂地区は、青山通りが赤坂と青山を結ぶように東西に走り、多くの商業ビル、宿泊施設が立ち並び、国内有数の繁華街を形成している。地区内には、麻布地区同様、多くの大使館が存在するとともに、外国籍の人々が多数居住している。また地価の高騰時に大きく人口の減少した赤坂・青山地区では、子ども世代が地区から転出し、親世代が地区に留まったことと家族層が転入するには住居費の負担が高いことから、年少人口比率は低く、一方65歳以上の人が占める割合は高く、今後も増えることが予想されている。

(4) 高輪地区

高輪地区は、5つの地区の中では最も面積が狭く、また、土地の高低差が大きな港区の中でも起伏の多い地区である。また居住人口は、5つの地区の中では最大だが、昼夜間人口の差は少なくなっている。これは、住宅が多く、大きな事業所が少ないことを示している。居住人口は今後も増加すると想定されている。また高輪地区には、歴史的建造物が数多く立地している一方、近年、再開発やマンション建設も進んでいる。

(5) 芝浦港南地区

芝浦港南地区は、近年の相次ぐ大規模マンションの建設等により、人口が急増している。平成 25 年1月1日現在の人口は 49,640 人で、人口の急増が始まった平成 17 年と比較すると2倍以上に増加しており、今後も人口の増加傾向が続くことが予想される。年齢別人口を見ると、年少人口と生産年齢人口の割合が高く、ファミリー層の多い地域であるといえる。また芝浦港南地区は、埋め立てによりできたことから、地区の大部分が標高 10 m 未満の低地で、区内の他地区が高低差のある地形であることと比べると、起伏の少ない平らな地形となっている。

図2-8 港区の地区



Ⅲ 基本集計

1 性別・年齢

(1) 性別

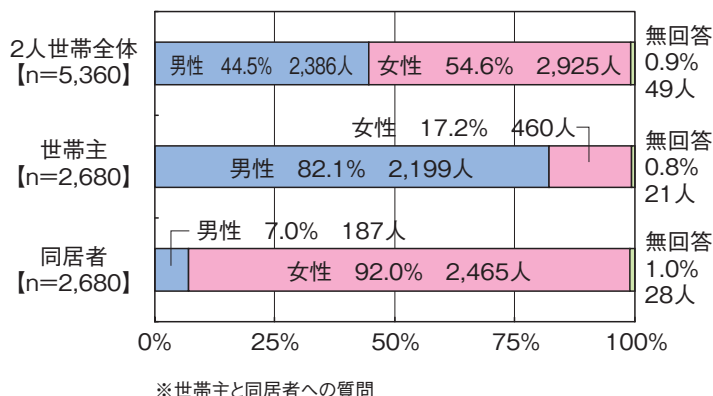
本調査回答者の性別は図 3-1 のとおりである。

2人世帯全体では、男性が44.5%、女性が54.6%と、女性の方が男性より10ポイント程度多くなっている。

世帯主と同居者の内訳を見ると、世帯主では、男性が82.1%、女性が17.2%、同居者では、男性が7.0%、女性が92.0%となっている。世帯主

では、男性が8割と大半を占めているのに対し、同居者では、女性が9割と大半を占めている。このように、2人世帯全体の性別割合は、やや女性が多いものの、世帯主と同居者では明らかな差異がみられる。

図3-1 性別

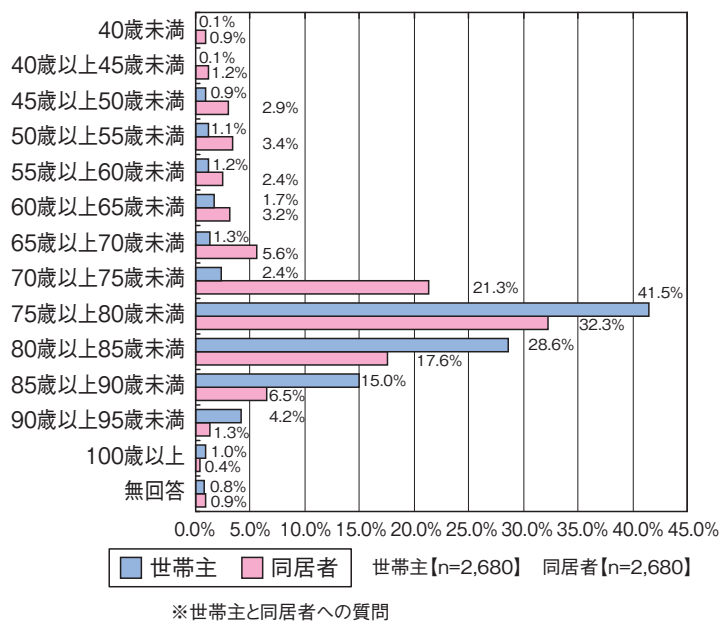


(2) 年齢

年齢構成を5歳ごとにまとめて見たものが図 3-2 である。世帯主では、最も割合の高い年齢階層は、「75 歳以上 80 歳未満」で41.5%、次いで「80 歳以上 85 歳未満」が28.6%、「85 歳以上 90 歳未満」が15.0%となっている。

一方同居者では、最も割合の高い年齢階層は、「75 歳以上 80 歳未満」で32.3%、次いで「70 歳以上 75 歳未満」が21.3%、「80 歳以上 85 歳未満」が17.6%となっている。なお、平均年齢は世帯主が79.2歳、同居者が73.6歳であり、同居者の方が6歳程度若くなっている。

図3-2 世帯主・同居者別の年齢



2 住まいについて

(1) 現在居住している地区

港区の総合支所管内別を5つに分類し、調査対象世帯と調査回答世帯の分布を見たものが表3-1である。調査対象世帯と調査回答世帯それぞれの地区の構成割合は誤差が1ポイント程度で偏りなく回収できている。

本調査の対象世帯が最も多い地区は「高輪地区」の28.8%、次いで「麻布地区」が20.4%、「赤坂地区」が19.2%、「芝地区」が18.0%、「芝浦港南地区」が13.6%となっている。

調査対象者が最も多い「高輪地区」の28.8%は、最も少ない「芝浦港南地区」の13.6%の2倍を超えており、地区により2人世帯の数に相違が見られる。

(2) 港区内在住年数

港区に住んでいる年数は、世帯主は「60年以上」が31.4%と最も高く、次いで「40年以上50年未満」が16.8%、「50年以上60年未満」が14.5%となっている。一方同居者は、「40年以上50年未満」が最も高く22.1%、次いで「50年以上60年未満」が20.6%、「60年以上」が15.9%となっている(図3-3)。

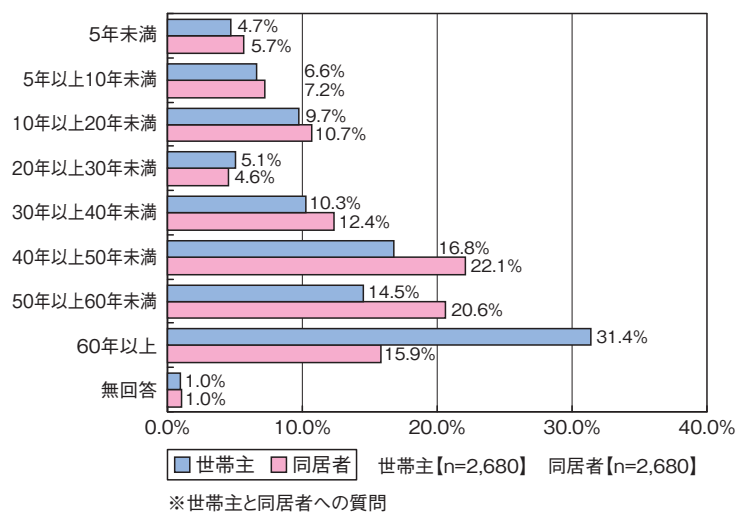
表3-1 地区ごとの調査対象者と調査回答者

地区	調査対象世帯		調査回答世帯	
	実数	%	実数	%
芝地区	938	18.0%	486	18.5%
麻布地区	1,064	20.4%	510	19.4%
赤坂地区	999	19.2%	475	18.1%
高輪地区	1,498	28.8%	791	30.1%
芝浦港南地区	707	13.6%	367	14.0%
合計	5,206	100.0%	2,629	100.0%

※世帯主への質問

※地区の無回答世帯は、調査回答世帯の実数から除いている。

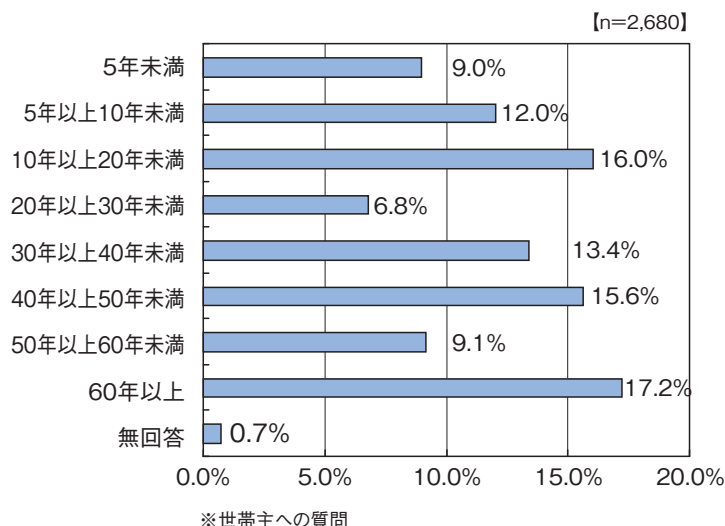
図3-3 港区内在住年数



(3) 現住所在住年数

現住所に住んでいる年数は、「60年以上」が17.2%と最も高く、次いで「10年以上20年未満」が16.0%、「40年以上50年未満」が15.6%となっている。全体として、50年以上の人が26.3%を占めている。また、10年未満という比較的最近港区に住み始めた世帯が21.0%と約2割程度を占めている(図3-4)。

図3-4 現住所在住年数



(4) 世帯主から見た同居者の種類

図3-5は世帯主から見た同居者の種類である。

「配偶者(内縁も含む)」が最も高く75.4%、次いで「子ども」が13.2%、「親」が6.1%となっている。

世帯類型を「夫婦世帯」「親子世帯」「その他」に分類して集計したものが表3-2である。この表から、「夫婦世帯」が75.4%、「親子世帯」が19.3%を占めていることがわかる。

図3-5 世帯主から見た同居者の種類

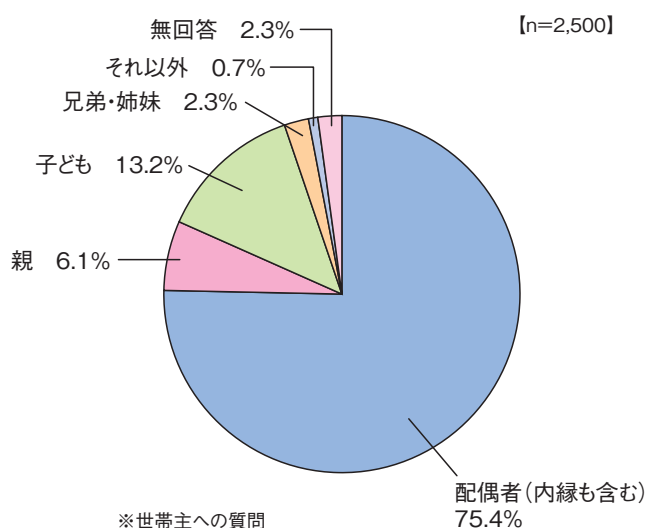


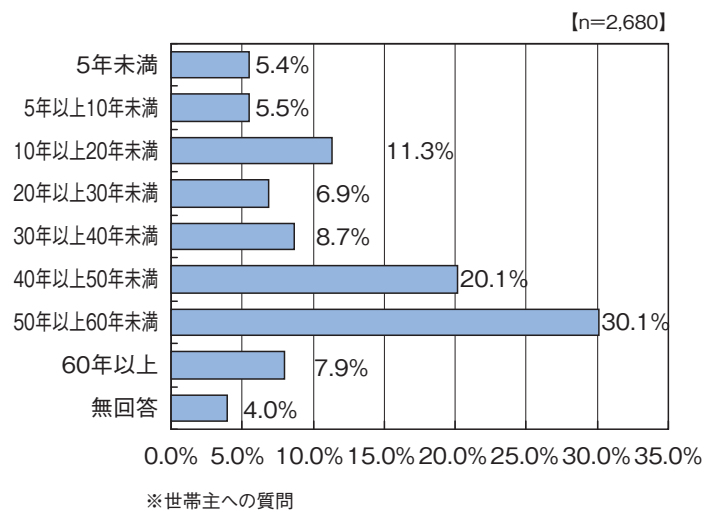
表3-2 世帯類型

	実数	%
夫婦世帯	2,021	75.4%
親子世帯	518	19.3%
その他	80	3.0%
無回答	61	2.3%
合計	2,680	100.0%

(5) ふたり暮らしの期間

ふたり暮らしの期間は、「5 年未満」が 5.4%、10 年未満の合計が 10.9% となっている。他方、10 年以上の合計は 85.0%と全体の 8 割以上を占めている。さらに、50 年以上の合計は、38.0%と全体の 4 割近くを占めている。このように、ふたり暮らしの期間が長い世帯が大半を占めている（図 3-6）。

図3-6 ふたり暮らしの期間

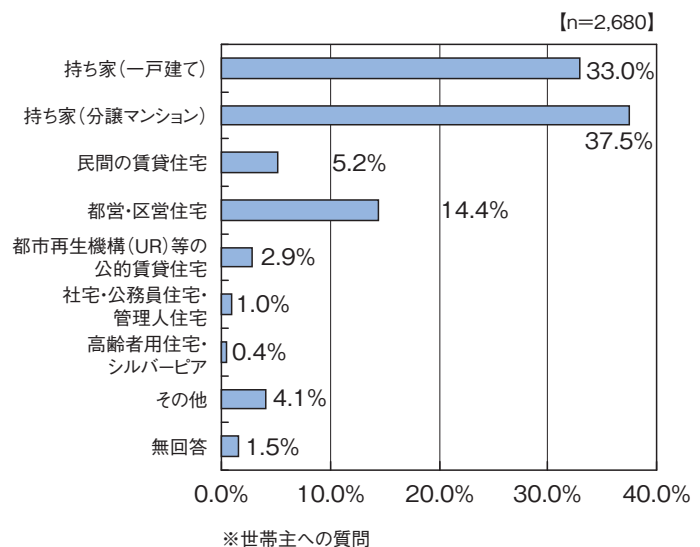


(6) 住宅の種類

住宅の種類について集計した（図 3-7）。

「持ち家（分譲マンション）」が 37.5%と最も高く、次いで「持ち家（一戸建て）」が 33.0%、「都営・区営住宅」が 14.4%となっている。このように、2人世帯が住んでいる住宅の種類は「持ち家」が7割を超え、大半を占めている。

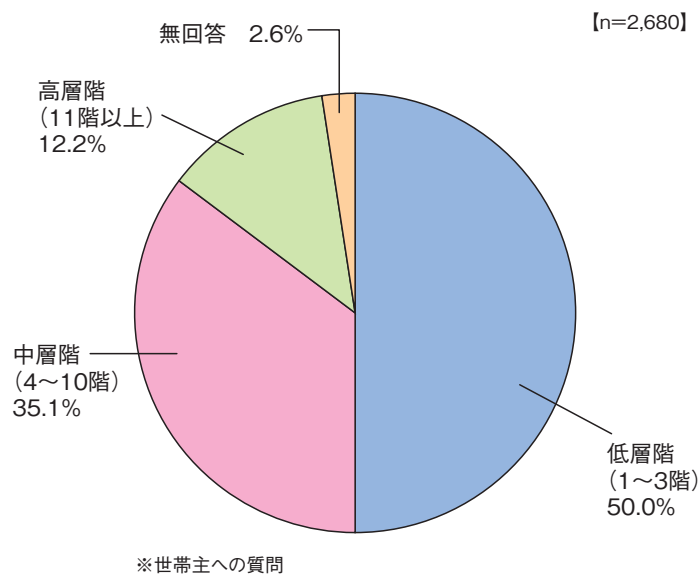
図3-7 住宅の種類



(7) 居住階

居住する階（主に生活する部屋）は、「低層階」が50.0%と最も多く、次いで「中層階」が35.1%、高層階12.2%となっている（図3-8）。

図3-8 居住階

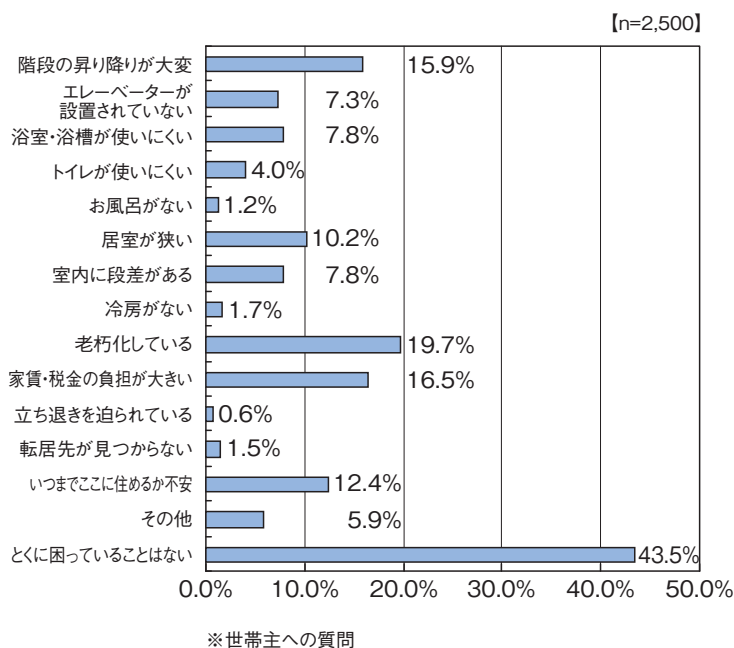


(8) 住宅の困りごと

図3-9は住宅の困りごとについて見たものである。まず、「老朽化している」が19.7%と最も高く、次いで「家賃・税金の負担が大きい」が16.5%、「階段の昇り降りが大変」が15.9%となっている。また、1割を超える世帯が「いつまでここに住めるか不安」と回答している。

他方、全体の43.5%が「とくに困っていることはない」と答えている。

図3-9 住宅の困りごと（複数回答）



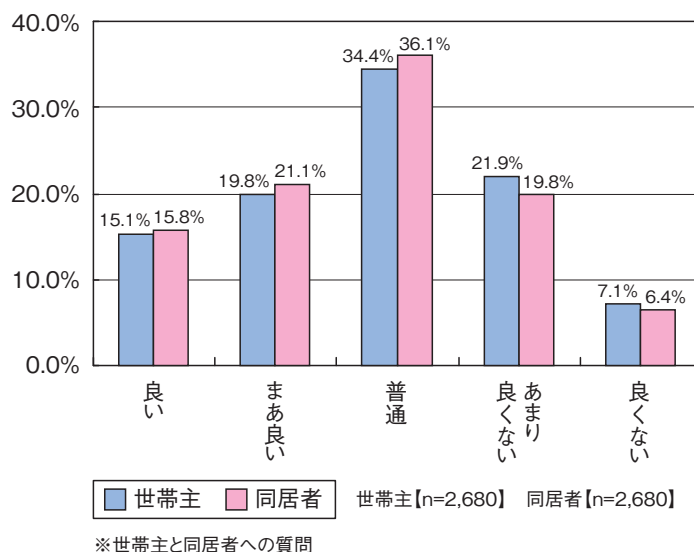
3 健康状態

(1) 本人の健康状態についての意識

本人が健康状態についてどのように意識しているかを図 3-10 によって見てみよう。世帯主は、「普通」が 34.4%と最も高く、次いで「あまり良くない」が 21.9%、「まあ良い」が 19.8%となっている。

一方同居者は、「普通」が 36.1%と最も高く、次いで「まあ良い」が 21.1%、「あまり良くない」が 19.8%となっている。

図3-10 本人の健康状態意識



(2) 日常生活での介助の必要性

日常生活での介助の必要性は、世帯主は「ほとんど自分でできる」が 78.0%と最も高く、次いで「一部介助を必要とする」が 16.1%、「ほとんどすべてに介助を必要とする」が 3.8%と回答している(図 3-11)。

また同居者についても、「ほとんど自分でできる」が最も高く 76.8%、次いで「一部介助を必要とする」が 12.6%、「ほとんどすべてに介助を必要とする」が 3.1%の順で多くなっている(図 3-12)。

では、同居相手から見た介助の必要性についてはどうか。

世帯主は自身の状況について、78.0%が「ほとんど自分でできる」と回答していたが、同居者から見た世帯主の介助の状況では、「ほとんど自分でできる」68.0%にとどまっている(図 3-11)。

一方同居者は、本人と世帯主からの回答に差は見られなかった(図 3-12)。

図3-11 世帯主の介助の必要性

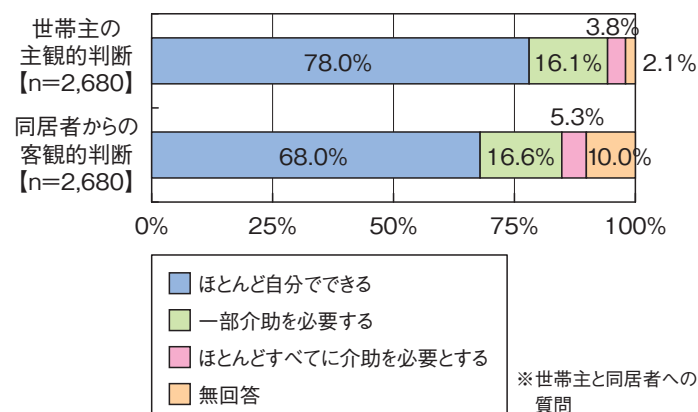
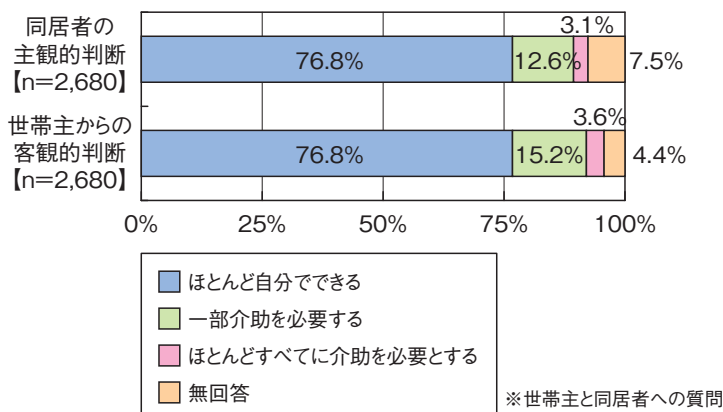


図3-12 同居者の介助の必要性



(3) 介護保険の要介護度

介護保険の要介護度は、世帯主が「要支援1」が4.9%と最も高く、次いで「要支援2」「要介護1」がそれぞれ3.4%、「要介護2」3.2%となっている（図3-13）。

一方同居者は、「要支援1」が4.1%と最も高く、次いで「要支援2」が2.5%、「要介護2」が2.2%となっている。「要介護認定の申請をしていない」人は、世帯主が59.2%、同居者が60.0%となっている。

全体として要介護認定を受けている人は16.3%となる（図3-14）。他方、「要介護認定の申請をしていない」人は全体の59.6%であった。

図3-13 介護保険の要介護度

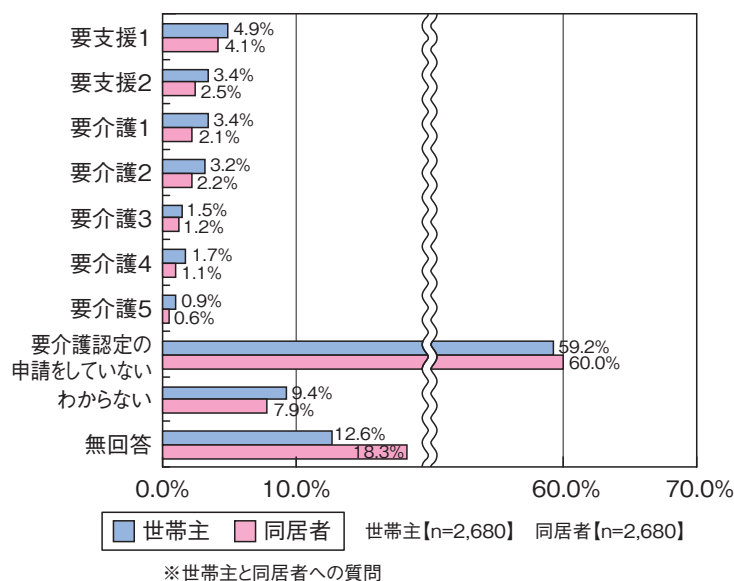
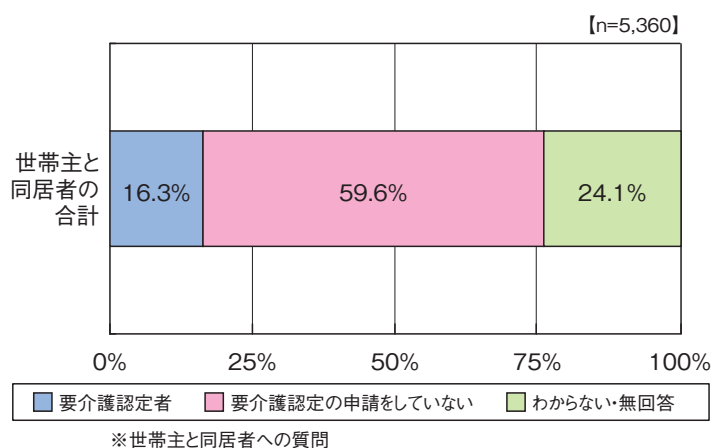


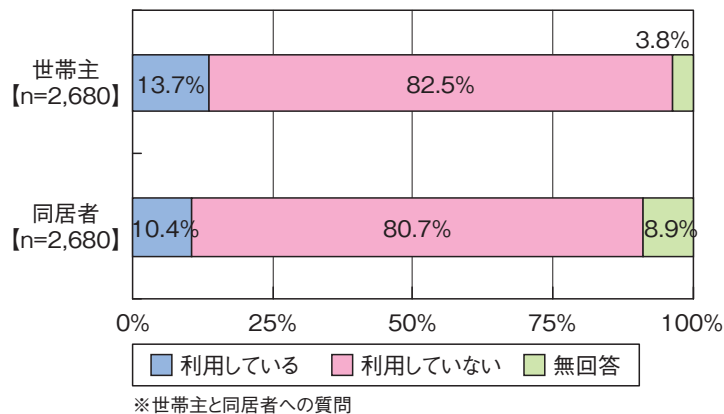
図3-14 介護保険の要介護認定者割合



(4) 介護保険サービスの利用状況

介護保険サービスの利用状況は、世帯主、同居者ともに「利用していない」が8割を占めている。他方「利用している」は両者とも1割程度となっている（図3-15）。

図3-15 介護保険サービスの利用状況



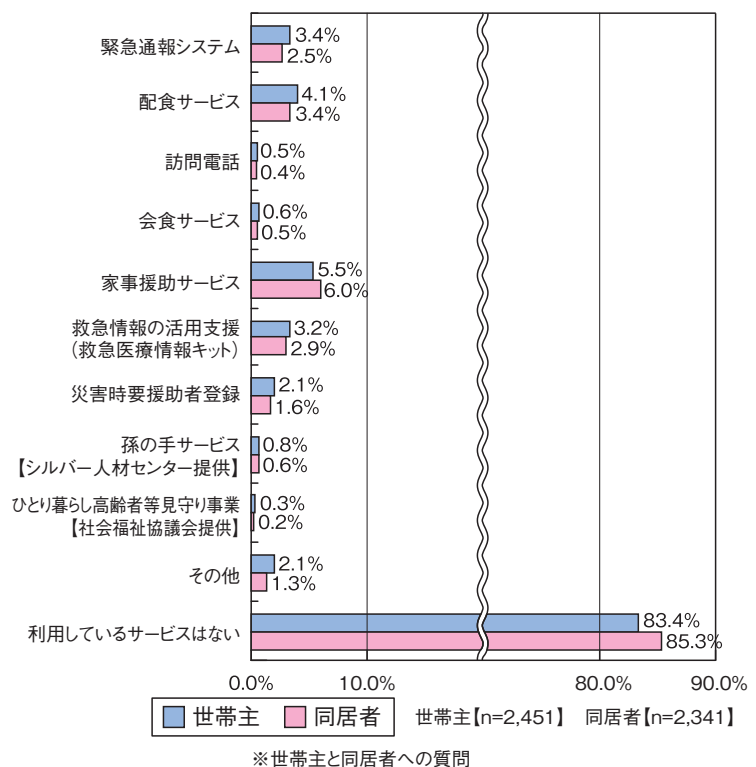
(5) 保健福祉サービスの利用状況

世帯主、同居者ともに「利用していない」が8割を超えており、「利用している」は世帯主は16.6%、同居者は14.7%となっている。

利用している保健福祉サービスの種類（図3-16）は、世帯主が「家事援助サービス」が5.5%と最も高く、次いで「配食サービス」4.1%、「緊急通報システム」が3.4%となっている。

一方同居者は、「家事援助サービス」が6.0%と最も高く、次いで「配食サービス」が3.4%、「救急情報の活用支援（救急医療情報キット）」が2.9%となっている。

図3-16 保健福祉サービスの種類（複数回答）



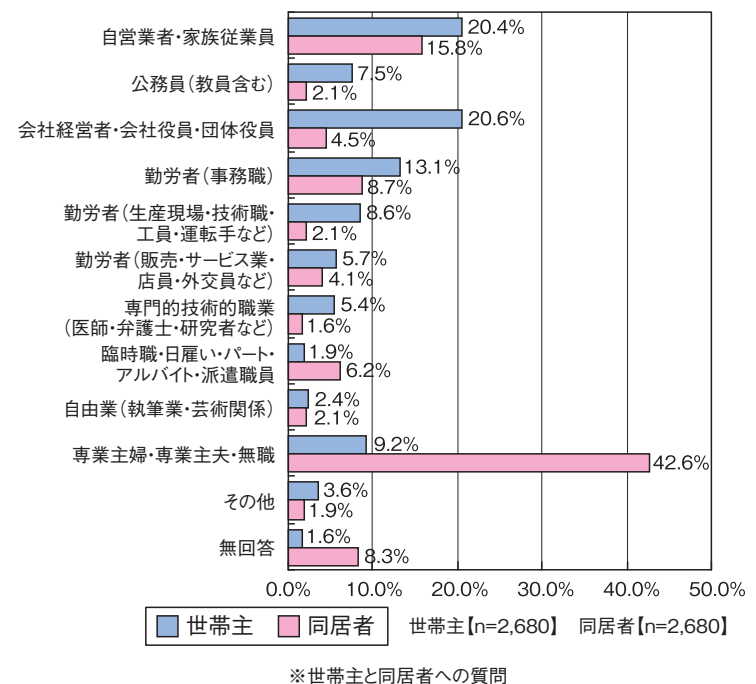
4 職業について

(1) 本人の最長職

最長職は、世帯主は「会社経営者・会社役員・団体役員」が20.6%と最も高く、次いで「自営業者・家族従業員」が20.4%、「勤労者（事務職）」が13.1%となっている（図3-17）。

一方同居者は、「専業主婦・専業主夫・無職」が最も高く42.6%、次いで「自営業者・家族従業員」が15.8%、「勤労者（事務職）」が8.7%となっている。

図3-17 本人の最長職



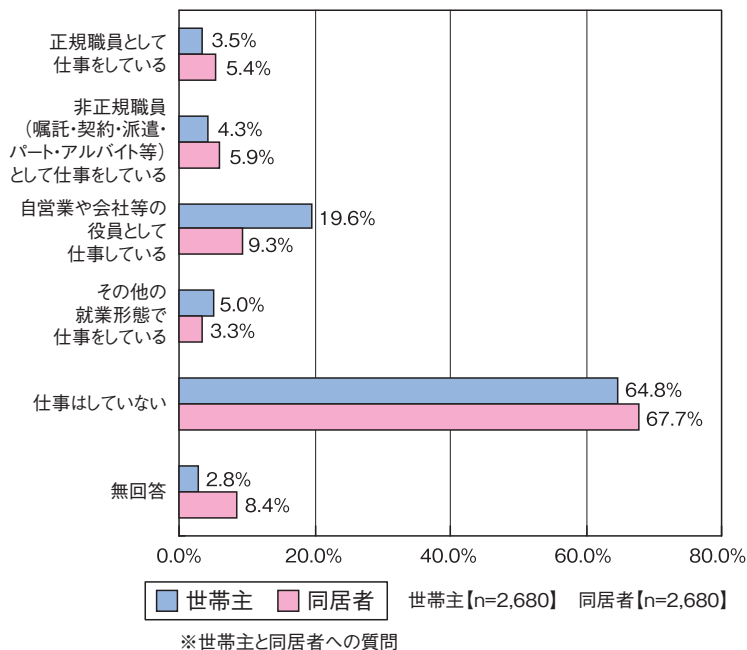
(2) 現在の仕事の有無

世帯主、同居者ともに「仕事はしていない」が6割を超えている。「仕事をしている」人は、世帯主が32.4%、同居者が23.9%となっている。

仕事の内訳は、世帯主は「自営業や会社等の役員」が19.6%と最も高く、次いで「その他の就業形態」が5.0%、「非正規職員（嘱託・契約・派遣・パート・アルバイト等）」が4.3%となっている（図3-18）。

一方同居者は、「自営業や会社等の役員」が最も高く9.3%、次いで「非正規職員（嘱託・契約・派遣・パート・アルバイト等）」が5.9%、「正規職員」が5.4%となっている。

図3-18 現在の仕事の有無



5 地域・生活での困りごと

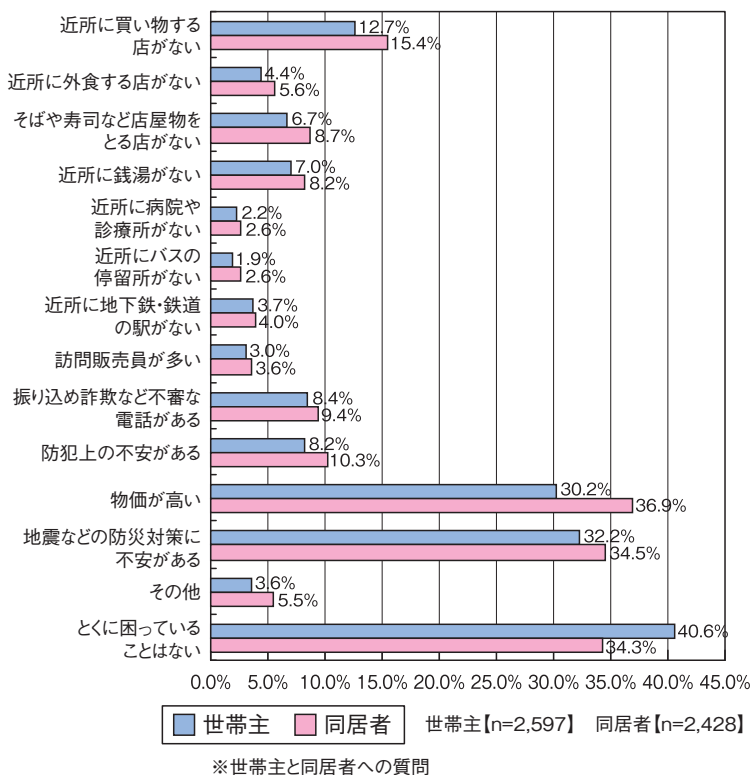
(1) 地域での困りごと

地域での困りごとについて複数回答でたずねた。世帯主は「地震などの防災対策に不安がある」が32.2%と最も高く、次いで「物価が高い」が30.2%、「近所に買い物をする店がない」が12.7%となっている（図3-19）。

同居者は、「物価が高い」が最も高く36.9%、次いで「地震などの防災対策に不安がある」が34.5%、「近所に買い物をする店がない」が15.4%となっている。

なお、世帯主の40.6%、同居者の34.3%が「とくに困っていることはない」と回答している。

図3-19 地域での困りごと（複数回答）



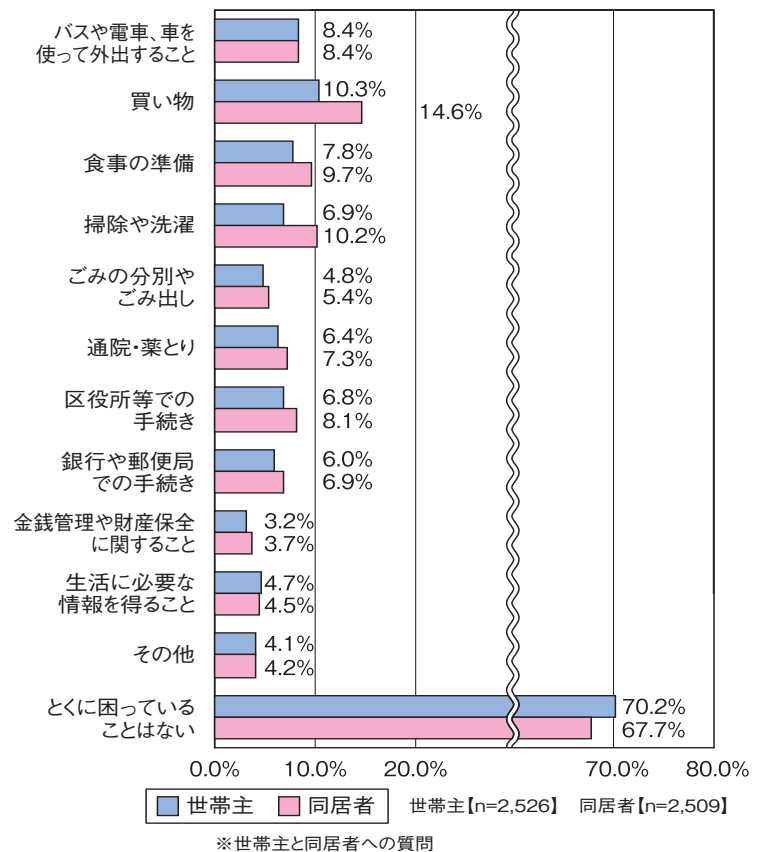
(2) 日常生活での困りごと

日常生活地域での困りごとについて複数回答でたずねた。世帯主は「買い物」が10.3%と最も高く、次いで「バスや電車、車を使って外出すること」が8.4%、「食事の準備」が7.8%となっている(図3-20)。

同居者は、「買い物」が最も高く14.6%、次いで「掃除や洗濯」が10.2%、「食事の準備」が9.7%となっている。

なお、世帯主の70.2%、同居者の67.7%が「とくに困っていることはない」と回答している。

図3-20 日常生活での困りごと(複数回答)



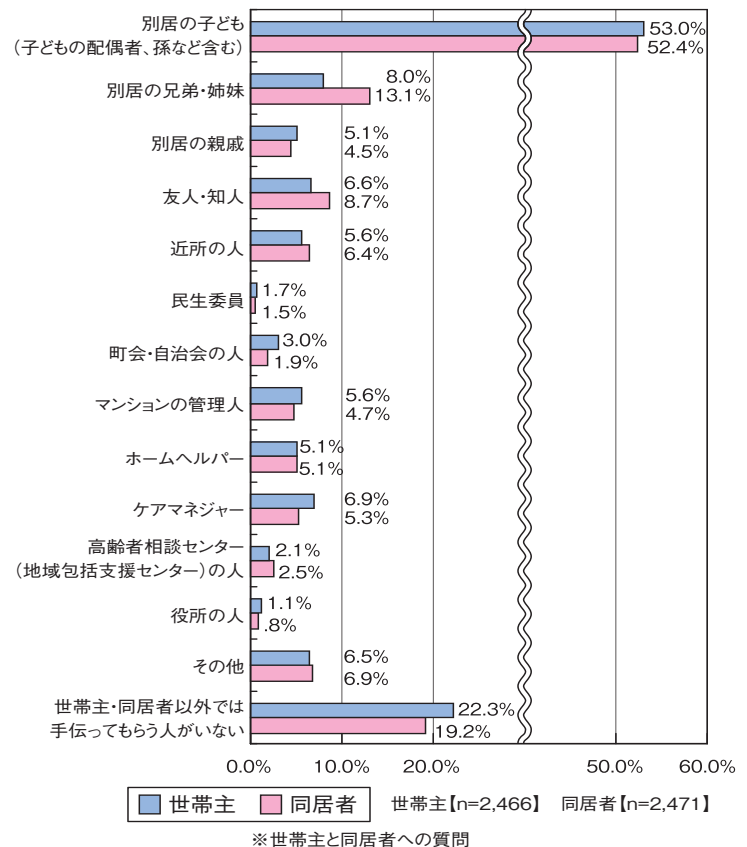
(3) 世帯主・同居者以外に困りごとを手伝ってもらう人

困りごとを手伝ってもらう人は誰かにについて複数回答でたずねた。世帯主は「別居の子ども(子どもの配偶者、孫など含む)」が53.0%と最も高く、次いで「別居の兄弟・姉妹」が8.0%、「ケアマネジャー」が6.9%となっている(図3-21)。

同居者は、「別居の子ども(子どもの配偶者、孫など含む)」が最も高く52.4%、次いで「別居の兄弟・姉妹」が13.1%、「友人・知人」が8.7%となっている。このように、困ったときに手伝ってもらう人は世帯主、同居者とも5割が「別居の子ども」、そして「別居の兄弟・姉妹」が約1割となっている。ただし、これらは複数回答であるので重なりがあることに注意したい。

なお、世帯主の22.3%、同居者の19.2%が「世帯主・同居者以外では手伝ってもらう人がいない」と回答している。

図3-21 困りごとを手伝ってもらう人(複数回答)



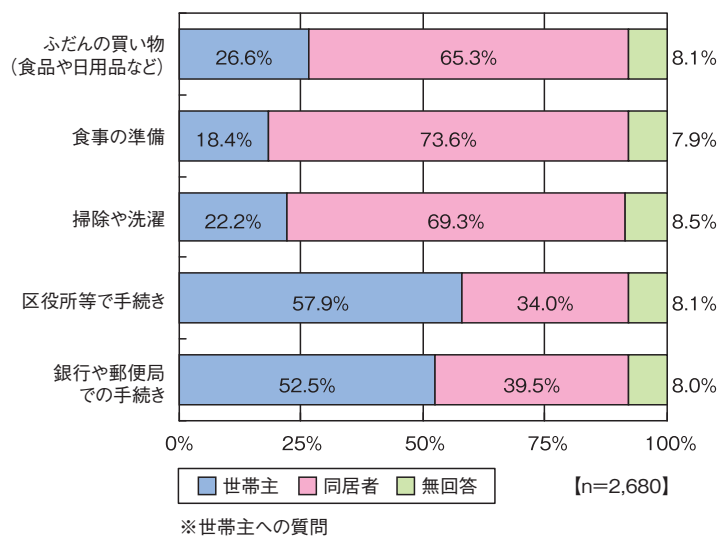
(4) 家事や手続き

家事や手続きをおもに担当している人についてたずねた。同居者が「ふだんの買い物（食品や日用品など）」の65.3%、「食事の準備」73.6%、「掃除や洗濯」69.3%を担当しており、世帯主は2割から2割半程度となっている。

一方、「区役所等での手続き」「銀行や郵便局での手続き」は、世帯主がそれぞれ57.9%、52.5%と同居者よりも高い割合で担当している。

図3-22からは、家事は主に同居者が行う傾向にあり、家の外での手続きは半数以上の世帯主が担当していることがわかる。

図3-22 家事や手続き

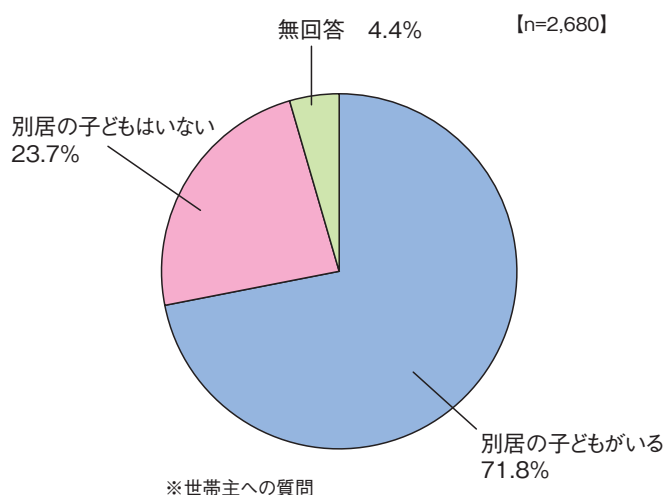


6 家族・親族関係について

(1) 別居の生存子の有無

現在、別居の子どもがいるかどうかについてたずねた（図3-23）。「別居の子どもがいる」が71.8%、「別居の子どもはいない」が23.7%であった。別居の子どもがいる世帯は7割強であった。

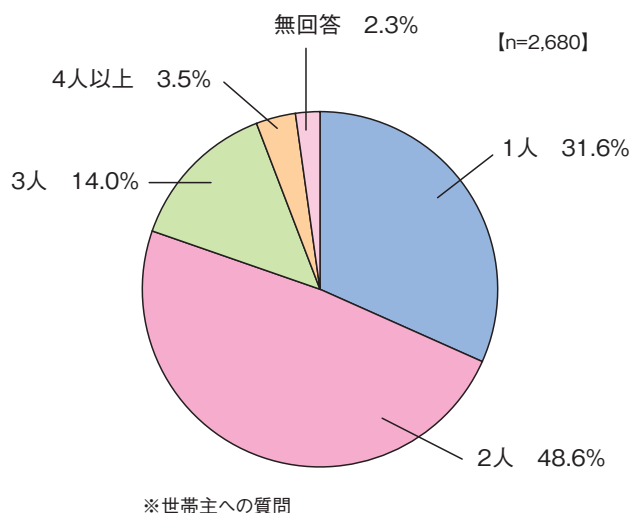
図3-23 別居の生存子の有無



(2) 別居の生存子の人数

別居の子どもの人数を見てみると（図3-24）、「2人」が48.6%と最も高く、次いで「1人」31.6%、「3人」14.0%となっている。

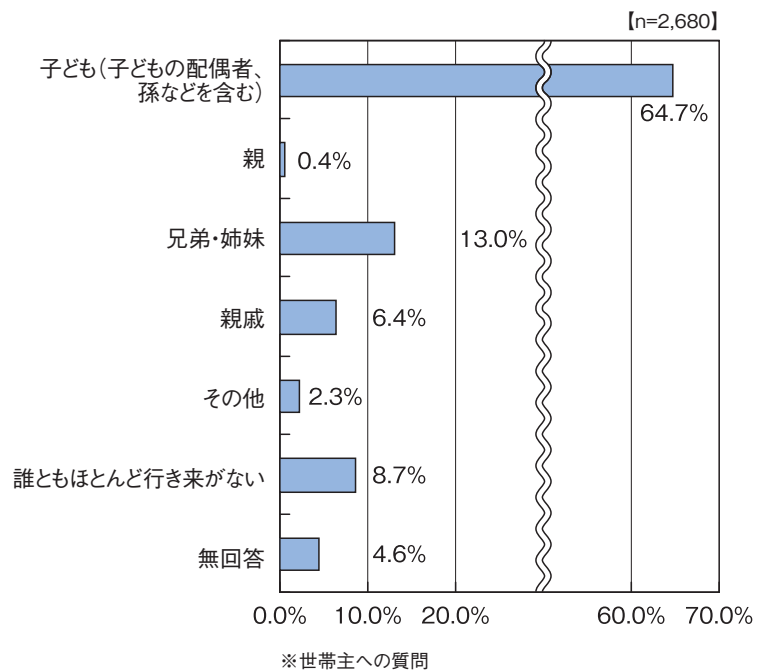
図3-24 別居の生存子の人数



(3) 行き来する親族

日ごろ最も行き来する親族については、「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」が64.7%と最も高く、次いで「兄弟・姉妹」が13.0%、「親戚」が6.4%となっている（図3-25）。このように、子どもと親、兄弟姉妹で78.1%と約8割を占めるが、行き来がない世帯が1割近くいる。

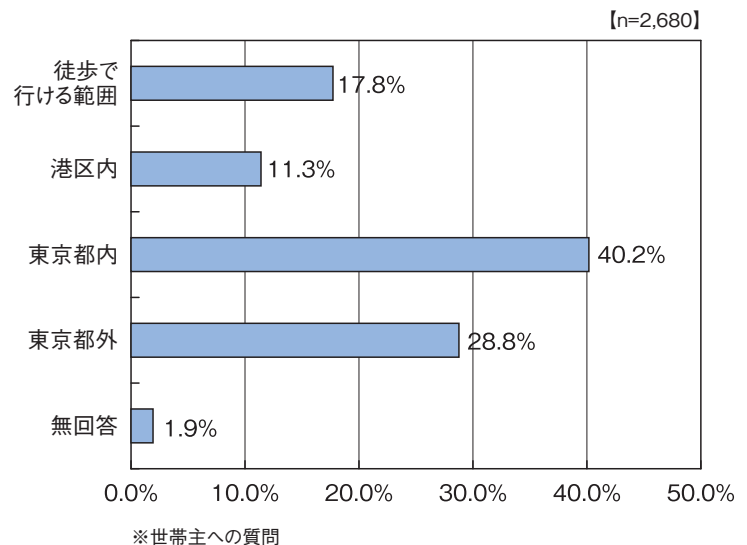
図3-25 行き来する親族



(4) 行き来する親族の居住地

次に、日ごろ最も行き来する親族がどこに住んでいるかを見てみよう（図3-26）。その居住地は、「東京都内」、「港区内」と「徒歩で行ける範囲」の3つを合わせると69.3%となる。つまり7割弱は、東京都内に住んでいることがわかる。また、「港区内」、「徒歩で行ける範囲」を合わせると、全体の29.1%となり、親族が港区内及び（徒歩で行ける）その近隣区に居住している世帯は全体の3割弱を占めている。

図3-26 行き来する親族の居住地

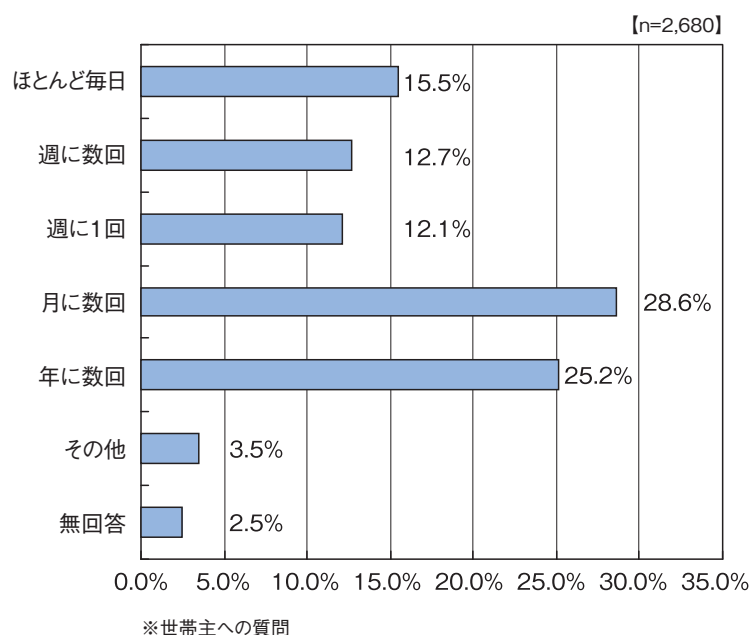


(5) 行き来する親族との連絡頻度

日ごろ最も行き来する親族との連絡頻度は、「月に数回」が28.6%と最も高く、次いで「年に数回」25.2%、「ほとんど毎日」が15.5%となっている。「ほとんど毎日」、「週に数回」と「週に1回」の3つを合わせると40.3%となる。このように親族との連絡頻度が週に1回以上と高い人が全体の4割となる(図3-27)。

一方で連絡頻度が年数回の世帯が2割半となっている。

図3-27 行き来する親族との連絡頻度

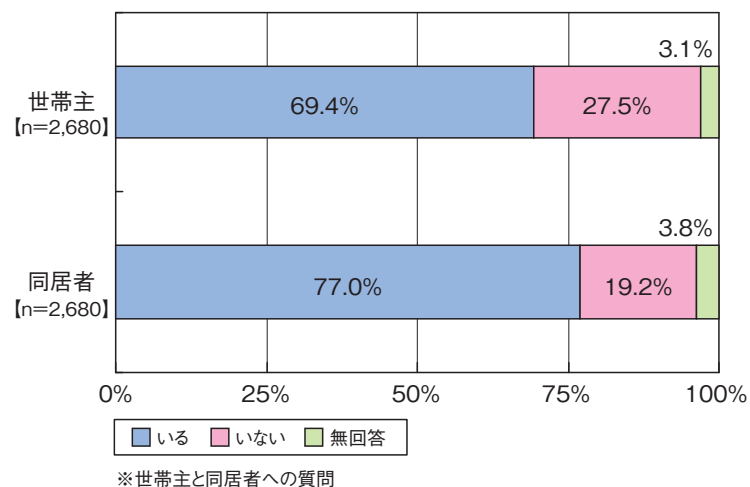


7 友人および近隣関係

(1) 親しい友人・知人の有無

日ごろ親しくしている友人・知人がいるか否かについては(図3-28)、世帯主は「いる」が69.4%、「いない」が27.5%となっている。一方、同居者は「いる」が77.0%、「いない」が19.2%となっている。親しくしている友人・知人のいる人の割合は、同居者の方が世帯主よりも8ポイント近く高くなっている。

図3-28 親しい友人・知人の有無



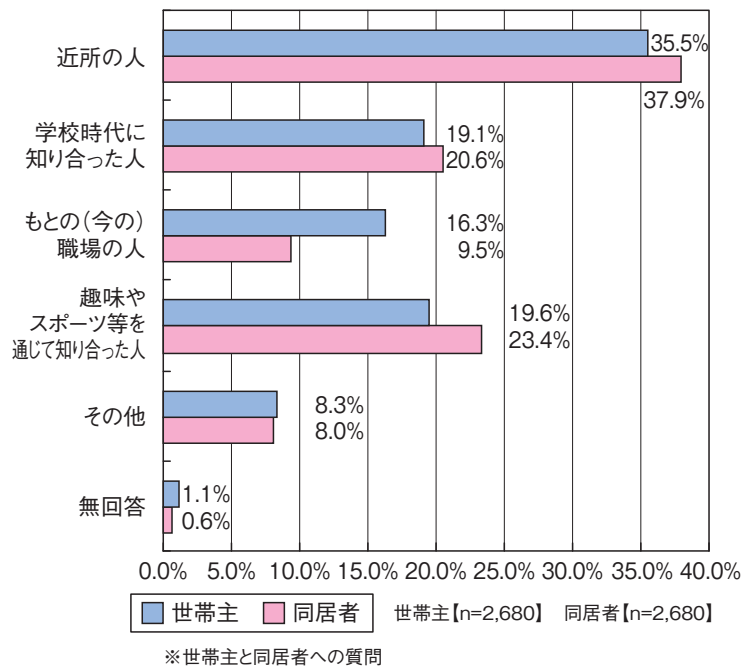
(2) 親しい友人・知人の種類

日ごろ親しくしている友人・知人は誰かについては(図 3-29)、世帯主は「近所の人」が 35.5%と最も高く、次いで「趣味やスポーツ等を通じて知り合った人」が 19.6%、「学校時代に知り合った人」が 19.1%となっている。

一方同居者は、「近所の人」が最も高く 37.9%、次いで「趣味やスポーツ等を通じて知り合った人」が 23.4%、「学校時代に知り合った人」が 20.6%となっている。

世帯主と同居者では、親しくしている友人・知人の種類はほぼ同じ割合であったが、「もとの(今の)職場の人」に関しては、世帯主が 16.3%、同居者が 9.5%と開きがあり、世帯主の方が同居者より、職場の人と親しくしていることが分かる。

図3-29 親しい友人・知人の種類



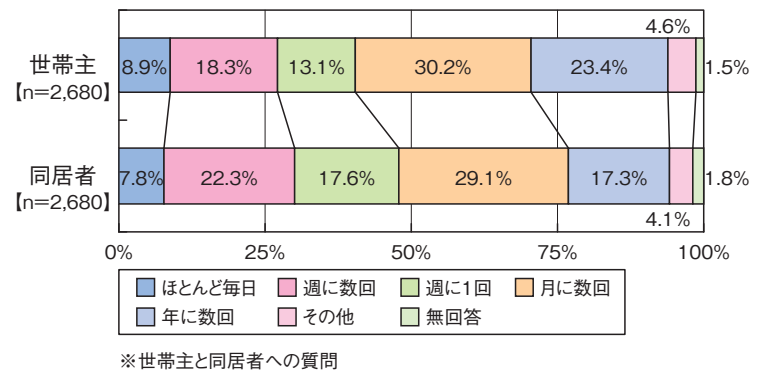
(3) 友人・知人との連絡頻度

日ごろ親しくしている友人・知人との連絡頻度は、世帯主が「月に数回」が 30.2%と最も高く、次いで「年に数回」23.4%、「週に数回」が 18.3%となっている(図 3-30)。一方同居者は、「月に数回」が 29.1%と最も高く、次いで「週に数回」が 22.3%、「週に1回」が 17.6%となっている。

「ほとんど毎日」、「週に数回」と「週に1回」の3つを合わせると、世帯主が 40.3%、同居者は 47.7%と、連絡頻度が週に1回以上と高い人が両者とも4割を超えている。

友人・知人との連絡頻度は、同居者の方が世帯主よりも比較的高い傾向にある。

図3-30 友人・知人との連絡頻度

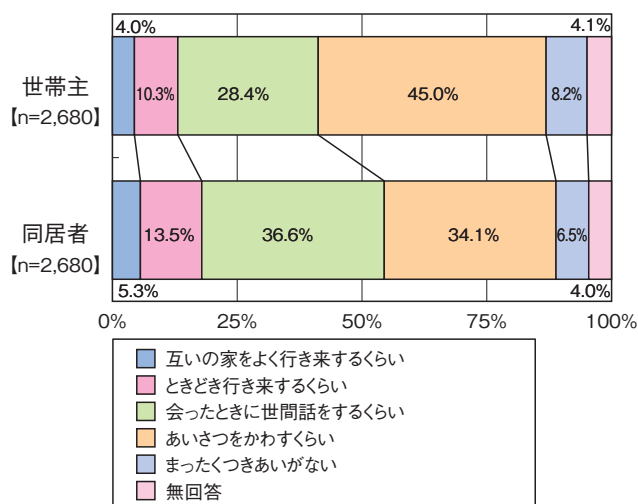


(4) 近所づきあいの程度

近所づきあいの程度については、世帯主は「あいさつをかわすくらい」が45.0%と最も高く、次いで「会ったときに世間話をするくらい」28.4%、「ときどき行き来するくらい」が10.3%となっている(図3-31)。一方同居者は、「会ったときに世間話をするくらい」が36.6%と最も高く、次いで「あいさつをかわすくらい」が34.1%、「ときどき行き来するくらい」が13.5%となっている。

「あいさつをかわすくらい」と「まったくつきあいがいい」を合わせた近所とのつきあいがあまりない人が、世帯主53.2%、同居者40.6%となっており、世帯主の方が近所づきあいが少ない傾向にある。

図3-31 近所づきあいの程度



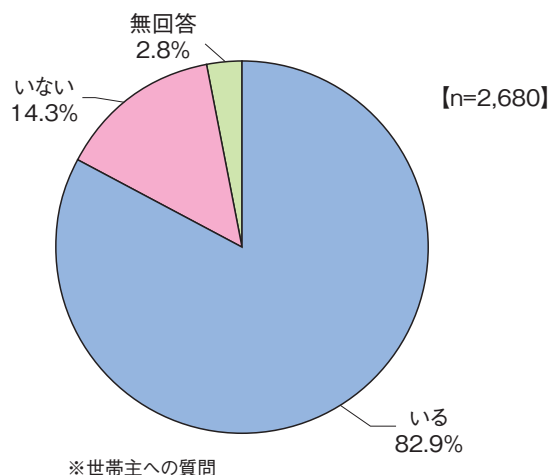
※世帯主と同居者への質問

8 緊急時の支援者と正月を過ごした相手

(1) 緊急時の支援者の有無

緊急時（病気などで手助けを必要とする時）にすぐに支援をしてくれる人がいるかどうかについては（図3-32）、「いる」が82.9%、「いない」は14.3%である。このように緊急時に支援者がいない世帯は1割半となっている。

図3-32 緊急時の支援者の有無

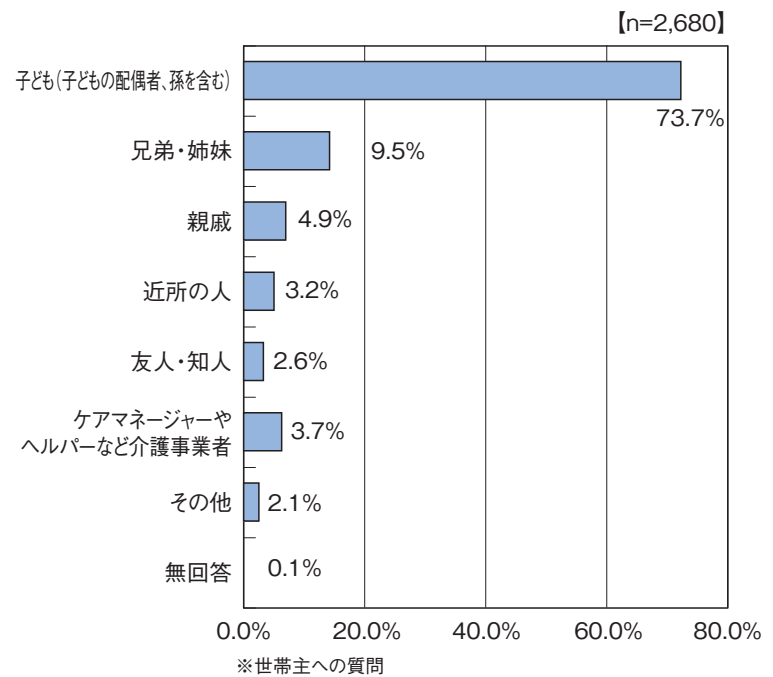


※世帯主への質問

(2) 緊急時の支援者の種類

緊急時の主な支援者は誰かを図3-33で見てみよう。「子ども(子どもの配偶者、孫を含む)」が圧倒的に高く、73.7%を占めた。次いで「兄弟・姉妹」9.5%、「親戚」が4.9%となっている。なお、「ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者」は3.7%、「近所の人」は3.2%であった。

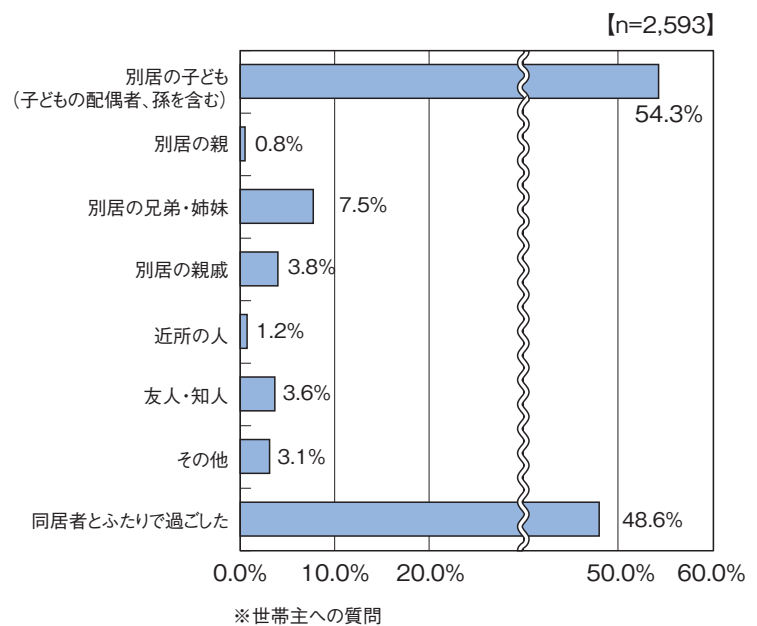
図3-33 緊急時の支援者の種類



(3) 正月三が日を過ごした相手

日本では、正月は親族との接触機会が多く、親族ネットワークの実情が把握できる時期である。そこで「正月三が日」を過ごした相手をたずねた。その相手は(図3-34、複数回答)、「別居の子ども(子どもの配偶者、孫を含む)」54.3%と最も高く、次いで「同居者と2人で過ごした」が48.6%、「別居の兄弟・姉妹」が7.5%となっている。他方、「同居者と2人で過ごした」世帯は48.6%と全体の約半数を占めている。

図3-34 正月三が日を過ごした相手(複数回答)

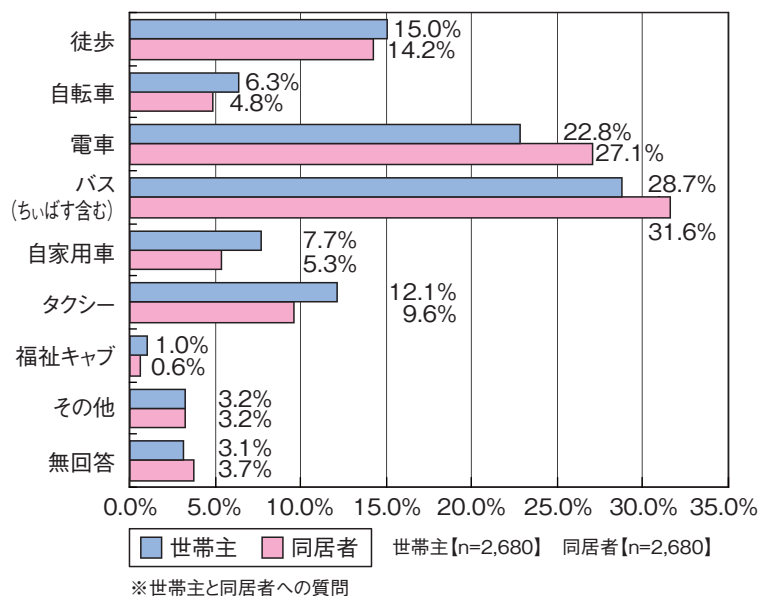


9 外出状況について

(1) 主な外出手段

普段外出する際の主な外出手段はどのようなものかたずねた。図 3-35 のとおり、世帯主は「バス(ちいばす含む)」が 28.7%と最も高く、次いで「電車」22.8%、「徒歩」が 15.0%となっている。一方同居者は、「バス(ちいばす含む)」が 31.6%と最も高く、次いで「電車」が 27.1%、「徒歩」が 14.2%となっている。なお「ちいばす」とは、港区のコミュニティ・バスのことである。

図3-35 主な外出手段

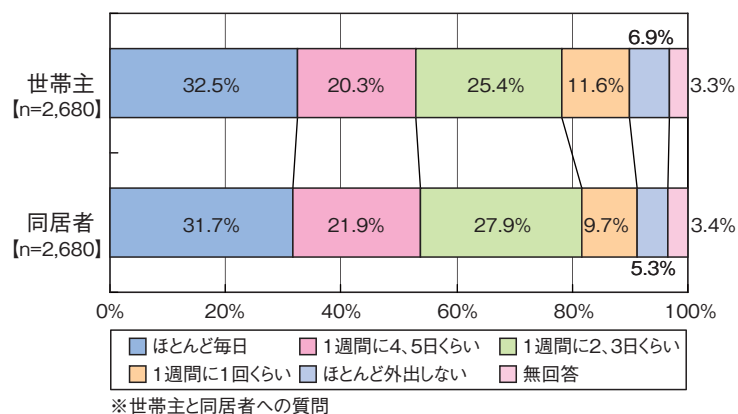


(2) 外出の頻度

外出の頻度について、図 3-36 によって見ると、世帯主が「ほとんど毎日」が 32.5%と最も高く、次いで「1週間に2、3日くらい」25.4%、「1週間に4、5日くらい」が 20.3%となっている。一方同居者は、「ほとんど毎日」が 31.7%と最も高く、次いで「1週間に2、3日くらい」が 27.9%、「1週間に4、5日くらい」が 21.9%となっている。

他方、外出頻度が、「ほとんど外出しない」「1週間に1回くらい」を合わせて、外出頻度の少ない人は、世帯主が 18.5%、同居者が 15.0%であった。

図3-36 外出の頻度

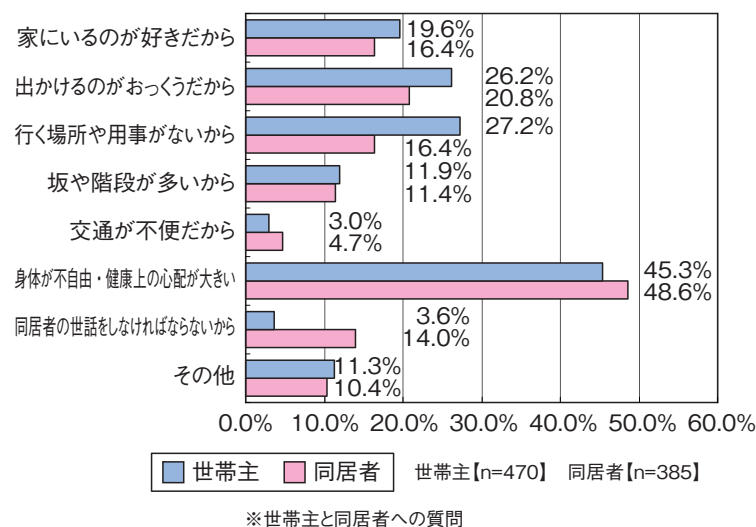


(3) 外出が少ない理由

外出頻度が「ほとんど外出しない」「1週間に1回くらい」と回答した人に、外出が少ない理由をたずねた(図3-37、複数回答)。世帯主は「身体が不自由・健康上の心配が大きい」が45.3%と最も高く、次いで「行く場所や用事がないから」27.2%、「出かけるのがおっくうだから」26.2%となっている。一方同居者は、「身体が不自由・健康上の心配が大きい」が48.6%と最も高く、次いで「出かけるのがおっくうだから」20.8%、「行く場所や用事がないから」と「家にいるのが好きだから」16.4%となっている。世帯主、同居者間に大きな差が見られないが、世帯主は「出かけるのがおっくうだから」や「行く場所や用事がないから」など自身の都合を理由に挙げる人が同居者よりもやや多くなる傾向にある。

また、同居者は、「同居者の世話をしなくてはならないから」を理由に挙げる人が世帯主より多い。

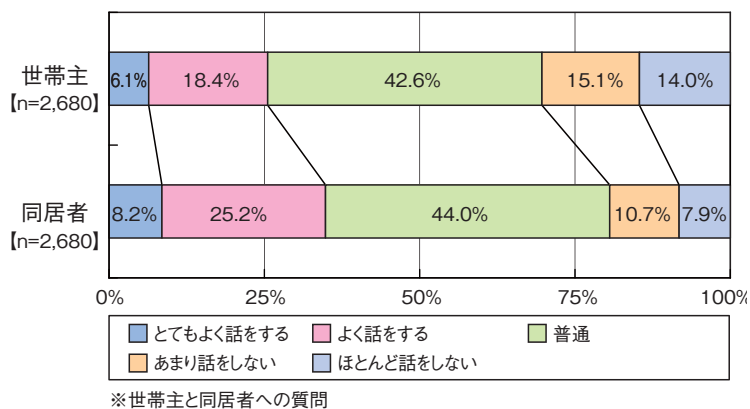
図3-37 外出が少ない理由(複数回答)



(4) 外出先での会話の程度

外出先の会話の程度について(図3-38)、世帯主が「普通」が42.6%と最も多く、次いで「よく話をする」が18.4%となっている。一方同居者は、「普通」が44.0%と最も多く、次いで「よく話をする」が25.2%となっている。他方、「あまり話をしない」「ほとんど話をしない」人は、世帯主が29.1%、同居者が18.6%となっている。外出先での会話が少ないあるいはほとんどない人が、世帯主の約3割、同居者の2割近くを占めており、特に世帯主は外出をしても会話の少ない人が同居者より多くなる傾向がある。

図3-38 外出先での会話の程度



10 社会参加活動について

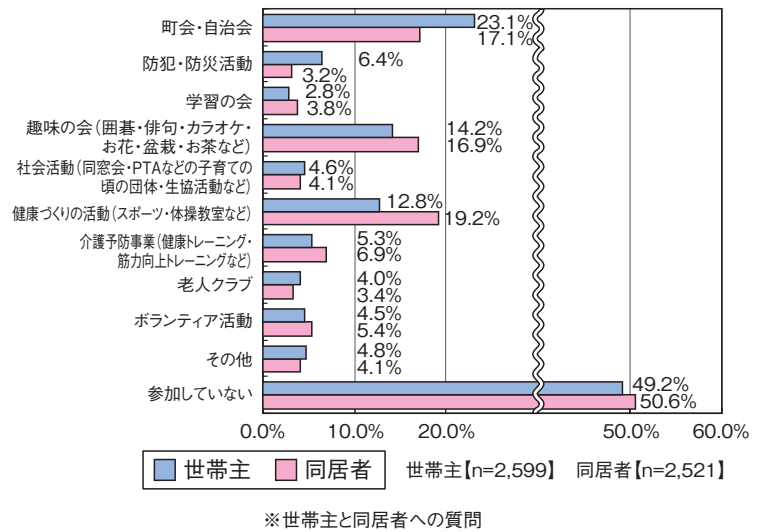
(1) 参加している団体・集まり

参加している団体・集まりについて、世帯主は「町会・自治会」が23.1%と最も多く、次いで「趣味の会（囲碁・お茶など）」が14.2%、「健康づくりの活動（スポーツ・体操教室など）」12.8%となっている（図3-39、複数回答）。

同居者は、「健康づくりの活動（スポーツ・体操教室など）」が19.2%と最も多く、次いで「町会・自治会」が17.1%、「趣味の会（囲碁・お茶など）」16.9%となっている。なお、「参加していない」人は、世帯主が49.2%、同居者が50.6%と、全体の約半数を占めている。

一方団体・集まりを個別に見ていくと、「町会・自治会」「防犯・防災活動」など地域活動に関するものは、世帯主がより参加する傾向にあり、「趣味の会」や「健康づくりの活動」など自身の趣味や健康に関するものは同居者がより参加する傾向にある。

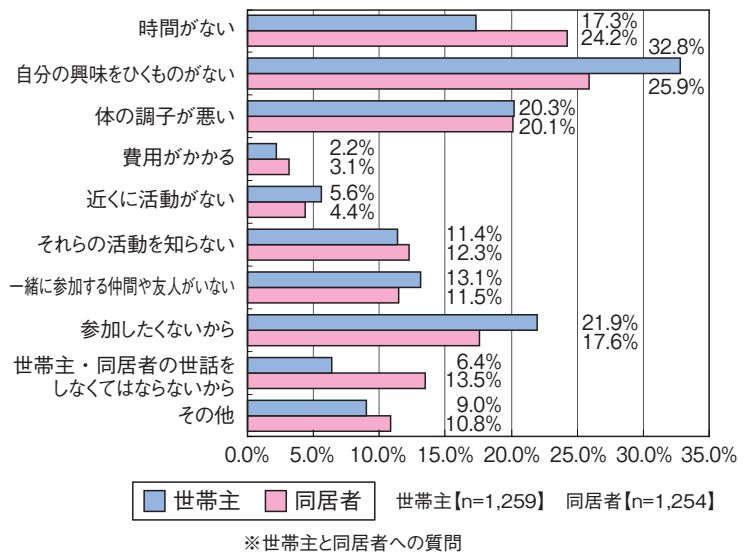
図3-39 参加している団体・集まり（複数回答）



(2) 団体・集まりの活動に参加しない理由

全体の半数を占める「団体・集まりに参加していない」人に、参加しない理由をたずねた。その結果（図3-40、複数回答）、世帯主は「自分の興味をひくものがない」が32.8%と最も多く、次いで「参加したくないから」が21.9%、「体の調子が悪い」20.3%となっている。一方同居者は、「自分の興味をひくものがない」が25.9%と最も多く、次いで「時間がない」が24.2%、「体の調子が悪い」20.1%となっている。ほか、「一緒に参加する仲間や友人がいない」が13.1%（世帯主）、「世帯主の世話をしなくてはならないから」が13.5%（同居者）を占めた。

図3-40 団体・集まりの活動に参加しない理由（複数回答）



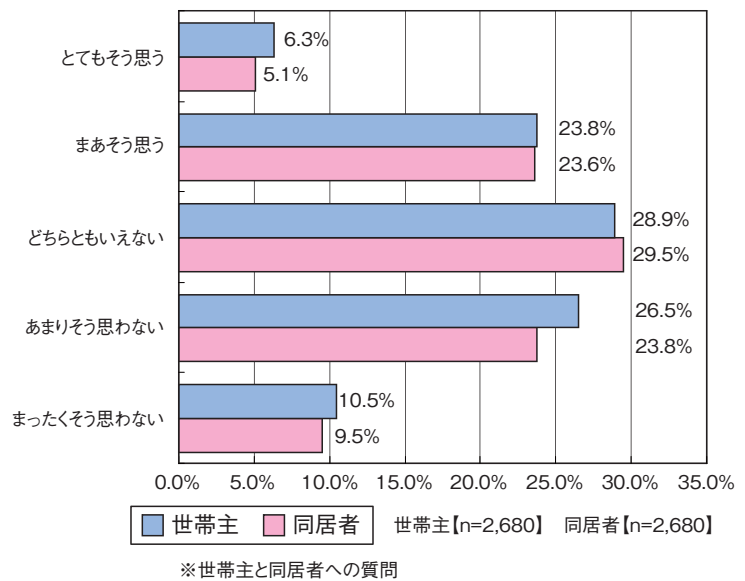
世帯主と同居者を比較すると、世帯主は同居者より「自分の興味をひくものがない」「参加したくないから」など活動のニーズに起因するものを不参加の理由に挙げる傾向にあり、一方同居者は「時間がない」や「世帯主の世話をしなくてはならないから」など参加のための環境を多く挙げる傾向にあった。

(3) 団体・集まりの活動への今後の参加希望

団体・集まりの活動への今後の参加希望については、世帯主は「どちらともいえない」が28.9%と最も多く、次いで「あまりそう思わない」が26.5%、「まあそう思う」23.8%となっている（図3-41）。一方同居者は、「どちらともいえない」が29.5%と最も多く、次いで「あまりそう思わない」が23.8%、「まあそう思う」23.6%となっている。

「まったくそう思わない」「あまりそう思わない」と回答した活動の参加を希望しない人は、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した活動を希望する人よりも、世帯主で6.9ポイント、同居者で4.6ポイント高くなっている。

図3-41 団体・集まりの活動への今後の参加希望

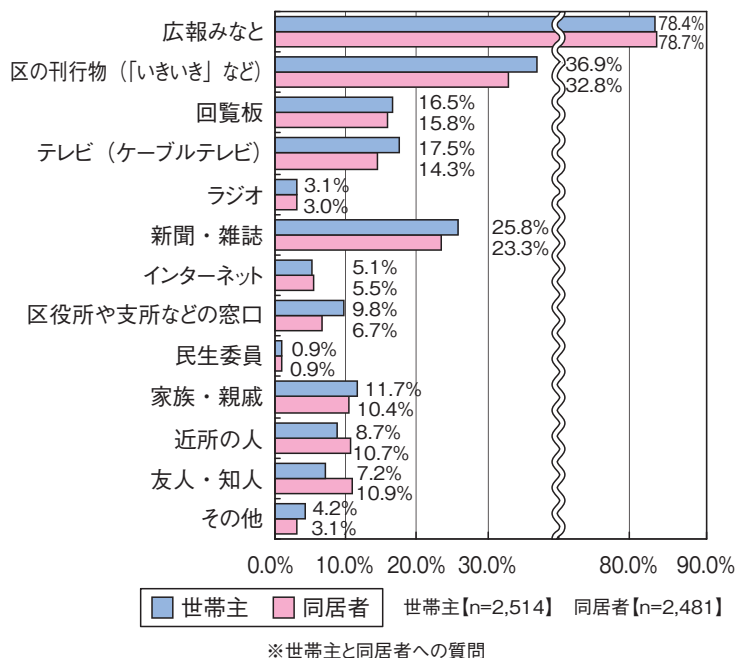


11 行政サービスの情報源

(1) 行政サービスの情報源

行政サービスの情報源については、世帯主は「広報みなと」が78.4%と最も多く、次いで「区の刊行物（「いきいき」など）」が36.9%、「新聞・雑誌」25.8%となっている（図3-42）。また同居者についても、「広報みなと」が78.7%と最も多く、次いで「区の刊行物（「いきいき」など）」が32.8%、「新聞・雑誌」23.3%の順で多くなっている。口コミとも言える「近所の人」、「友人・知人」は、それぞれ世帯主が8.7%、7.2%で、同居者が10.7%、10.9%となっており、同居者の方がやや高い傾向にある。

図3-42 行政サービスの情報源（複数回答）

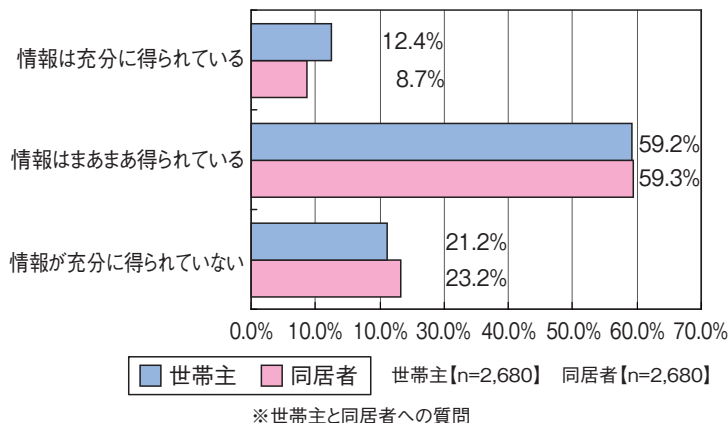


(2) 情報の充足

情報が十分に得られているかどうかについては、世帯主は「情報はまあまあ得られている」が59.2%と最も多く、次いで「情報が十分に得られている」12.4%となっている（図3-43）。また同居者についても、「情報はまあまあ得られている」が59.3%と最も多く、次いで「情報が十分に得られている」21.2%、「情報は十分に得られていない」が23.2%、「情報はまあまあ得られている」8.7%の順で多くなっている。

「情報が十分に得られていない」は「情報は十分に得られている」人よりも、世帯主で8.8ポイント、同居者で14.5ポイント高くなっており、同居者の方が高い傾向にある。

図3-43 情報の充足



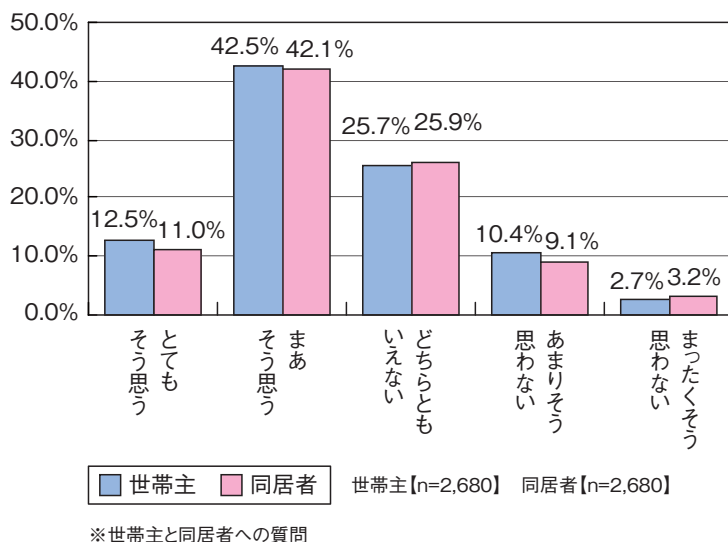
12 生活意識について

10項目の生活意識をたずねた。

(1) 暮らしの張り合いの程度

今の暮らしには張り合いがあるかどうかについては（図3-44）、世帯主は「まあそう思う」が42.5%と最も多く、次いで「どちらともいえない」25.7%、「とてもそう思う」12.5%となっている。また同居者についても、「まあそう思う」が42.1%と最も多く、次いで「どちらともいえない」25.9%、「とてもそう思う」11.0%の順で多くなっている。回答は張り合いがあると思う方に寄っている。

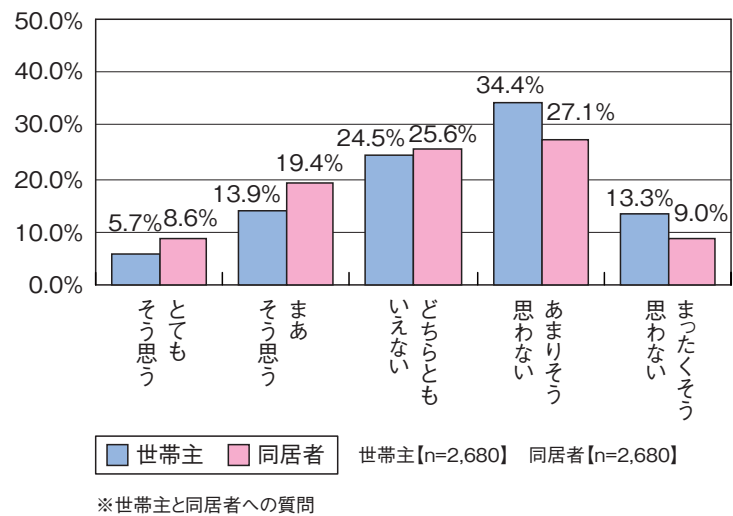
図3-44 暮らしの張り合いの程度



(2) 暮らしのストレスの程度

今の暮らしにはストレスが多いかどうかについては（図 3-45）、世帯主は「あまりそう思わない」が 34.4%と最も多く、次いで「どちらともいえない」24.5%、「まあそう思う」13.9%となっている。また同居者についても、「あまりそう思わない」が 27.1%と最も多く、次いで「どちらともいえない」25.6%、「まあそう思う」19.4%の順で多くなっている。回答はストレスが多いとは思わない方に寄っている。

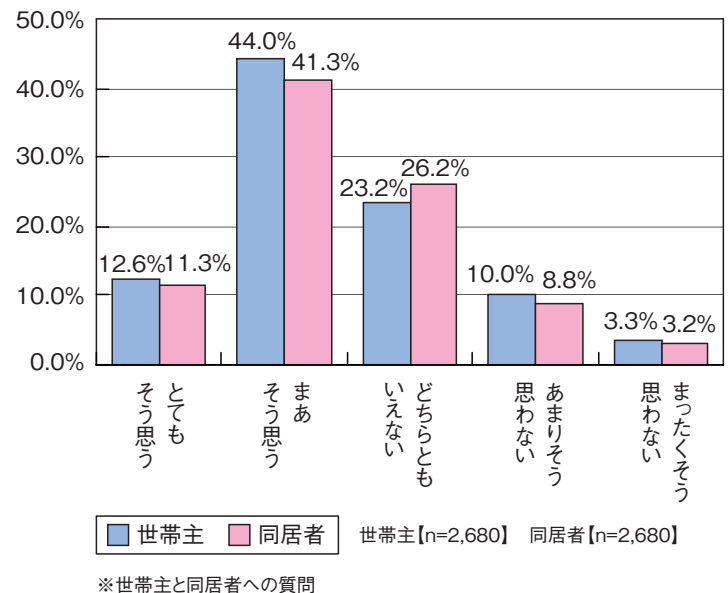
図3-45 暮らしのストレスの程度



(3) 生活の充実の程度

生活は充実しているかについては（図 3-46）、世帯主は「まあそう思う」が 44.0%と最も多く、次いで「どちらともいえない」23.2%、「とてもそう思う」12.6%となっている。また同居者についても、「まあそう思う」が 41.3%と最も多く、次いで「どちらともいえない」26.2%、「とてもそう思う」11.3%の順で多くなっている。回答は生活が充実していると思う方に寄っている。

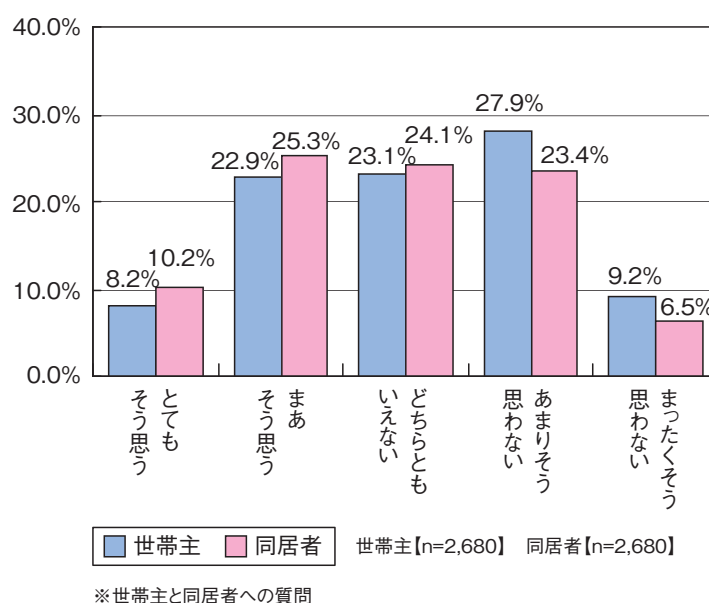
図3-46 生活の充実の程度



(4) 生活における不安・心配の程度

生活していて不安や心配があるかについては（図 3-47）、世帯主は「あまりそう思わない」が 27.9%と最も多く、次いで「どちらともいえない」23.1%、「まあそう思う」22.9%となっている。同居者は、「まあそう思う」が 25.3%と最も多く、次いで「どちらともいえない」24.1%、「あまりそう思わない」23.4%となっている。回答は世帯主が不安や心配がない方に、同居者は不安や心配がある方に、それぞれ寄る傾向にある。

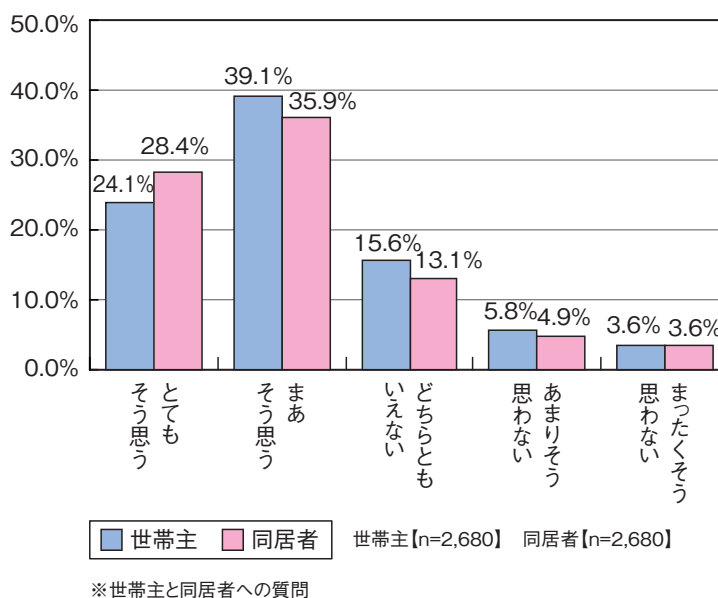
図3-47 生活における不安・心配の程度



(5) 趣味の時間の満足度

趣味をしている時間は楽しいかどうかについては（図 3-48）、世帯主は「まあそう思う」が 39.1%と最も多く、次いで「とてもそう思う」24.1%、「どちらともいえない」15.6%となっている。また同居者についても、「まあそう思う」が 35.9%と最も多く、次いで「とてもそう思う」28.4%、「どちらともいえない」13.1%の順で多くなっている。回答は趣味の時間が楽しいと思う方に寄っている。

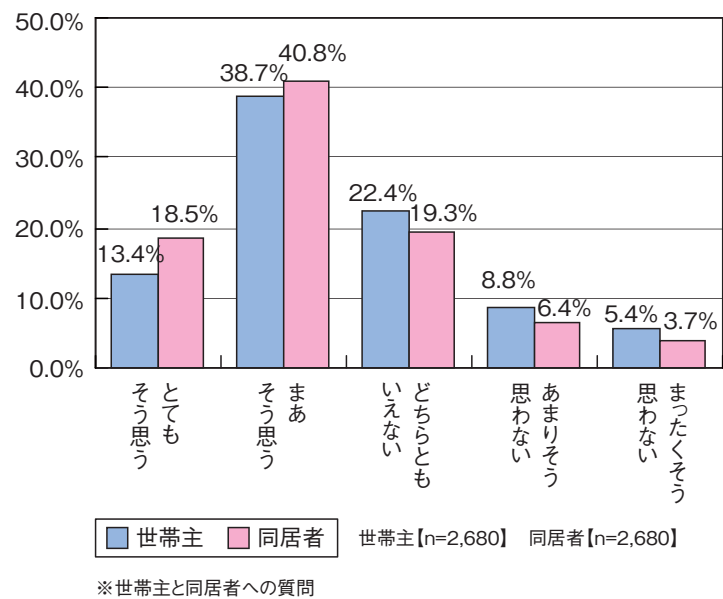
図3-48 趣味の時間の満足度



(6) 友人関係の満足度

友人との関係に満足しているかどうかについては(図 3-49)、世帯主は「まあそう思う」が 38.7%と最も多く、次いで「どちらともいえない」22.4%、「とてもそう思う」13.4%となっている。また同居者についても、「まあそう思う」が 40.8%と最も多く、次いで「どちらともいえない」19.3%、「とてもそう思う」18.5%の順で多くなっている。回答は友人との関係に満足していると思う方に寄っている。

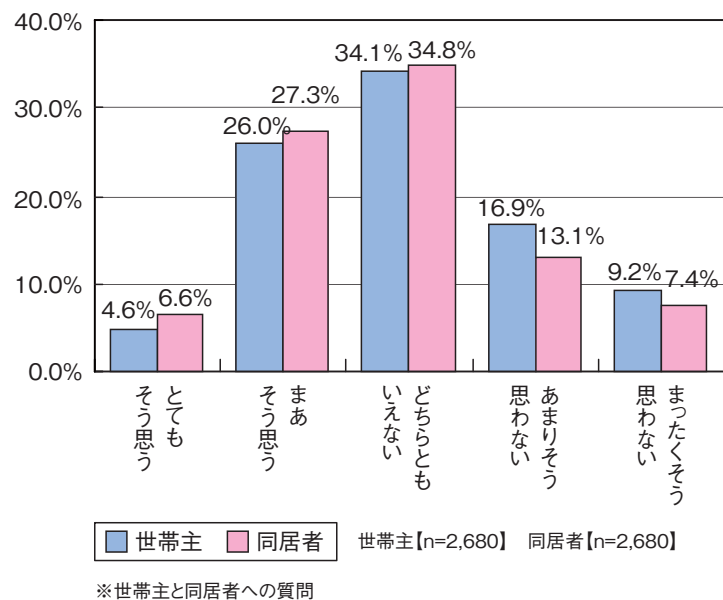
図3-49 友人関係の満足度



(7) 近所づきあいの満足度

近所づきあいに満足しているかどうかについては(図 3-50)、世帯主は「どちらともいえない」が 34.1%と最も多く、次いで「まあそう思う」26.0%、「あまりそう思わない」16.9%となっている。また同居者についても、「どちらともいえない」が 34.8%と最も多く、次いで「まあそう思う」27.3%、「あまりそう思わない」13.1%の順で多くなっている。近所づきあいの満足度について、回答の中心は「どちらともいえない」にある。

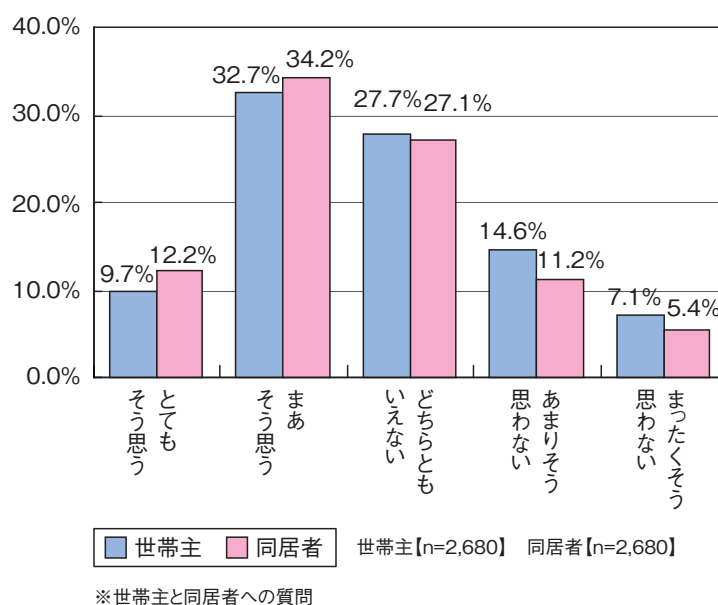
図3-50 近所づきあいの満足度



(8) 頼りにされていると感じる度合い

自分は頼りにされていると思うかどうかについては(図 3-51)、世帯主は「まあそう思う」が 32.7%と最も多く、次いで「どちらともいえない」27.7%、「あまりそう思わない」14.6%となっている。また同居者については、「まあそう思う」が 34.2%と最も多く、次いで「どちらともいえない」27.1%、「とてもそう思う」12.2%の順で多くなっている。回答は自分は頼りにされていると思う方に寄っている。

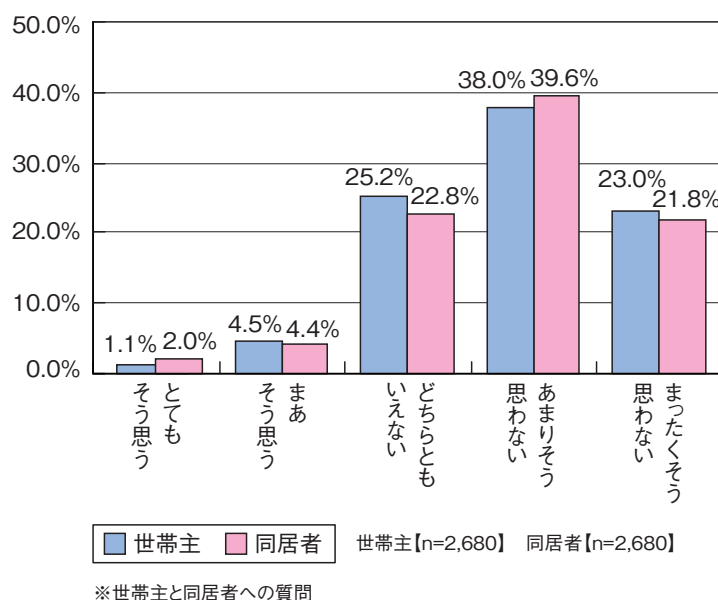
図3-51 頼りにされていると感じる度合い



(9) 取り残されていると感じる度合い

周囲から取り残されたように感じるかどうかについては(図 3-52)、世帯主は「あまりそう思わない」が 38.0%と最も多く、次いで「どちらともいえない」25.2%、「まったくそう思わない」23.0%となっている。また同居者についても、「あまりそう思わない」が 39.6%と最も多く、次いで「どちらともいえない」22.8%、「まったくそう思わない」21.8%の順で多くなっている。回答は取り残されているとは思わない方に寄っている。

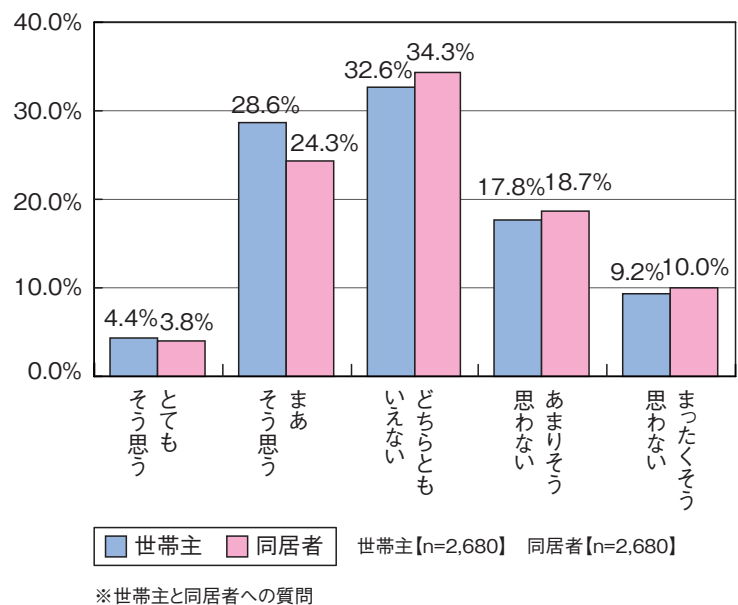
図3-52 取り残されていると感じる度合い



(10) 将来の生活への安心感

将来の生活は安心できるかどうかについては（図 3-53）、世帯主は「どちらともいえない」が 32.6%と最も多く、次いで「まあそう思う」28.6%、「あまりそう思わない」17.8%となっている。また同居者についても、「どちらともいえない」が 34.3%と最も多く、次いで「まあそう思う」24.3%、「あまりそう思わない」18.7%の順で多くなっている。回答の中心は「どちらともいえない」にある。

図3-53 将来の生活への安心感

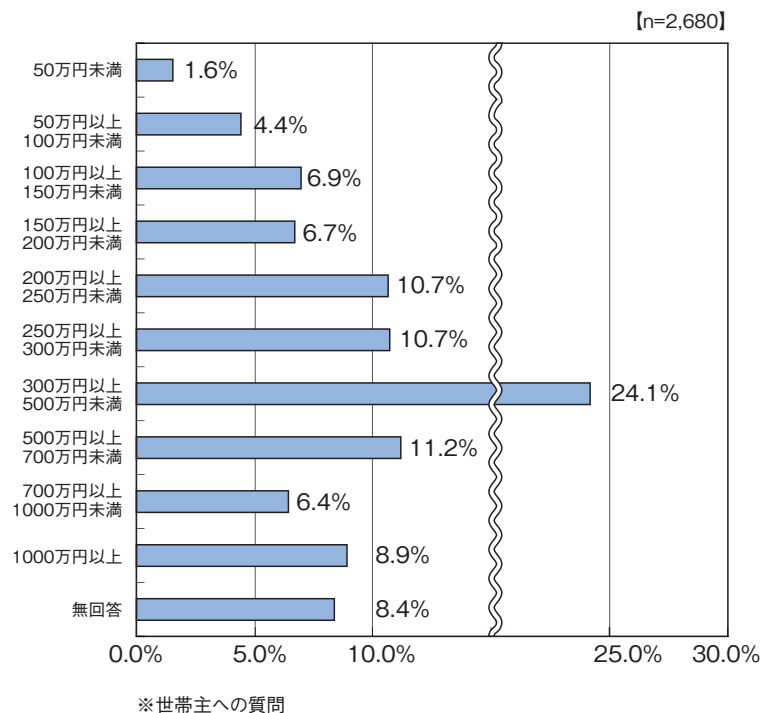


13 経済状況

(1) 年間収入

1年間の収入についてたずねた（図 3-54）。「300 万円以上 500 万円未満」が 24.1%と最も多く、次いで「500 万円以上 700 万円未満」11.2%、「200 万円以上 250 万円未満」と「250 万円以上 300 万円未満」がそれぞれ 10.7%となっている。

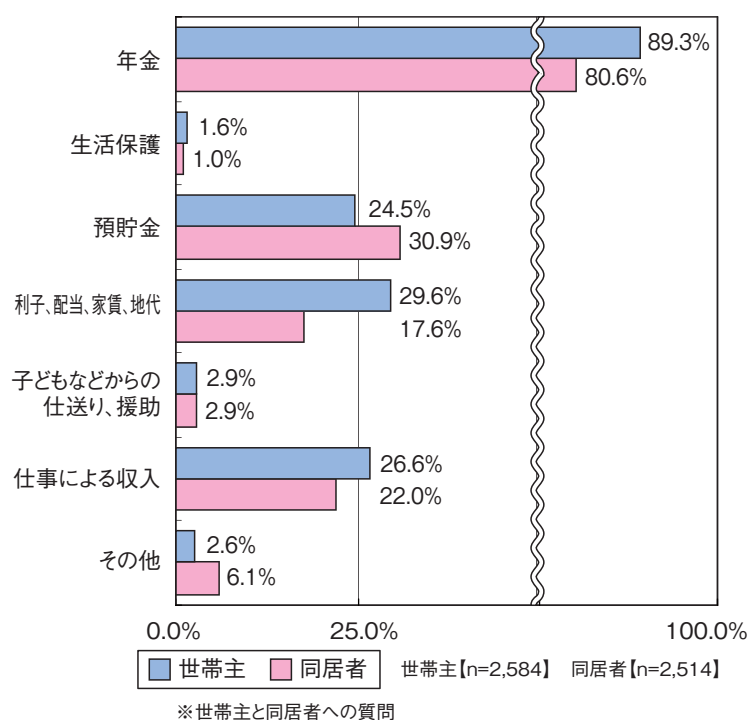
図3-54 年間収入



(2) 収入の種類

収入の種類について（図 3-55、複数回答）、世帯主は「年金」を挙げている人が 89.3%と最も多く、次いで「利子、配当、家賃、地代」29.6%、「仕事による収入」26.6%となっている。一方同居者は、「年金」を挙げている人が 80.6%と最も高く、次いで「預貯金」30.9%、「仕事による収入」22.0%となっている。

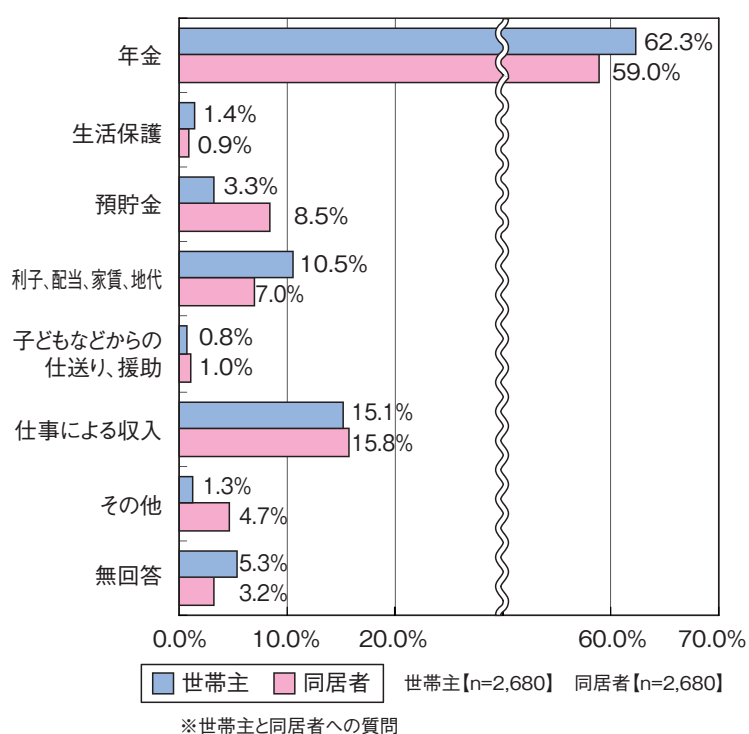
図3-55 収入の種類（複数回答）



(3) 主な収入

(2) の収入源のうち主なものを1つたずねた（図 3-56）。世帯主は「年金」が 62.3%と最も多く、次いで「仕事による収入」15.1%、「利子、配当、家賃、地代」10.5%となっている。一方同居者は、「年金」を挙げている人が 59.0%と最も高く、次いで「仕事による収入」15.8%、「預貯金」8.5%となっている。

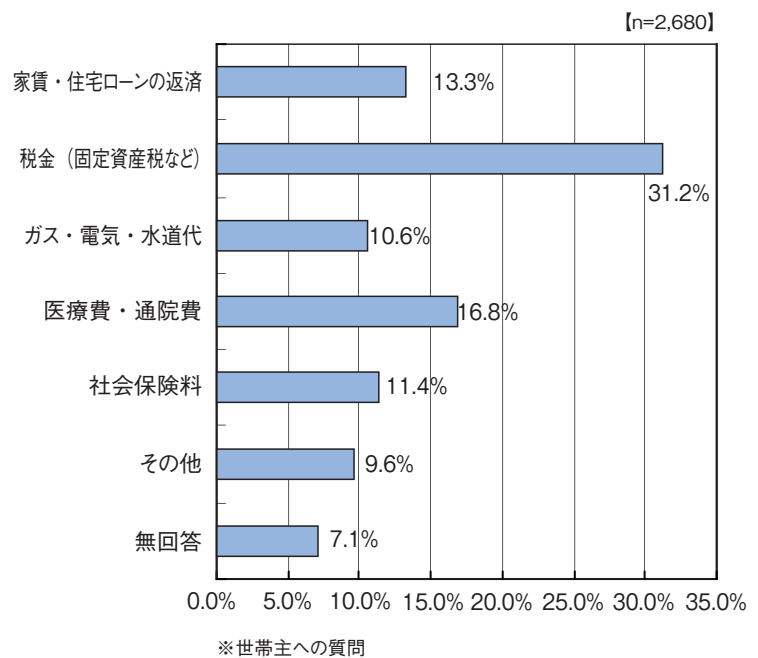
図3-56 主な収入



(4) 家計負担の大きい費目

世帯の家計のうち最も負担が大きい費目については(図 3-57)、「税金(固定資産税など)」が 31.2%と最も多く、次いで「医療費・通院費」16.8%、「家賃・住宅ローンの返済」13.3%となっている。

図3-57 家計負担の大きい費目

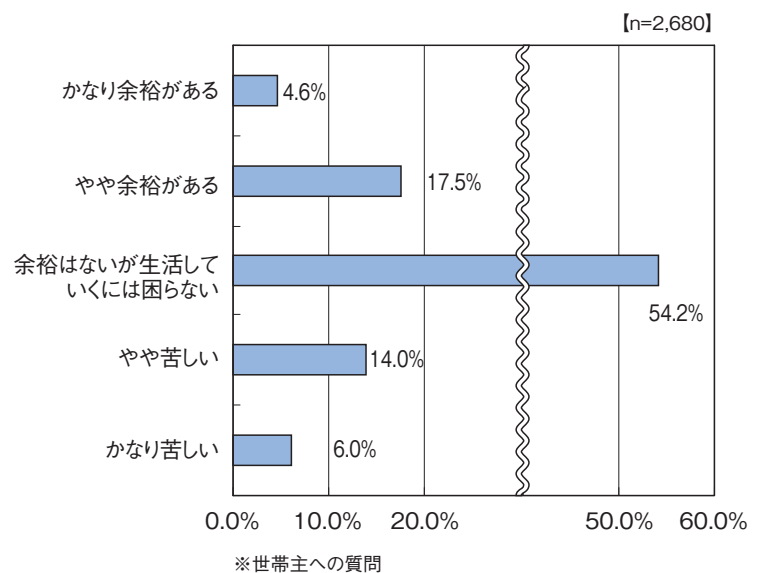


(5) 現在の経済状況の意識

現在の経済状況の意識をたずねた(図 3-58)。その結果、「余裕はないが生活していくには困らない」が 54.2%と最も多く、次いで「やや余裕がある」が 17.5%、「やや苦しい」が 14.0%となっている。

「かなり余裕がある」と「やや余裕がある」を合わせると 22.1%となり、「やや苦しい」と「かなり苦しい」の合計である 20.0%より、2.1 ポイント高くなっている。

図3-58 現在の経済状況の意識

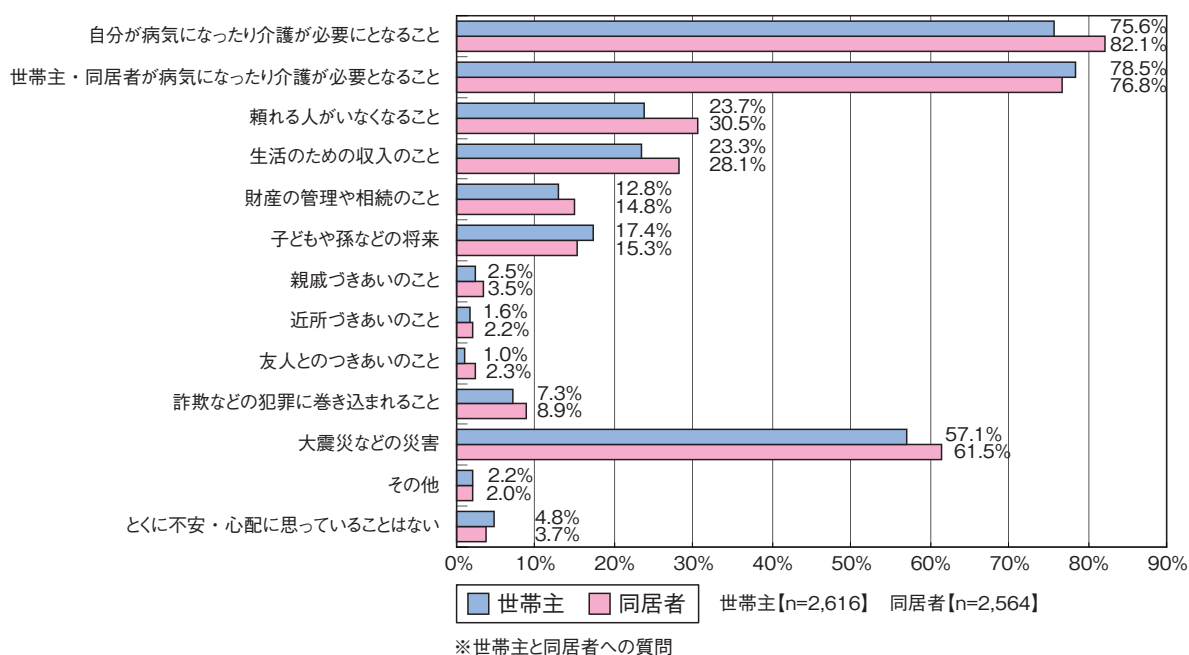


(6) 将来の不安や心配

将来の生活について不安や心配に思っていることについては(図 3-59、複数回答)、世帯主は「同居者が病気になったり介護が必要となること」が 78.5%と最も多く、次いで「自分が病気になったり介護が必要となること」75.6%、「大震災などの災害」57.1%となっている。一方同居者は、「自分が病気になったり介護が必要となること」を挙げている人が 82.1%と最も高く、次いで「世帯主が病気になったり介護が必要となること」76.8%、「大震災などの災害」61.5%となっている。

自分や相手の病気や介護を心配に挙げる人は、世帯主、同居者とも8割近くおり、将来に対する不安で最も大きいものとなっている。

図3-59 将来の不安や心配（複数回答）



14 地区別の状況

ここでは、港区を総合支所ごとに5つの地区に分類し、地区別の特徴を概観する。

(1) 地区別に見た世帯タイプの分布

75歳以上の高齢者を含む2人世帯は、大きくは夫婦世帯、親子世帯、その他世帯の3つに分類できる。それを地区別に集計したものが表3-3である。どの地区も、最も割合が高いのは夫婦世帯で、それぞれ7割半から8割弱程度を占め、親子世帯は2割前後であった。カイ二乗検定の結果、地区による差は認められなかった。どの地区も、同じように分布していることがわかる。

表3-3 地区別×世帯類型

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
夫婦世帯	361	75.4%	382	77.0%	356	76.4%	606	78.4%	279	78.2%
親子世帯	102	21.3%	105	21.2%	95	20.4%	145	18.8%	61	17.1%
その他	16	3.3%	9	1.8%	15	3.2%	22	2.8%	17	4.8%
合計	479	100.0%	496	100.0%	466	100.0%	773	100.0%	357	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=9.424$ 自由度 8 $p=0.308$

(2) 住宅の種類と住宅の困りごとについて

住宅の種類について、地区別にクロス集計したものが表3-4である。芝地区は、「持ち家（一戸建て）」が39.2%、「持ち家（分譲マンション）」が30.0%で、両者を合わせて持ち家に住む世帯は69.2%、全体の7割であった。麻布地区は、「持ち家（一戸建て）」が42.4%、「持ち家（分譲マンション）」が41.8%で、両者を合わせて持ち家に住む世帯は84.2%、全体の8割半弱であった。赤坂地区は、「持ち家（一戸建て）」が34.0%、「持ち家（分譲マンション）」が30.8%で、両者を合わせて持ち家に住む世帯は64.8%、全体の6割半であった。高輪地区は、「持ち家（一戸建て）」が39.1%、「持ち家（分譲マンション）」が45.3%で、両者を合わせて持ち家に住む世帯は84.4%、全体の8割半弱であった。芝浦港南地区は、「持ち家（一戸建て）」は1.9%、「持ち家（分譲マンション）」が37.0%で、両者を合わせて持ち家に住む世帯は38.9%、全体の4割弱であった。

持ち家に住む世帯の割合が高いのは麻布地区、高輪地区であり、両地区では8割を超えた。一方、芝地区と赤坂地区は、持ち家率は6割半から7割程度で、麻布地区、高輪地区に比べてやや低い割合となっている。そして、芝浦港南地区は、持ち家率が5地区中最も低い。また、「持ち家（一戸建て）」については全体の1.9%しかなく、持ち家のほとんどは分譲マンションであることが大きな特徴である。

また、芝地区・赤坂地区・芝浦港南地区では、「都営・区営住宅」に居住する世帯の割合が高いことも特徴である。芝地区では、「都営・区営住宅」に住む世帯の割合は14.8%、赤坂地区では21.3%、芝浦港南地区では41.7%であった。さらに、芝浦港南地区では、「都市再生機構（UR）等の公的賃貸住宅」に居住する世帯が10.5%と1割を占めており、他の4地区にはない傾向を示した。

表3-4 地区×住宅の種類

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
持ち家（一戸建て）	188	39.2%	213	42.4%	158	34.0%	305	39.1%	7	1.9%
持ち家（分譲マンション）	144	30.0%	210	41.8%	143	30.8%	354	45.3%	134	37.0%
民間の賃貸住宅	23	4.8%	27	5.4%	21	4.5%	50	6.4%	15	4.1%
都営・区営住宅	71	14.8%	12	2.4%	99	21.3%	44	5.6%	151	41.7%
都市再生機構（UR）等の公的賃貸住宅	17	3.5%	5	1.0%	13	2.8%	2	0.3%	38	10.5%
その他	37	7.7%	35	7.0%	31	6.7%	26	3.3%	17	4.7%
合計	480	100.0%	502	100.0%	465	100.0%	781	100.0%	362	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=565.707$ 自由度 20 $p=0.000$ * * $p<0.05$

次に、住宅に関する困りごとについて地区別に集計した（表 3-5、複数回答）。

「階段の昇り降りが大変」と回答した世帯の割合は、麻布地区が最も高く 22.5%、芝地区と赤坂地区ではそれぞれ 17.8%、17.3%と 17%台で、高輪地区では 15.1%であった。およそ 1 割半から 2 割程度の世帯で、階段の昇り降りが大変だと感じていることがわかる。しかし、芝浦港南地区ではわずか 2.6%であった。先に見たように、芝浦港南地区は一戸建てがほとんどなく、分譲マンションや都営・区営住宅など集合住宅に住んでいる世帯が多いことが理由として考えられる。

「老朽化している」については、芝地区では 23.5%、麻布地区では 20.8%、赤坂地区では 24.3%、高輪地区では 19.3%で、どの地区も 2 割から 2 割半程度であったが、芝浦港南地区は 7.1%と低い割合であった。

「家賃・税金の負担が大きい」については、どの地区も 1 割半から 2 割前後の世帯で、住宅に関する困りごととして挙げられていた。なかでも、麻布地区（14.6%）と高輪地区（13.2%）は比較的割合が低く、芝地区（18.9%）、赤坂地区（18.1%）、芝浦港南地区（20.3%）では比較的高い割合を占めていた。

「とくに困っていることはない」と回答した世帯の割合が最も高かったのは、芝浦港南地区で 54.4%と半分を超えていた。次いで高輪地区が 47.3%、赤坂地区が 40.5%、芝地区が 39.8%、麻布地区が 37.7%であった。

地区により、住宅の種類の分布や住宅に関する困りごとに違いが見られることがわかった。

表3-5 地区×住宅の困りごと（複数回答）

	芝地区 (n=455)		麻布地区 (n=472)		赤坂地区 (n=452)		高輪地区 (n=735)		芝浦港南地区 (n=340)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
階段の昇り降りが大変	81	17.8%	106	22.5%	78	17.3%	111	15.1%	9	2.6%
エレベーターが設置されていない	34	7.5%	56	11.9%	45	10.0%	39	5.3%	3	0.9%
浴室・浴槽が使いにくい	40	8.8%	45	9.5%	39	8.6%	49	6.7%	19	5.6%
トイレが使いにくい	32	7.0%	20	4.2%	14	3.1%	19	2.6%	15	4.4%
お風呂がない	13	2.9%	5	1.1%	2	0.4%	10	1.4%	0	0.0%
居室が狭い	61	13.4%	51	10.8%	45	10.0%	60	8.2%	34	10.0%
室内に段差がある	40	8.8%	42	8.9%	33	7.3%	60	8.2%	15	4.4%
冷房がない	14	3.1%	3	0.6%	10	2.2%	10	1.4%	5	1.5%
老朽化している	107	23.5%	98	20.8%	110	24.3%	142	19.3%	24	7.1%
家賃・税金の負担が大きい	86	18.9%	69	14.6%	82	18.1%	97	13.2%	69	20.3%
立ち退きを迫られている	3	0.7%	3	0.6%	1	0.2%	4	0.5%	4	1.2%
転居先が見つからない	7	1.5%	5	1.1%	9	2.0%	8	1.1%	7	2.1%
いつまでここに住めるか不安	55	12.1%	58	12.3%	80	17.7%	72	9.8%	38	11.2%
その他	27	5.9%	33	7.0%	20	4.4%	43	5.9%	22	6.5%
とくに困っていることはない	181	39.8%	178	37.7%	183	40.5%	348	47.3%	185	54.4%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=287.674$ 自由度 6 $p=0.000$ * * $p<0.05$

(3) 地域の困りごとについて

地区別に、世帯主が感じている地域の困りごとを集計した（表 3-6、複数回答）。「近所に買い物をする店がない」と回答した世帯主の割合が最も高かったのは芝地区で、23.5%の人が回答した。次いで、赤坂地区では 15.9%であった。そのほかの3地区は 1 割に満たなかった。近所に買い物をする店がないと感じている人の割合は、芝地区、赤坂地区で比較的高いことがわかる。

また、多くの人が「物価が高い」と回答している。芝地区では 32.1%、麻布地区では 34.0%、赤坂地区では 36.5%で、この3地区では3割を超えた。高輪地区ではやや低くなり 27.1%、芝浦港南地区は最も低く 22.0%の人が「物価が高い」ことを困りごととして回答していた。

ほかに、芝浦港南地区では、「そばや寿司など店屋物をとる店がない」と回答した人が 13.2%で、他地区では5%前後であることと比べて、高い割合を示した。また、「近所に銭湯がない」（10.7%）も同様に、他地区と比べて高い割合であった。一方、「地震などの防災対策に不安がある」と回答した人の割合は 25.1%で、他地区が3割を超えていることと比較して、低い割合であった。芝浦港南地区は、このように他地区とはやや異なった地域状況にあることがわかる。

なお、「とくに困っていることはない」と回答した世帯主の割合は、芝地区では 36.1%、麻布地区では 41.1%、赤坂地区では 35.4%、高輪地区では 43.9%、芝浦港南地区では 46.5%という結果であった。

表3-6 地区×【世帯主】地域の困りごと（複数回答）

	芝地区 (n=468)		麻布地区 (n=491)		赤坂地区 (n=466)		高輪地区 (n=770)		芝浦港南地区 (n=355)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
近所に買い物する店がない	110	23.5%	46	9.4%	74	15.9%	67	8.7%	27	7.6%
近所に外食する店がない	13	2.8%	20	4.1%	14	3.0%	40	5.2%	25	7.0%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	24	5.1%	31	6.3%	26	5.6%	42	5.5%	47	13.2%
近所に銭湯がない	30	6.4%	34	6.9%	25	5.4%	51	6.6%	38	10.7%
近所に病院や診療所がない	6	1.3%	8	1.6%	8	1.7%	8	1.0%	28	7.9%
近所にバスの停留所がない	8	1.7%	12	2.4%	8	1.7%	14	1.8%	5	1.4%
近所に地下鉄・鉄道の駅がない	4	0.9%	29	5.9%	14	3.0%	16	2.1%	29	8.2%
訪問販売員が多い	16	3.4%	9	1.8%	17	3.6%	26	3.4%	9	2.5%
振り込め詐欺など不審な電話がある	43	9.2%	50	10.2%	38	8.2%	56	7.3%	24	6.8%
防犯上の不安がある	54	11.5%	33	6.7%	45	9.7%	61	7.9%	18	5.1%
物価が高い	150	32.1%	167	34.0%	170	36.5%	209	27.1%	78	22.0%
地震などの防災対策に不安がある	163	34.8%	159	32.4%	164	35.2%	247	32.1%	89	25.1%
その他	21	4.5%	14	2.9%	11	2.4%	28	3.6%	16	4.5%
とくに困っていることはない	169	36.1%	202	41.1%	165	35.4%	338	43.9%	165	46.5%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=319.244$ 自由度 56 $p=0.000$ * * $p<0.05$

同居者についても、同様に地域の困りごとについて地区別に集計した（表 3-7、複数回答）。

「近所に買い物をする店がない」と回答した同居者の割合は、芝地区では最も高く 26.2%であり、赤坂地区では 16.7%、麻布地区では 12.8%、高輪地区では 12.2%であった。芝浦港南地区は 9.8%で 1 割程度であった。

次に、「物価が高い」と回答した同居者の割合は、芝地区では 39.3%、麻布地区では 38.3%で4割に近く、赤坂地区では 43.8%と5地区中で最も高い割合を示した。高輪地区はやや低くなり 34.6%、芝浦港南地区は最も低く 26.4%であった。

ほか、芝浦港南地区では世帯主と同様に、「地震などの防災対策に不安がある」と回答した人の割合は 26.1%で、5地区中で最も低い割合であった。

「とくに困っていることはない」と回答した世帯主の割合は、芝地区では 31.5%、麻布地区では 37.2%、赤坂地区では 28.4%、高輪地区では 34.9%、芝浦港南地区では 42.1%であった。

表3-7 地区×【同居者】地域の困りごと（複数回答）

	芝地区 (n=435)		麻布地区 (n=460)		赤坂地区 (n=436)		高輪地区 (n=714)		芝浦港南地区 (n=337)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
近所に買い物する店がない	114	26.2%	59	12.8%	73	16.7%	87	12.2%	33	9.8%
近所に外食する店がない	12	2.8%	14	3.0%	18	4.1%	56	7.8%	29	8.6%
そばや寿司など店屋物をとる店がない	28	6.4%	34	7.4%	31	7.1%	59	8.3%	54	16.0%
近所に銭湯がない	29	6.7%	30	6.5%	34	7.8%	58	8.1%	43	12.8%
近所に病院や診療所がない	3	0.7%	14	3.0%	7	1.6%	12	1.7%	25	7.4%
近所にバスの停留所がない	14	3.2%	15	3.3%	16	3.7%	12	1.7%	5	1.5%
近所に地下鉄・鉄道の駅がない	3	0.7%	27	5.9%	15	3.4%	17	2.4%	30	8.9%
訪問販売員が多い	18	4.1%	13	2.8%	18	4.1%	22	3.1%	13	3.9%
振り込め詐欺など不審な電話がある	37	8.5%	54	11.7%	42	9.6%	63	8.8%	22	6.5%
防犯上の不安がある	55	12.6%	49	10.7%	44	10.1%	77	10.8%	19	5.6%
物価が高い	171	39.3%	176	38.3%	191	43.8%	247	34.6%	89	26.4%
地震などの防災対策に不安がある	168	38.6%	156	33.9%	155	35.6%	255	35.7%	88	26.1%
その他	33	7.6%	24	5.2%	19	4.4%	36	5.0%	13	3.9%
とくに困っていることはない	137	31.5%	171	37.2%	124	28.4%	249	34.9%	142	42.1%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=306.149$ 自由度 56 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

(4) 近所づきあいの程度について

近所づきあいの程度について、地区別に集計した。

まずは世帯主の近所づきあいの程度である（表 3-8）。どの地区においても、最も高い割合を占めたのは「あいさつをかわすくらい」で、芝地区では 45.4%、麻布地区では 45.6%、赤坂地区では 47.9%、高輪地区では 50.0%、芝浦港南地区では 40.5%であった。次に割合が高いのは「会った時に世間話をするくらい」で、どの地区も3割前後の割合であった。

「互いの家をよく行き来するくらい」と「ときどき行き来するくらい」を合わせて、比較的親密に近所づきあいをしている世帯主の割合は、芝地区が 19.0%で2割弱であったほかは、13～14%程度であった。

一方、「まったくつきあいがいい」と回答した世帯主の割合は、赤坂地区が 5.4%と最も低く、芝地区・麻布地区・高輪地区は7%台で、こちらも同程度に低い割合であったが、芝浦港南地区では 17.2%にのぼっている。

表3-8 地区×【世帯主】近所づきあいの程度

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	30	6.6%	20	4.0%	14	3.1%	27	3.5%	13	3.7%
ときどき行き来するくらい	57	12.4%	53	10.7%	52	11.3%	73	9.6%	37	10.6%
会ったときに世間話をするくらい	127	27.7%	161	32.5%	148	32.2%	221	29.0%	97	27.9%
あいさつをかわすくらい	208	45.4%	226	45.6%	220	47.9%	381	50.0%	141	40.5%
まったくつきあいがいい	36	7.9%	36	7.3%	25	5.4%	60	7.9%	60	17.2%
合計	458	100.0%	496	100.0%	459	100.0%	762	100.0%	348	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=56.653$ 自由度 16 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

つづいて、同居者の近所づきあいの程度を地区別に集計した表 3-9 を見てみよう。

芝地区では、最も割合が高かったのは「あいさつをかわすくらい」で 38.0%を占め、次いで「会った時に世間話をするくらい」が 34.9%であった。同様に、赤坂地区でも、最も割合が高かったのは「あいさつをかわすくらい」で 37.6%を占め、次いで「会った時に世間話をするくらい」が 35.3%であった。

麻布地区、高輪地区、芝浦港南地区では、最も高い割合を占めたのは「会った時に世間話をするくらい」で、それぞれ 43.2%、39.0%、38.6%であった。次いで「あいさつをかわすくらい」が、それぞれ 34.6%、35.4%、31.3%であった。

「互いの家をよく行き来するくらい」と「ときどき行き来するくらい」を合わせて、比較的親密に近所づきあいをしている同居者の割合は、世帯主より高く、どの地区も2割前後であった。

また、「まったくつきあいがいい」と回答した人の割合は、芝地区で7.8%、麻布地区で4.1%、赤坂地区で5.4%、高輪地区で6.3%で、これら4地区では1割に満たなかった。一方、芝浦港南地区では10.4%で、世帯主ほどではないものの、他地区よりはやや高い割合を示した。

表3-9 地区×【同居者】近所づきあいの程度

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	27	5.9%	24	4.9%	28	6.0%	36	4.8%	24	6.8%
ときどき行き来するくらい	62	13.4%	64	13.1%	73	15.7%	110	14.5%	46	13.0%
会ったときに世間話をするくらい	161	34.9%	211	43.2%	164	35.3%	295	39.0%	137	38.6%
あいさつをかわすくらい	175	38.0%	169	34.6%	175	37.6%	268	35.4%	111	31.3%
まったくつきあいがいい	36	7.8%	20	4.1%	25	5.4%	48	6.3%	37	10.4%
合計	461	100.0%	488	100.0%	465	100.0%	757	100.0%	355	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=27.833$ 自由度 16 $p=0.033^*$ * $p<0.05$

(5) 緊急時の支援者について

緊急時の支援者の有無について、地区別に集計した（表 3-10）。「支援者がいない」と回答した人の割合が5地区中最も低かったのは麻布地区で、11.0%であった。次いで、高輪地区が13.3%、赤坂地区が14.8%であった。芝地区は17.0%とやや高く、芝浦港南地区は17.9%で5地区中最も高い割合であった。

表3-10 地区×緊急時の支援者の有無

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
支援者がいる	396	83.0%	437	89.0%	396	85.2%	664	86.7%	293	82.1%
支援者がいない	81	17.0%	54	11.0%	69	14.8%	102	13.3%	64	17.9%
合計	477	100.0%	491	100.0%	465	100.0%	766	100.0%	357	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=11.532$ 自由度 4 $p=0.021^*$ * $p<0.05$

(6) 参加している社会活動について

地域で参加している社会活動について複数回答でたずねたものを、地区別に集計した。

まずは世帯主である（表 3-11、複数回答）。芝地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した人の割合が28.8%で、5地区中最も多かった。ほか、「趣味の会」が16.3%、「健康づくりの活動」が13.8%で、「参加していない」と回答した世帯主は43.0%であった。

麻布地区は、「町会・自治会」と回答した世帯主の割合が21.1%で、5地区中2番目に低い割合であった。「趣味の会」は14.6%で、5地区中3番目であったが、「健康づくりの活動」は11.3%で5地区中最も低い割合であった。「参加していない」と回答した世帯主の割合は54.5%で、5地区中最も高い割合を示した。

赤坂地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した世帯主が23.0%で、5地区中3番目であった。「健康づくりの活動」は13.0%で、麻布地区を除く3地区と同程度の割合であったが、「趣味の会」に参加する世帯主は10.4%で、5地区中最も低い割合であった。「参加していない」と回答した世帯主の割合は、51.1%で、5地区中2番目に高い割合であった。

高輪地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した世帯主の割合が19.4%で、5地区中最も低かった。ほか、「趣味の会」は14.1%で麻布地区と同程度、「健康づくりの活動」は13.0%で、

麻布地区を除く3地区と同程度であった。「参加していない」と回答した世帯主の割合は50.4%であった。

芝浦港南地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した世帯主の割合が27.2%で、芝地区に次いで高い割合であった。また、「趣味の会」は16.5%で5地区中最も高い。「健康づくりの活動」は13.4%で、麻布地区を除く3地区と同程度であった。「参加していない」と回答した世帯主の割合は43.1%で、芝地区とほぼ同じくらいの割合であった。

表3-11 地区×【世帯主】参加している社会活動（複数回答）

	芝地区 (n=472)		麻布地区 (n=494)		赤坂地区 (n=460)		高輪地区 (n=768)		芝浦港南地区 (n=357)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
町会・自治会	136	28.8%	104	21.1%	106	23.0%	149	19.4%	97	27.2%
防犯・防災活動	37	7.8%	23	4.7%	26	5.7%	46	6.0%	34	9.5%
学習の会	14	3.0%	14	2.8%	12	2.6%	19	2.5%	13	3.6%
趣味の会（囲碁・将棋・俳句・カラ オケ・お花・盆栽・お茶など）	77	16.3%	72	14.6%	48	10.4%	108	14.1%	59	16.5%
社会活動（同窓会・PTAなどの子 育ての頃の団体・生協活動など）	18	3.8%	22	4.5%	28	6.1%	39	5.1%	12	3.4%
健康づくりの活動（スポーツ・体操 教室など）	65	13.8%	56	11.3%	60	13.0%	100	13.0%	48	13.4%
介護予防事業（健康トレーニング・ 筋力向上トレーニングなど）	42	8.9%	15	3.0%	15	3.3%	39	5.1%	26	7.3%
老人クラブ	28	5.9%	16	3.2%	13	2.8%	23	3.0%	24	6.7%
ボランティア活動	26	5.5%	19	3.8%	17	3.7%	29	3.8%	27	7.6%
その他	18	3.8%	28	5.7%	15	3.3%	44	5.7%	16	4.5%
参加していない	203	43.0%	269	54.5%	235	51.1%	387	50.4%	154	43.1%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=120.044$ 自由度 44 $p=0.000$ * * $p<0.05$

次に同居者の参加している社会活動について見てみよう（表3-12、複数回答）。芝地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した同居者の割合が21.1%で、5地区中最も多かった。ほか、「趣味の会」が18.1%、「健康づくりの活動」が19.2%で、「参加していない」と回答した同居者は49.3%であった。

麻布地区は、「町会・自治会」と回答した同居者の割合が14.9%で、5地区中2番目に低い割合であった。一方、「趣味の会」は19.4%で5地区中最も高かった。ほか、「健康づくりの活動」は17.9%であった。「参加していない」と回答した同居者の割合は51.0%であった。

赤坂地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した同居者が17.7%で、5地区中3番目であった。「健康づくりの活動」は17.3%で、麻布地区と同程度であった。「趣味の会」に参加する同居者は14.6%で、5地区中最も低い割合であった。「参加していない」と回答した同居者の割合は、52.5%で、5地区中最も高い割合であった。

高輪地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した同居者の割合が14.0%で、5地区中最も低かった。ほか、「趣味の会」は16.0%で5地区中4番目、「健康づくりの活動」は20.9%で、5地区中最も高い割合であった。「参加していない」と回答した同居者の割合は51.9%であった。

芝浦港南地区は、「町会・自治会」に参加していると回答した同居者の割合が20.3%で、芝地区に次いで高い割合であった。また、「趣味の会」は18.1%で芝地区と同じ割合を示した。「健康づくりの活動」は20.1%で、高輪地区に次いで高い割合を示した。「参加していない」と回答した同居者の割合は45.8%で、5地区中最も低い割合であった。

表3-12 地区×【同居者】参加している社会活動（複数回答）

	芝地区 (n=454)		麻布地区 (n=469)		赤坂地区 (n=451)		高輪地区 (n=750)		芝浦港南地区 (n=349)	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
町会・自治会	96	21.1%	70	14.9%	80	17.7%	105	14.0%	71	20.3%
防犯・防災活動	16	3.5%	8	1.7%	10	2.2%	33	4.4%	12	3.4%
学習の会	15	3.3%	18	3.8%	19	4.2%	28	3.7%	13	3.7%
趣味の会（囲碁・将棋・俳句・カラ オケ・お花・盆栽・お茶など）	82	18.1%	91	19.4%	66	14.6%	120	16.0%	63	18.1%
社会活動（同窓会・PTAなどの子 育ての頃の団体・生協活動など）	20	4.4%	24	5.1%	16	3.5%	34	4.5%	10	2.9%
健康づくりの活動（スポーツ・体操 教室など）	87	19.2%	84	17.9%	78	17.3%	157	20.9%	70	20.1%
介護予防事業（健康トレーニング・ 筋力向上トレーニングなど）	32	7.0%	32	6.8%	24	5.3%	56	7.5%	27	7.7%
老人クラブ	16	3.5%	17	3.6%	7	1.6%	22	2.9%	22	6.3%
ボランティア活動	14	3.1%	32	6.8%	27	6.0%	42	5.6%	21	6.0%
その他	15	3.3%	25	5.3%	12	2.7%	28	3.7%	20	5.7%
参加していない	224	49.3%	239	51.0%	237	52.5%	389	51.9%	160	45.8%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=71.024$ 自由度 44 $p=0.006$ * * $p<0.05$

全体に、芝地区、赤坂地区・芝浦港南地区では、町会・自治会に参加している人の割合が比較的高いことがわかった。また、地域の社会活動に参加していない人の割合が低いのは、世帯主・同居者とも芝浦港南地区であり、参加していない人の割合が5地区中最も高いのは、世帯主は麻布地区、同居者は赤坂地区であった。地区により、社会活動への参加傾向にやや違いがあることがわかった。

(7) 経済状況の感じ方について

経済状況の感じ方について、地区別に集計した（表3-13）。どの地区も、「余裕はないが生活していくには困らない」が最も高く、5割から6割弱程度であった。「かなり余裕がある」と「余裕がある」を合わせて、経済状況に余裕があると回答した世帯の割合は、芝地区では21.8%、麻布地区では26.4%、赤坂地区では25.4%、高輪地区では24.9%、芝浦港南地区では14.7%であった。「やや苦しい」と「かなり苦しい」を合わせて、経済状況が苦しいと感じている世帯の割合は、麻布地区、高輪地区では比較的少なく、それぞれ15.1%、17.3%であった。一方、芝地区では23.5%、赤坂地区では22.4%で2割台前半、芝浦港南地区では5地区中最も高く、28.7%を占めた。経済状況の感じ方には、地区別に違いがあることがわかった。

表3-13 地区×経済状況の感じ方

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
かなり余裕がある	20	4.3%	23	4.7%	28	6.2%	40	5.2%	11	3.1%
やや余裕がある	82	17.5%	107	21.7%	87	19.2%	151	19.7%	41	11.6%
余裕はないが生活していくには困らない	257	54.8%	288	58.5%	237	52.2%	442	57.8%	199	56.5%
やや苦しい	73	15.6%	56	11.4%	71	15.6%	97	12.7%	68	19.3%
かなり苦しい	37	7.9%	18	3.7%	31	6.8%	35	4.6%	33	9.4%
合計	469	100.0%	492	100.0%	454	100.0%	765	100.0%	352	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=47.756$ 自由度 16 $p=0.000$ * * $p<0.05$

(8) 家計負担の大きい費目について

家計のなかで負担の大きい費目について、地区別に集計した(表 3-14)。

芝地区では、最も割合が高かったのは「税金(固定資産税など)」で、36.4%を占め、次いで「医療費・通院費」(17.1%)、「家賃・住宅ローンの返済」(13.3%)であった。ほか、「ガス・電気・水道代」(11.6%)と「社会保険料」(11.1%)はともに1割程度であった。

麻布地区では、「税金(固定資産税など)」が最も高く40.6%を占め、次いで「医療費・通院費」が20.0%、「社会保険料」が12.2%であった。「家賃・住宅ローンの返済」(9.5%)、「ガス・電気・水道代」(8.2%)は1割未満であった。

赤坂地区では、「税金(固定資産税など)」が最も高く33.8%を占め、次いで「医療費・通院費」が19.3%であった。ほか、「家賃・住宅ローンの返済」が14.1%、「ガス・電気・水道代」が13.2%、「社会保険料」が10.4%であった。

高輪地区は、「税金(固定資産税など)」が最も高く35.2%を占め、次いで「医療費・通院費」が18.8%であった。ほか、「家賃・住宅ローンの返済」(11.8%)、「ガス・電気・水道代」(11.5%)、「社会保険料」(12.4%)で、1割程度で分散した。

芝浦港南地区は、最も割合が高かったのは「家賃・住宅ローンの返済」で28.0%を占めた。次いで、「税金(固定資産税など)」が15.9%、「社会保険料」が15.6%、「医療費・通院費」が14.2%で、15%前後で分散したほか、「ガス・電気・水道代」が12.7%で1割強を占め、他地区とは異なる傾向を示した。

表3-14 地区×家計負担

	芝地区		麻布地区		赤坂地区		高輪地区		芝浦港南地区	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
家賃・住宅ローンの返済	60	13.3%	45	9.5%	62	14.1%	87	11.8%	95	28.0%
税金(固定資産税など)	164	36.4%	193	40.6%	149	33.8%	260	35.2%	54	15.9%
ガス・電気・水道代	52	11.6%	39	8.2%	58	13.2%	85	11.5%	43	12.7%
医療費・通院費	77	17.1%	95	20.0%	85	19.3%	139	18.8%	48	14.2%
社会保険料	50	11.1%	58	12.2%	46	10.4%	92	12.4%	53	15.6%
その他	47	10.4%	45	9.5%	41	9.3%	76	10.3%	46	13.6%
合計	450	100.0%	475	100.0%	441	100.0%	739	100.0%	339	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=115.885$ 自由度 20 $p=0.000$ * * $p<0.05$

Ⅳ 生活意識について

本調査では、75歳以上高齢者を含む2人世帯の世帯主と同居者それぞれに対して、日々の暮らしをどのように感じているのかを把握するため、10項目の意識に関する調査項目を置いた(表4-1)。意識については「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」までの5段階で回答している(5件法)。ここでは、世帯類型や経済状況など、いくつかの指標をもとに生活意識の比較を行う。なお、分析にあたり読みやすさを考慮し、表4-1のうち○印のついたものは、数が小さい

ほど「まったくそう思わない」、大きくなるほど「とてもそう思う」になるようデータの付け替えを行っている。それにより、意識に関する10項目のどれもにおいて、数が大きいほど良い結果を、数が小さいほど良くない結果を示すように統一している。なお、本章以降、本報告書において生活意識に関するこれら10項目を用いる場合には、この付け替えたあとのデータを用いている。

1 要介助者の有無と生活意識

世帯主か同居者のどちらか、あるいは両方が介助を必要としている世帯と、2人とも介助を必要としない世帯との違いを比較した。調査回答者のうち、2人とも介助を必要としない世帯は1,654ケースで68.0%である。世帯内に介助を必要とする人がいる世帯の合計は777世帯で、32.0%であった(表4-2)。

この結果を指標として、世帯内に介助を必要とする人がいる世帯としない世帯の意識の違いを比較したものが以下である。

(1) 世帯主の生活意識と要介助者の有無

まずは世帯主の意識についてである。世帯内に介助を必要とする人の有無別に、世帯主の意識の平均値を集計し、平均値の差の検定(独立したサンプルのt検定)を行った(表4-3)。たとえば「今の暮らしには張り合いがある」の平均値は、要介助者がいない世帯の世帯主は3.72、要介助者がいる世帯の世帯主は3.17で、介助を必要とする人がいない世帯の世帯主の方が0.55高く、暮らしに張り合いがあると感じていることがわかる。次に、この平均値の差について検定を行った。「今の暮らしには張り合いがある」については、Leveneの検定結果から、等分散性の仮定が満たされなかったため、自由度の修正を行ったうえで、独立したサンプルのt検定を行った。その結果、 $p=0.000$ でこの平均値の差は統計的にも有意であることが認められた($t=12.830$ 、自由度1229.287、

表4-1 意識に関する10項目

	付替	評価	
		1	5
今の暮らしには張り合いがある	○	張り合いがない	張り合いがある
今の暮らしにはストレスが多い		ストレスがある	ストレスがない
生活は充実している	○	充実していない	充実している
生活していて不安や心配がある		不安・心配がある	不安・心配はない
趣味をしている時間は楽しい	○	楽しくない	楽しい
友人との関係に満足している	○	満足していない	満足している
近所づきあいに満足している	○	満足していない	満足している
自分は頼りにされていると思う	○	頼りにされていない	頼りにされている
周囲から取り残されたように感じる		取り残されている	取り残されていない
将来の生活は安心できる	○	安心できない	安心できる

表4-2 世帯の介助の必要性

	実数	%
2人ともほとんど自分でできる	1,654	68.0%
世帯主のみ要介助	364	15.0%
同居者のみ要介助	282	11.6%
2人とも要介助	131	5.4%
合計	2,431	100.0%

※無回答は除く

p=0.000)。すなわち、世帯内に介助を必要とする人がいるグループといないグループとでは、「今の暮らしに張り合いがある」という意識について有意な差があるということである。

次に、「今の暮らしにはストレスが多い」とについて見てみよう。その平均値は、要介助者がいない世帯の世帯主(3.53)の方が、要介助者がいる世帯の世帯主(3.07)よりも0.46高く、ストレスを感じていない人が多い。等分散性のための Levene の検定結果から、等分散性が満たされなかったことから、自由度を調整したうえで、独立したサンプルのt検定を行った結果、p=0.000で2つのグループの平均値の差は有意であることが認められた(t=9.125、自由度 1265.301、p=0.000)。

同様に、すべての項目において、要介助者がいない世帯の世帯主の方が、生活に対して楽しさや安心などのポジティブな意識を持ち、ストレスや不安がない傾向にあることがわかった。それらの項目においても、t検定によって有意差が認められている。

なお、等分散の仮定が満たされていない項目があったことから、併せてノンパラメトリック検定(Mann-Whitney 検定)も行ったところ、t検定の結果と同様に、すべての項目について、要介助者の有無によって分けた2グループ間に有意差が認められた。

以上のことから、要介助者がいない世帯の世帯主の方が、いる世帯の世帯主よりも、生活意識の面で安定していることがわかった。

表4－3 世帯主の意識と世帯内の要介助者の有無

	要介助者がいる			要介助者がいない			等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差	F 値	有意確率	t 値	自由度	p 値
今の暮らしには張り合いがある	715	3.17	0.993	1,582	3.72	0.871	22.056	0.000	12.830	1229.287	0.000
今の暮らしにはストレスが多い	711	3.07	1.153	1,543	3.53	1.044	5.769	0.016	9.125	1265.301	0.000
生活は充実している	711	3.21	1.027	1,570	3.74	0.882	38.715	0.000	11.819	1203.079	0.000
生活していて不安や心配がある	700	2.78	1.174	1,544	3.21	1.114	3.173	0.075	8.223	2242	0.000
趣味をしている時間は楽しい	651	3.49	1.144	1,507	3.99	0.929	99.863	0.000	9.855	1037.109	0.000
友人との関係に満足している	664	3.19	1.149	1,513	3.66	0.981	26.124	0.000	9.149	1105.320	0.000
近所づきあいに満足している	685	2.83	1.067	1,542	3.08	1.013	7.618	0.006	5.255	1252.529	0.000
自分は頼りにされていると思う	700	3.01	1.158	1,548	3.36	1.033	3.952	0.047	6.831	2250	0.000
周囲から取り残されたように感じる	695	3.57	0.980	1,557	3.96	0.828	74.174	0.000	9.270	1154.134	0.000
将来の生活は安心できる	709	2.82	1.057	1,565	3.10	1.024	3.588	0.058	6.077	2272	0.000

(2) 同居者の生活意識と要介助者の有無

次に同居者の意識についても同様の集計を行った(表4-4)。「今の暮らしには張り合いがある」とについて見てみると、要介助者がいない世帯の同居者は平均値が3.74、要介助者がいる世帯の同居者は3.11で、要介助者がいない世帯の同居者の方が「張り合いがある」と感じていることがわかる。以下、すべての項目について、要介助者がいない世帯の同居者の方が、生活に対して楽しさや安心などのポジティブな意識を持ち、ストレスや不安がない傾向にあることがわかった。世帯主と同様の結果である。

これらの平均値の差について、独立したサンプルのt検定を行った。表 4-4 から、「今の暮らしには張り合いがある」を取り上げて、その結果を見てみる。この項目では、Levene の検定により、等分散の仮定が満たされないことから、自由度の修正をしたうえで、t検定を行ったところ、 $p = 0.000$ であったことから、5%水準で有意差が認められた ($t = 14.583$ 、自由度 1172.047、 $p = 0.000$)。他のすべての項目においても同様に、 p 値が 0.05 を下回り、有意差が認められている。また、等分散の仮定が満たされていない項目があったことから、併せてノンパラメトリック検定 (Mann-Whitney 検定) も行ったところ、t検定の結果と同様に、すべての項目について、要介助者の有無によって分けた2グループ間に有意差が認められた。

以上のことから、要介助者がいない世帯の同居者の方が、いる世帯の同居者よりも、生活意識の面で安定しているという、世帯主と同様の結果が得られた。

表4－4 同居者の意識と世帯内の要介助者の有無

	要介助者がいる			要介助者がいない			等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差	F 値	有意確率	t 値	自由度	p 値
今の暮らしには張り合いがある	713	3.11	1.012	1,561	3.74	0.835	27.533	0.000	14.583	1172.047	0.000
今の暮らしにはストレスが多い	703	2.78	1.205	1,531	3.25	1.068	17.569	0.000	8.955	1225.947	0.000
生活は充実している	705	3.16	0.992	1,554	3.72	0.867	15.056	0.000	12.941	1210.615	0.000
生活していて不安や心配がある	699	2.53	1.161	1,527	3.06	1.07	15.917	0.000	10.261	1260.05	0.000
趣味をしている時間は楽しい	633	3.56	1.208	1,505	4.11	0.906	133.573	0.000	10.247	944.406	0.000
友人との関係に満足している	676	3.41	1.116	1,536	3.87	0.916	79.166	0.000	9.466	1092.236	0.000
近所づきあいに満足している	688	2.96	1.089	1,528	3.22	0.983	1.679	0.195	5.586	2214	0.000
自分は頼りにされていると思う	694	3.2	1.202	1,548	3.53	0.962	49.535	0.000	6.355	1107.034	0.000
周囲から取り残されたように感じる	691	3.53	0.997	1,560	3.97	0.852	72.083	0.000	9.886	1155.228	0.000
将来の生活は安心できる	711	2.68	1.072	1,556	3.04	1.002	22.828	0.000	7.534	1296.023	0.000

2 緊急時の支援者の有無と生活意識

(1) 世帯主の生活意識と緊急時の支援者の有無

次に、緊急時の支援者の有無ごとに、意識についての集計を行った。まずは世帯主の意識についてである。表 4-5 から、「今の暮らしには張り合いがある」を取り上げて見てみると、緊急時の支援者がいるグループの平均値は 3.61 であったのに対し、いないグループの平均値は 3.23 と低くなっている。緊急時の支援者がいるグループの世帯主の方が、暮らしに張り合いがあると感じていることがわかる。「今の暮らしにはストレスが多い」については、緊急時支援者がいるグループの平均値が 3.42、いないグループの平均値が 3.20 であり、支援者がいるグループの方が、ストレスを少なく感じていることがわかる。同様に、すべての項目について、緊急時の支援者がいるグループの世帯主の方が、生活に対して楽しさや安心などのポジティブな意識を持ち、ストレスや不安がない傾向にあることがわかった。

こうした2つのグループの平均値の差について、独立したサンプルのt検定を行った。たとえば、「今のくらしに張り合いがある」について見ていくと、Levene の検定の結果、有意確率が 0.979 で等分散の仮定を満たしており、次に、2つの母平均の差の検定の結果、p 値が 0.000 であったことから、5%水準で有意差が認められた ($t=7.090$ 、自由度 2455、 $p=0.000$)。同様に、他の項目についても、2つのグループ間の平均値の差は有意であることが認められている。

また、一部の項目については等分散の仮定が満たされなかったことから、ノンパラメトリック検定 (Mann-Whitney 検定) を行ったところ、すべての項目について有意差が認められた。

以上のことから、緊急時支援者がいる世帯の世帯主の方が、いない世帯の世帯主よりも、生活意識の面で安定していることがわかった。

表4-5 世帯主の意識と緊急時の支援者の有無

	支援者がいる			支援者はいない			等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差	F 値	有意確率	t 値	自由度	p 値
今のくらしには張り合いがある	2,094	3.61	0.942	363	3.23	0.947	0.001	0.979	7.090	2455	0.000
今のくらしにはストレスが多い	2,039	3.42	1.088	363	3.20	1.115	0.108	0.743	3.563	2400	0.000
生活は充実している	2,078	3.63	0.952	360	3.25	1.012	4.093	0.043	6.551	475.545	0.000
生活していて不安や心配がある	2,034	3.13	1.134	357	2.80	1.156	1.709	0.191	5.025	2389	0.000
趣味をしている時間は楽しい	1,974	3.88	1.009	337	3.66	1.110	16.050	0.000	3.415	436.043	0.001
友人との関係に満足している	1,980	3.57	1.034	344	3.18	1.126	7.161	0.008	6.054	449.123	0.000
近所づきあいに満足している	2,032	3.07	1.017	349	2.56	1.051	10.647	0.001	8.460	467.098	0.000
自分は頼りにされていると思う	2,043	3.30	1.073	358	3.02	1.146	0.040	0.841	4.357	473.073	0.000
周囲から取り残されたように感じる	2,050	3.89	0.878	355	3.53	0.963	14.526	0.000	6.608	461.517	0.000
将来の生活は安心できる	2,066	3.09	1.022	363	2.62	1.071	10.182	0.001	7.680	484.921	0.000

(2) 同居者の生活意識と緊急時の支援者の有無

次に、同居者の意識について集計した (表 4-6)。この表から、「今のくらしには張り合いがある」を取り上げて見てみると、緊急時の支援者がいるグループの平均値は 3.56 であったのに対し、いないグループの平均値は 3.38 と低くなっている。緊急時の支援者がいるグループの同居者の方が、くらしに張り合いがあると感じていることがわかる。「今のくらしにはストレスが多い」については、緊急時支援者がいるグループの平均値が 3.11、いないグループの平均値が 2.97 であり、支援者がいるグループの方が、ストレスを少なく感じていることがわかる。同様に、すべての項目について、緊急時の支援者がいるグループの同居者は、より生活に対して楽しさや安心などのポジティブな意識を持ち、ストレスや不安がない傾向にあることがわかった。

こうした2つのグループの平均値の差について、独立したサンプルのt検定を行った。たとえば、「今のくらしに張り合いがある」については、Levene の検定の結果、有意確率が 0.002 で等分散の仮定を満たしていないことから、自由度の修正を行ったうえでt検定を実施したところ、p 値は 0.002 で5%

水準で有意差が認められた($t=3.175$ 、自由度 464.010、 $p=0.002$)。同様に、他の項目についても、2つのグループ間の平均値の差は有意であることが認められている。

また、等分散の仮定が満たされない項目があったことから、ノンパラメトリック検定(Mann-Whitney 検定)を行ったところ、すべての項目について有意差が認められた。

以上のことから、緊急時支援者がいる世帯の同居者の方が、いない世帯の同居者よりも、生活意識の面で安定していることがわかった。

表4－6 同居者の意識と緊急時の支援者の有無

	支援者がいる			支援者がいない			等分散性のための Levene の検定		2つの母平均の差の検定		
	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差	F 値	有意確率	t 値	自由度	p 値
今の暮らしには張り合いがある	2,030	3.56	0.934	356	3.38	1.026	9.352	0.002	3.175	464.010	0.002
今の暮らしにはストレスが多い	1,997	3.11	1.134	344	2.97	1.155	0.037	0.847	2.246	2339	0.025
生活は充実している	2,022	3.56	0.942	351	3.38	1.007	3.762	0.053	3.350	2371	0.001
生活していて不安や心配がある	1,997	2.92	1.123	338	2.71	1.163	3.247	0.072	3.242	2333	0.001
趣味をしている時間は楽しい	1,915	3.96	1.023	332	3.83	1.118	9.968	0.002	1.966	432.470	0.050
友人との関係に満足している	1,975	3.75	0.990	345	3.55	1.080	12.227	0.000	3.309	450.742	0.001
近所づきあいに満足している	1,984	3.18	1.023	344	2.90	1.042	0.000	0.998	4.661	2326	0.000
自分は頼りにされていると思う	1,999	3.44	1.049	351	3.26	1.110	1.727	0.189	2.890	2348	0.004
周囲から取り残されたように感じる	2,008	3.86	0.908	355	3.63	0.989	12.763	0.000	4.012	465.475	0.000
将来の生活は安心できる	2,023	2.98	1.025	357	2.64	1.069	13.260	0.000	5.599	478.635	0.000

3 経済状況の感じ方と生活意識

次に、経済状況の感じ方ごとに、生活意識の差を見ていきたい。経済状況の感じ方を、「余裕がある」(「かなり余裕がある」と「やや余裕がある」)、「余裕はないが暮らしていくには困らない」、「苦しい」(「やや苦しい」と「かなり苦しい」)の3つに区分し(表4-7)、そのそれぞれについての意識の平均値を集計した。なお、経済状況の感じ方については、世帯全体で経済状況をどのようにとらえているのかをたずねている。

表4－7 経済状況の感じ方(3区分)

	実数	%
余裕がある	592	22.1%
余裕はないが生活していくには困らない	1,452	54.2%
苦しい	534	19.9%
無回答	102	3.8%
合計	2,680	100.0%

(1) 世帯主の生活意識と世帯の経済状況

まずは世帯主の意識についてである。経済状況を感じ方ごとに意識の平均値を求め、値の差の検定をするために分散分析を行った。表 4-8 は平均値等を集計した統計量を、表 4-9 は等分散性の検定結果を、表 4-10 は分散分析の結果を示している。

表 4-8 から、「今の暮らしには張り合いがある」を取り上げて見てみると、「余裕がある」グループの平均値は 3.90、「生活には困らない」グループの平均値は 3.59、「苦しい」グループの平均値は 3.03 であった。同じように、すべての項目について、グループにより平均値に差が見られた。

これら平均値の差について、等分散性の確認をしたうえで分散分析を行った結果（表 4-10）、すべての項目について p 値が 0.005 を下回り、統計的に有意であることが確認された（5%水準）。また、ノンパラメトリック検定（Kruskal-Wallis の検定）によっても、有意差が認められている。

経済状況について、「余裕がある」「生活には困らない」「苦しい」という3つのグループの間には、生活意識面において差が見られるということがわかった。

表4－8 経済状況（3区分）別 世帯主の生活意識

	余裕がある			生活していくには困らない			苦しい		
	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差
今の暮らしには張り合いがある	577	3.90	0.902	1405	3.59	0.886	513	3.03	0.991
今の暮らしにはストレスが多い	557	3.64	1.050	1379	3.47	1.049	505	2.92	1.140
生活は充実している	570	3.98	0.855	1403	3.65	0.858	505	2.87	1.046
生活していて不安や心配がある	558	3.55	1.079	1368	3.13	1.070	502	2.41	1.119
趣味をしている時間は楽しい	552	4.00	0.968	1319	3.88	0.985	475	3.55	1.151
友人との関係に満足している	551	3.72	1.049	1329	3.54	1.007	478	3.22	1.134
近所づきあいに満足している	555	3.03	1.098	1371	3.07	1.008	492	2.77	1.031
自分は頼りにされていると思う	558	3.55	1.074	1383	3.27	1.045	498	2.90	1.128
周囲から取り残されたように感じる	558	4.08	0.865	1384	3.87	0.864	500	3.50	0.929
将来の生活は安心できる	566	3.69	0.859	1393	3.08	0.897	507	2.09	0.953

表4－9 経済状況（3区分）別 世帯主の意識 等分散性の検定

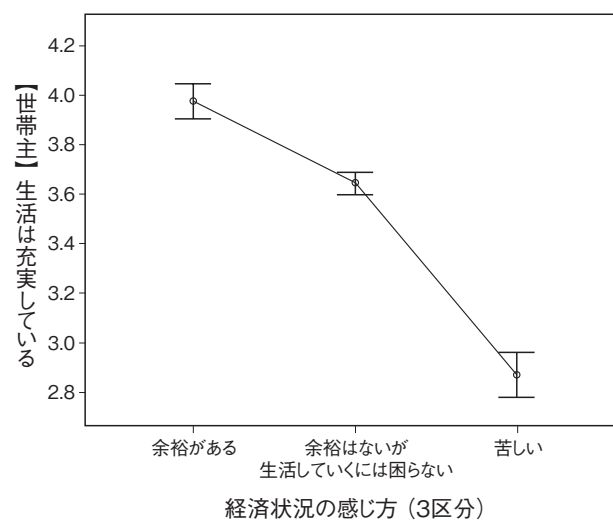
	Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
今の暮らしには張り合いがある	4.979	2	2492	0.007
今の暮らしにはストレスが多い	0.595	2	2438	0.552
生活は充実している	36.672	2	2475	0.000
生活していて不安や心配がある	1.241	2	2425	0.289
趣味をしている時間は楽しい	24.271	2	2343	0.000
友人との関係に満足している	6.345	2	2355	0.002
近所づきあいに満足している	3.833	2	2415	0.022
自分は頼りにされていると思う	0.569	2	2436	0.566
周囲から取り残されたように感じる	7.610	2	2439	0.001
将来の生活は安心できる	4.387	2	2463	0.013

表4－10 経済状況(3区分)別世帯主の意識 分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
今の暮らしには張り合いがある	グループ間	209.487	2	104.744	125.954	0.000
	グループ内	2072.346	2492	0.832		
	合計	2281.833	2494			
今の暮らしにはストレスが多い	グループ間	151.729	2	75.864	66.419	0.000
	グループ内	2784.721	2438	1.142		
	合計	2936.450	2440			
生活は充実している	グループ間	346.647	2	173.324	214.619	0.000
	グループ内	1998.778	2475	0.808		
	合計	2345.426	2477			
生活していて不安や心配がある	グループ間	356.885	2	178.443	152.326	0.000
	グループ内	2840.773	2425	1.171		
	合計	3197.659	2427			
趣味をしている時間は楽しい	グループ間	55.381	2	27.690	26.784	0.000
	グループ内	2422.265	2343	1.034		
	合計	2477.645	2345			
友人との関係に満足している	グループ間	66.348	2	33.174	30.464	0.000
	グループ内	2564.507	2355	1.089		
	合計	2630.855	2357			
近所づきあいに満足している	グループ間	31.698	2	15.849	14.822	0.000
	グループ内	2582.296	2415	1.069		
	合計	2613.993	2417			
自分は頼りにされていると思う	グループ間	109.807	2	54.904	48.031	0.000
	グループ内	2784.547	2436	1.143		
	合計	2894.354	2438			
周囲から取り残されたように感じる	グループ間	91.310	2	45.655	59.197	0.000
	グループ内	1881.042	2439	0.771		
	合計	1972.352	2441			
将来の生活は安心できる	グループ間	695.971	2	347.985	429.314	0.000
	グループ内	1996.412	2463	0.811		
	合計	2692.383	2465			

さて、グループ間の差をエラーバーを用いて示したものが図 4-1 から図 4-4 である。図 4-1 は「生活は充実している」について、経済状況の3グループごとに平均値の位置を示している。この図からは、「余裕がある」「生活には困らない」「苦しい」の順に、値が低くなっていることがわかる。すなわち、経済状況が苦しくなるにつれて、生活への充実感が低くなっていることを示している。平均値の上下にのびたバーが示す 95% 信頼区間において、各グループ間ではバーが重なり合わないことから、有意差があることが見て取れる。なお、多重比較の検定(Bonferroni 法)においても、3つのグループの間にそれぞれ有意差が認められた(5%水準)。

図4－1 経済状況の感じ方別【世帯主】生活は充実している



この傾向は、他の項目においても同様に見られた。図 4-2 は「今の暮らしにはストレスが多い」について、図 4-3 は「将来の生活は安心できる」について、各グループの平均値を示している。「今の暮らしにはストレスが多い」については、平均値が低いほどストレスを感じていることを示している。経済状況が苦しくなるにつれて、ストレスを感じている傾向にあることがわかる。また、「将来の生活は安心できる」については、経済状況が苦しくなるほど、将来の生活への安心感が低くなることがわかる。こうした傾向は、「近所づきあいに満足している」以外のすべての項目に共通している。

図4－2 経済状況の感じ方別【世帯主】ストレスが多い

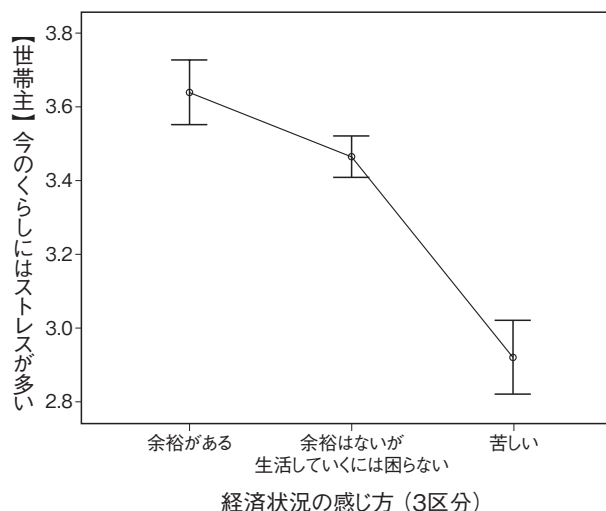
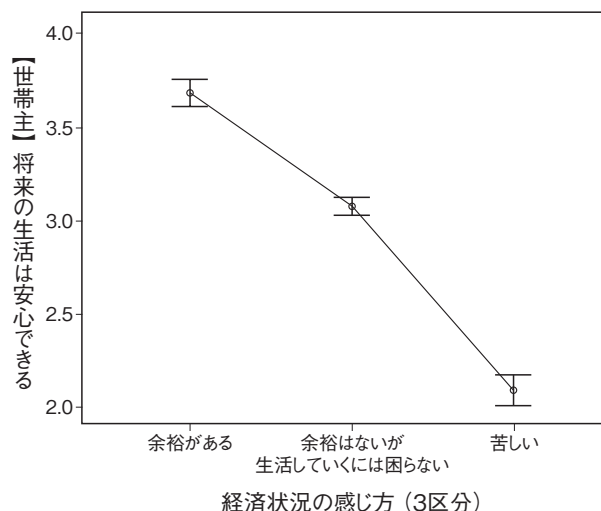
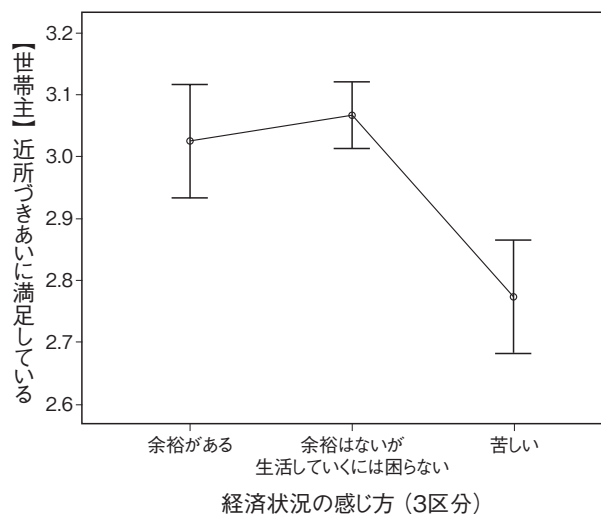


図4－3 経済状況の感じ方別【世帯主】将来の生活は安心



「近所づきあいに満足している」については、他と異なる傾向を示した。図 4-4 はその平均値をグループごとに示したものである。これによれば、近所づきあいへの満足感が最も高いのは「生活には困らない」グループであり、次いで「余裕がある」グループとなっている。また、95%信頼区間を示すバーが重なり合っており、大きな差がないことがうかがえる。一方、経済状況が「苦しい」グループについては、平均値が最も低い。この結果について、多重比較の検定 (Bonferroni 法) を行った結果を示したものが表 4-11 である。この表から、経済状況に「余裕がある」グループと「生活には困らない」グループの間には有意差が認められないが、「苦しい」グループは、「余裕がある」「生活には困らない」とどちらのグループと比べても、有意な差があることがわかる (5%水準)。

図4－4 経済状況の感じ方別【世帯主】近所づきあいに満足



近所づきあいについては、経済状況の苦しいグループの満足感が低いということがわかった。

表4－11 世帯主の生活意識と経済状況の感じ方 (3区分) 多重比較の検定の結果

従属変数	(I) 経済状況の 感じ方 (3区分)	(J) 経済状況の 感じ方 (3区分)	平均値の 差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
近所づきあいに 満足している	余裕がある	生活には困らない	-0.043	0.052	1.000	-0.17	0.08
		苦しい	0.251 *	0.064	0.000	0.10	0.40
	生活には困らない	余裕がある	0.043	0.052	1.000	-0.08	0.17
		苦しい	0.293 *	0.054	0.000	0.16	0.42
	苦しい	余裕がある	-0.251 *	0.064	0.000	-0.40	-0.10
		生活には困らない	-0.293 *	0.054	0.000	-0.42	-0.16

* 5%水準で有意

(2) 同居者の生活意識と世帯の経済状況

つづいて、同居者についても同様の集計を行った。表 4-12 は統計量を、表 4-13 は等分散性の検定結果を、表 4-14 は分散分析の結果を示している。

表 4-12 から、「今の暮らしには張り合いがある」を取り上げて見てみると、「余裕がある」グループの平均値は 3.81、「生活には困らない」グループの平均値は 3.58、「苦しい」グループの平均値は 3.09 であった。同じように、すべての項目について、グループにより平均値に差が見られた。

これら平均値の差について、等分散性の確認をしたうえで分散分析を行った結果（表 4-14）、すべての項目について p 値が 0.005 を下回り、統計的に有意であることが確認された（5%水準）。また、ノンパラメトリック検定（Kruskal-Wallis の検定）によっても、有意差が認められている。

経済状況について、「余裕がある」「生活には困らない」「苦しい」という3つのグループの間には、生活意識面において差が見られるということがわかった。

表4－12 経済状況（3区分）別 同居者の生活意識

	余裕がある			生活していくには困らない			苦しい		
	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差	ケース数	平均値	標準偏差
今の暮らしには張り合いがある	552	3.81	0.891	1,326	3.58	0.892	491	3.09	1.009
今の暮らしにはストレスが多い	545	3.24	1.116	1,303	3.16	1.118	479	2.74	1.144
生活は充実している	551	3.87	0.857	1,319	3.59	0.876	485	3.01	1.029
生活していて不安や心配がある	540	3.19	1.134	1,305	2.97	1.073	483	2.39	1.107
趣味をしている時間は楽しい	533	4.12	0.915	1,256	3.95	1.047	438	3.71	1.096
友人との関係に満足している	538	3.91	0.927	1,295	3.71	0.991	472	3.51	1.094
近所づきあいに満足している	534	3.17	1.056	1,307	3.18	0.994	474	2.96	1.071
自分は頼りにされていると思う	544	3.58	1.018	1,316	3.40	1.056	476	3.21	1.074
周囲から取り残されたように感じる	546	4.03	0.835	1,323	3.85	0.899	481	3.53	1.000
将来の生活は安心できる	550	3.48	0.928	1,326	2.97	0.931	488	2.18	0.992

表4－13 経済状況(3区分)別同居者の意識 等分散性の検定

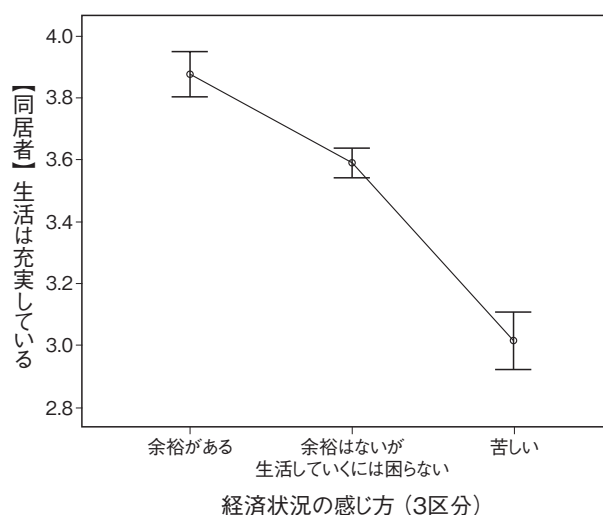
	Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
今の暮らしには張り合いがある	4.979	2	2492	0.007
今の暮らしにはストレスが多い	0.595	2	2438	0.552
生活は充実している	36.672	2	2475	0.000
生活していて不安や心配がある	1.241	2	2425	0.289
趣味をしている時間は楽しい	24.271	2	2343	0.000
友人との関係に満足している	6.345	2	2355	0.002
近所づきあいに満足している	3.833	2	2415	0.022
自分は頼りにされていると思う	0.569	2	2436	0.566
周囲から取り残されたように感じる	7.610	2	2439	0.001
将来の生活は安心できる	4.387	2	2463	0.013

表4－14 経済状況(3区分)別同居者の意識 分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
今の暮らしには張り合いがある	グループ間	209.487	2	104.744	125.954	0.000
	グループ内	2072.346	2492	0.832		
	合計	2281.833	2494			
今の暮らしにはストレスが多い	グループ間	151.729	2	75.864	66.419	0.000
	グループ内	2784.721	2438	1.142		
	合計	2936.450	2440			
生活は充実している	グループ間	346.647	2	173.324	214.619	0.000
	グループ内	1998.778	2475	0.808		
	合計	2345.426	2477			
生活していて不安や心配がある	グループ間	356.885	2	178.443	152.326	0.000
	グループ内	2840.773	2425	1.171		
	合計	3197.659	2427			
趣味をしている時間は楽しい	グループ間	55.381	2	27.690	26.784	0.000
	グループ内	2422.265	2343	1.034		
	合計	2477.645	2345			
友人との関係に満足している	グループ間	66.348	2	33.174	30.464	0.000
	グループ内	2564.507	2355	1.089		
	合計	2630.855	2357			
近所づきあいに満足している	グループ間	31.698	2	15.849	14.822	0.000
	グループ内	2582.296	2415	1.069		
	合計	2613.993	2417			
自分は頼りにされていると思う	グループ間	109.807	2	54.904	48.031	0.000
	グループ内	2784.547	2436	1.143		
	合計	2894.354	2438			
周囲から取り残されたように感じる	グループ間	91.310	2	45.655	59.197	0.000
	グループ内	1881.042	2439	0.771		
	合計	1972.352	2441			
将来の生活は安心できる	グループ間	695.971	2	347.985	429.314	0.000
	グループ内	1996.412	2463	0.811		
	合計	2692.383	2465			

さて、グループ間の差をエラーバーを用いて示したものが図 4-5 から図 4-8 である。図 4-5 は「生活は充実している」について、経済状況の3グループごとに平均値の位置を示している。この図からは、「余裕がある」「生活には困らない」「苦しい」の順に、値が低くなっていることがわかる。すなわち、経済状況が苦しくなるにつれて、生活への充実感が低くなっていることを示している。平均値の上下にのびたバーが示す 95% 信頼区間において、各グループ間ではバーが重なり合わないことから、有意差があることが見て取れる。なお、多重比較の検定(Bonferroni 法)においても、3つのグループの間にそれぞれ有意差が認められた(5%水準)。

図4－5 経済状況の感じ方別【同居者】生活は充実している



この傾向は、他の項目においても同様に見られた。図4-6は「将来の生活は安心できる」について、各グループの平均値を示している。経済状況が苦しくなるほど、将来の生活への安心感が低くなることがわかる。こうした傾向は、「今の暮らしにはストレスが多い」と「近所づきあいに満足している」の2項目以外のすべての項目に共通している。

「今の暮らしにはストレスが多い」と「近所づきあいに満足している」については、他と異なる傾向を示した。図4-7は「今の暮らしにはストレスが多い」について、その平均値をグループごとに示したものである。これによれば、「生活には困らない」グループと「余裕がある」グループの95%信頼区間を示すバーが重なり合っており、両者の間に大きな差がないことがうかがえる。一方、経済状況が「苦しい」グループについては、平均値が最も低く、バーは重なり合わない。この結果について、多重比較の検定（Bonferroni法）を行った結果を示したものが表4-15である。この表から、経済状況に「余裕がある」グループと「生活には困らない」グループの間には有意差が認められないが、「苦しい」グループは、「余裕がある」「生活には困らない」どちらのグループと比べても、有意な差があることがわかる。これらのことから、経済状況の苦しいグループは、他と比べて、今の暮らしにストレスを感じているということがわかった。「近所づきあいに満足している」についても同様の結果であった。

図4-6 経済状況の感じ方別【同居者】将来の生活は安心

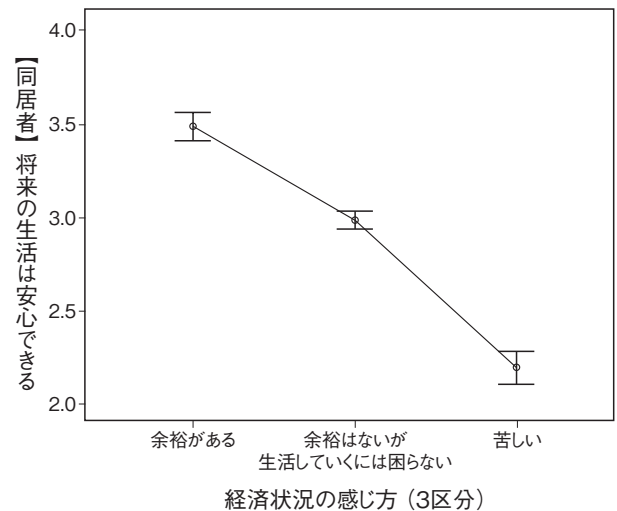


図4-7 経済状況の感じ方別【同居者】ストレスが多い

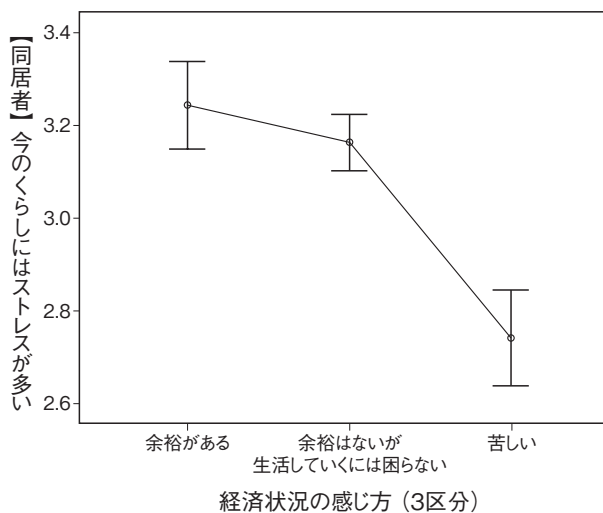


図4-8 経済状況の感じ方別【同居者】近所づきあいに満足

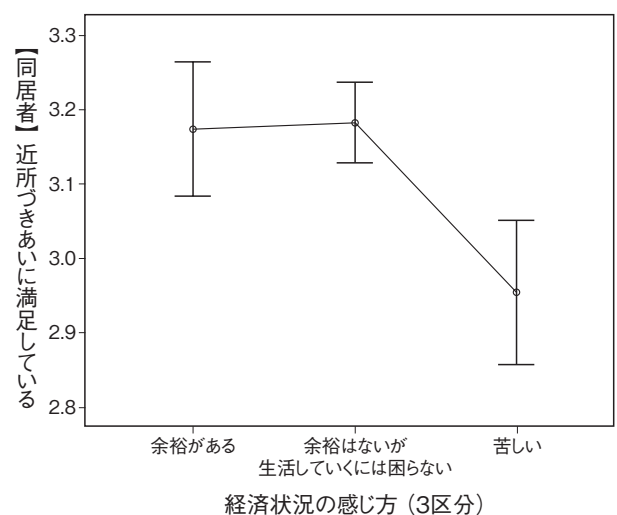


表4－15 同居者の生活意識と経済状況の感じ方（3区分） 多重検定の結果

従属変数	(I) 経済状況の 感じ方（3区分）	(J) 経済状況の 感じ方（3区分）	平均値の 差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
今の暮らしには ストレスが多い	余裕がある	生活には困らない	0.079	0.057	0.508	-0.06	0.22
		苦しい	0.499 *	0.070	0.000	0.33	0.67
	生活には困らない	余裕がある	-0.079	0.057	0.508	-0.22	0.06
		苦しい	0.420 *	0.060	0.000	0.28	0.56
	苦しい	余裕がある	-0.499 *	0.070	0.000	-0.67	-0.33
		生活には困らない	-0.420 *	0.060	0.000	-0.56	-0.28
近所づきあいに 満足している	余裕がある	生活には困らない	-0.009	0.053	1.000	-0.13	0.12
		苦しい	0.218 *	0.065	0.002	0.06	0.37
	生活には困らない	余裕がある	0.009	0.053	1.000	-0.12	0.13
		苦しい	0.227 *	0.055	0.000	0.10	0.36
	苦しい	余裕がある	-0.218 *	0.065	0.002	-0.37	-0.06
		生活には困らない	-0.227 *	0.055	0.000	-0.36	-0.10

* 5%水準で有意

V 夫婦世帯の状況

ここでは、調査回答者のうち、夫婦世帯に注目して、その生活状況などの特徴を見ていく。

1 夫婦世帯の基本的特徴

調査回答者のうち 2,021 ケースは夫婦世帯であった。これは、回答者全体の 75.4%を占めている。そのうち、世帯主が夫で同居者が妻である世帯は 1,996 ケース（98.8%）、世帯主が妻で同居者が夫である世帯は 20 ケース（1.0%）であった（表 5-1）。よって本章では、世帯主を夫、同居者を妻として、本文の記述を行っていくこととする。

以下、夫婦世帯の基本的な特徴を記述していく。

(1) 年齢

夫婦世帯のうち、夫の年齢を階層別に分類したものが表 5-2 である。最も多かったのは「75 歳以上 80 歳未満」で 46.1%、次いで「80 歳以上 85 歳未満」が 30.7%、「85 歳以上 90 歳未満」が 15.0%であった。

一方、妻の年齢階層を見ると（表 5-3）、最も割合が高かったのは「75 歳以上 80 歳未満」で 38.5%、次いで「70 歳以上 75 歳未満」が 26.9%、「80 歳以上 85 歳未満」が 19.7%であった。

平均年齢が、夫が 80.3 歳、妻が 76.2 歳であることから（表 5-4）、妻よりも夫のほうが、年齢が高い傾向にあることがわかる。夫の最高齢は 100 歳で最年少は 62 歳であったが、妻の最高齢は 94 歳で最年少は 43 歳であった。また、夫よりも妻のほうが、年齢の標準偏差が大きく、年齢にばらつきが見られる。

表5－1 世帯主の夫・妻の区別

	実数	%
世帯主が夫・同居者が妻	1,996	98.8%
世帯主が妻・同居者が夫	20	1.0%
無回答	5	0.2%
合計	2,021	100.0%

表5－2 世帯主（おもに夫）の年齢階層

	実数	%
60 歳以上 65 歳未満	4	0.2%
65 歳以上 70 歳未満	13	0.6%
70 歳以上 75 歳未満	52	2.6%
75 歳以上 80 歳未満	931	46.1%
80 歳以上 85 歳未満	621	30.7%
85 歳以上 90 歳未満	304	15.0%
90 歳以上 95 歳未満	66	3.3%
95 歳以上	15	0.7%
無回答	15	0.7%
合計	2,021	100.0%

表5－3 同居者（おもに妻）の年齢階層

	実数	%
40 歳以上 45 歳未満	1	0.0%
45 歳以上 50 歳未満	3	0.1%
50 歳以上 55 歳未満	3	0.1%
55 歳以上 60 歳未満	6	0.3%
60 歳以上 65 歳未満	30	1.5%
65 歳以上 70 歳未満	117	5.8%
70 歳以上 75 歳未満	544	26.9%
75 歳以上 80 歳未満	778	38.5%
80 歳以上 85 歳未満	398	19.7%
85 歳以上 90 歳未満	116	5.7%
90 歳以上 95 歳未満	10	0.5%
95 歳以上	0	0.0%
無回答	15	0.7%
合計	2,021	100.0%

表5－4 夫婦の年齢差

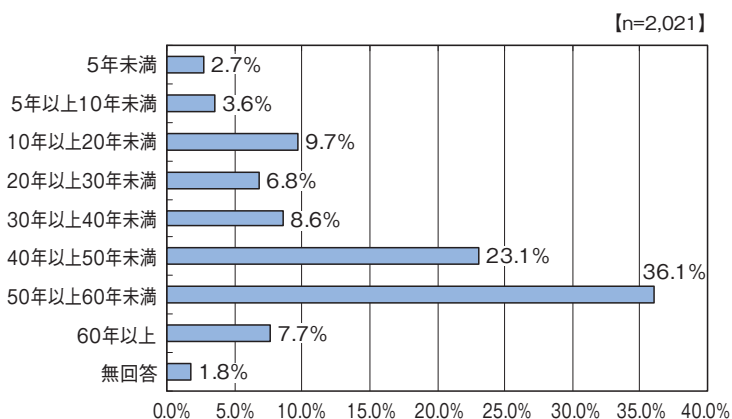
	平均年齢	最高齢	最年少	標準偏差
夫年齢	80.3	100	62	4.74
妻年齢	76.2	94	43	5.46

(2) ふたり暮らしの年数

夫婦世帯のふたり暮らしをしている年数を示したものが図5-1である。「50年以上60年未満」が最も多く36.1%を占め、次いで「40年以上50年未満」が23.1%であった。40年以上と回答した割合が66.9%と夫婦世帯全体の6割半以上を占めている。

またふたり暮らしの平均年数は40.76年であった。

図5-1 夫婦世帯のふたり暮らしの年数

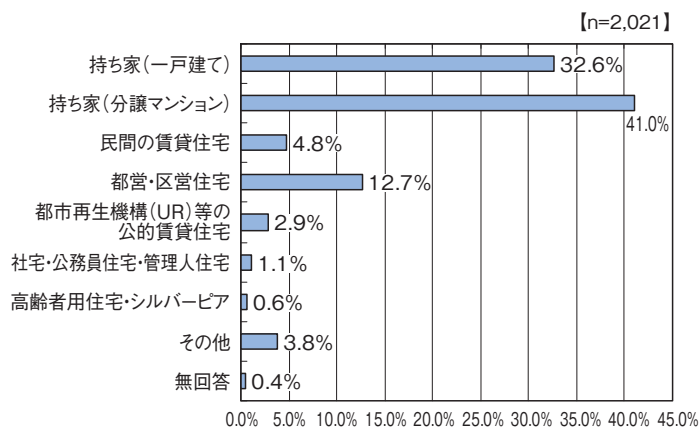


(3) 住宅の種類

続いて夫婦世帯の居住している住宅の種類の割合を図5-2に示している。最も多かったのは、「持ち家（分譲マンション）」で41.0%であった。次いで「持ち家（一戸建て）」と続き、両者を合わせた持ち家率は73.6%となった。

また「都営・区営住宅」に住む人の割合は12.7%であった。

図5-2 夫婦世帯の住宅の種類



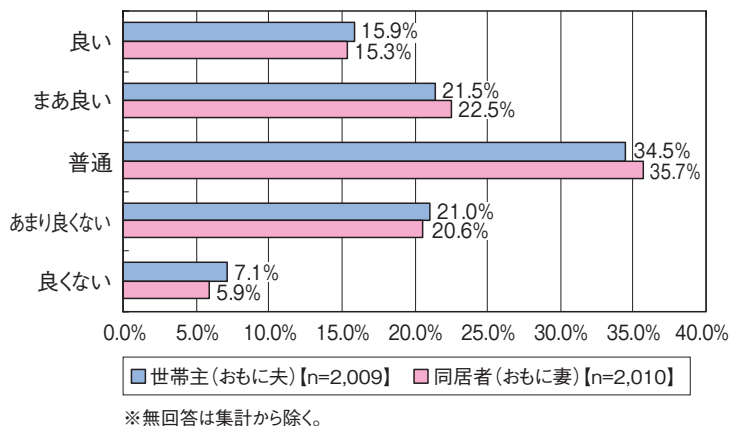
(4) 健康状態と介護の状況について

次に健康状態（主観的健康感）について、夫と妻を別々に集計したものが図5-3である。夫と妻ともに「普通」と回答した割合がもっとも高く3割半程度を占めている。

夫の健康状態については、「あまり良くない」が21.0%、「良くない」が7.1%で、両者を合わせると健康ではないと回答している人が28.1%と、約3割を占めている。「良い」(15.9%)と「まあ良い」(21.5%)を合わせて、健康であると回答している人は37.4%であった。

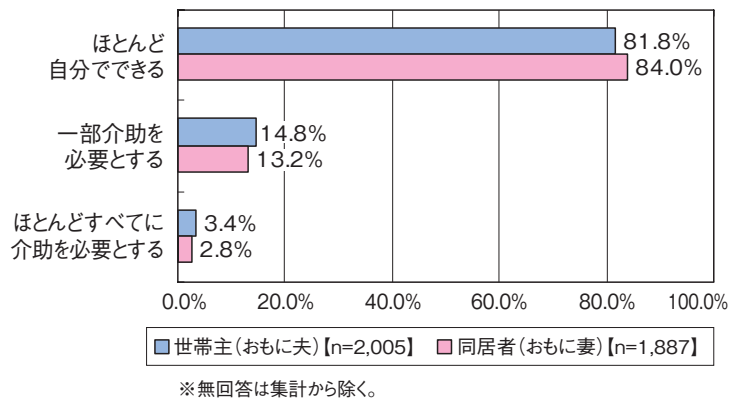
妻の健康状態は、「あまり良くない」が20.6%、「良くない」が5.9%で、両者を合わせて健康ではないと回答している人が26.5%を占めている。一方、「良い」(15.3%)と「まあ良い」(22.5%)を合わせて、健康であると回答している人は37.8%を占めた。夫婦世帯は、親と子どもの世帯と異なり、夫と妻の年齢が近いと、主観的健康状態にそれほど違いが見られなかった。

図5-3 夫婦の健康状態



つづいて夫婦世帯の介護の状況を見てみる。図5-4は、自らの介護の必要性について、夫と妻の回答を比較したものである。「ほとんど自分でできる」と回答した割合は、夫が81.8%、妻が84.0%であり、どちらも8割を超えている。夫は、「一部介護を必要とする」と回答した人は14.8%、「ほとんどすべてに介護を必要とする」と回答した人は3.4%を占めている。一方、妻は「一部介護を必要とする」と回答した人は13.2%、「ほとんどすべてに介護を必要とする」と回答した人は2.8%であり、いずれも夫と同程度の割合であった。

図5-4 夫婦の介護の必要性



上記は、自身から見た主観的な介護の必要性であったが、それを相手から見た介護の必要性と比較したものが表5-5と表5-6である。

先ほど見たように、夫の81.8%は「ほとんど自分でできる」と回答しているが、妻が夫は「ほとんど自分でできる」とした割合は78.1%であった。一方、妻の方は、主観的に「ほとんど自分でできる」とした人が84.0%であったのに対し、夫で妻は「ほとんど自分でできる」とした人は82.6%であった。このことから、主観的な介護の必要性は、客観的に見たものとそれほど変わらない傾向にあるといえる。

表5-5 世帯主（おもに夫）の介護必要性の主観客観比較

	世帯主（おもに夫）の介護の必要性			
	夫自身の視点		妻の視点	
	実数	%	実数	%
ほとんど自分でできる	1,640	81.8%	1,433	78.1%
一部介護を必要とする	296	14.8%	303	16.5%
ほとんどすべてに介護を必要とする	69	3.4%	99	5.4%
合計	2,005	100.0%	1,835	100.0%

表5-6 同居者（おもに妻）の介護必要性の主観客観比較

	同居者（おもに妻）の介護の必要性			
	妻自身の視点		夫の視点	
	実数	%	実数	%
ほとんど自分でできる	1,585	84.0%	1,628	82.6%
一部介護を必要とする	249	13.2%	283	14.4%
ほとんどすべてに介護を必要とする	53	2.8%	59	3.0%
合計	1,887	100.0%	1,970	100.0%

実際の要介護度を聞く設問の回答（表5-7）を見ると、夫婦ともに「要介護認定の申請をしていない」人が7割前後で、要介護度がついておりかつそれを自分でわかっている人は2割前後にとどまっている。「わからない」と回答した人も、夫が10.1%、妻が9.1%と1割程度いることが分かる。図5-5は夫婦別の介護保険制度の利用の有無を集計したものであるが、利用し

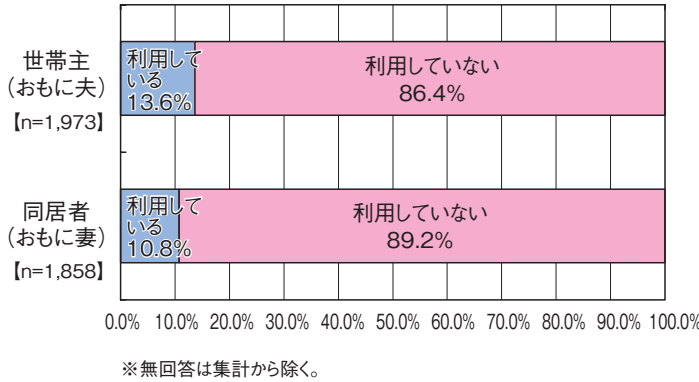
表5-7 夫婦の要介護度

	世帯主（おもに夫）		同居者（おもに妻）	
	実数	%	実数	%
要支援1	87	4.9%	86	5.2%
要支援2	69	3.9%	54	3.3%
要介護1	67	3.7%	42	2.5%
要介護2	61	3.4%	37	2.2%
要介護3	29	1.6%	20	1.2%
要介護4	31	1.7%	18	1.1%
要介護5	18	1.0%	9	0.5%
要介護認定の申請をしていない	1,246	69.6%	1,237	74.8%
わからない	181	10.1%	151	9.1%
合計	1,789	100.0%	1,654	100.0%

※無回答は集計から除く。

ていると回答した人は、夫が13.6%、妻が10.8%と1割程度であった。

図5－5 夫婦の介護保険制度の利用有無



(5) 仕事の状況

現在の就労状況について、夫婦別にその回答を集計すると表5-8のようになった。夫婦世帯のうち、夫は、「自営業や会社等の役員として仕事をしている」と回答した人が21.2%いたが、それ以外の形態で仕事をしている人とあわせても3割程度で、「仕事はしていない」人が66.9%と多数を占めた。妻については、夫よりもさらに仕事をしていない割合が高く、79.4%と約8割の人が「仕事はしていない」と回答している。

表5－8 夫婦の現在の仕事

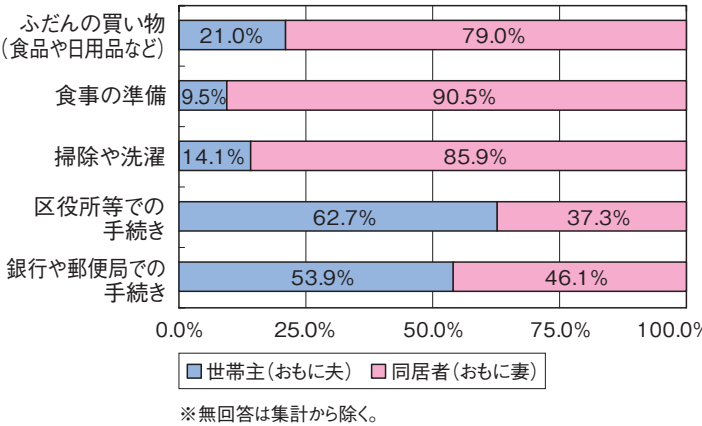
	世帯主（おもに夫）		同居者（おもに妻）	
	実数	%	実数	%
正規職員として仕事をしている	47	2.4%	48	2.6%
非正規職員（嘱託・契約・派遣・パート・アルバイト等）として仕事をしている	74	3.8%	80	4.3%
自営業や会社等の役員として仕事をしている	416	21.2%	190	10.2%
その他の就業形態で仕事をしている	113	5.7%	66	3.5%
仕事はしていない	1,316	66.9%	1,483	79.4%
合計	1,966	100.0%	1,867	100.0%

※無回答は集計から除く。

(6) 家事分担の状況と日常生活上の支援者の存在

図5-6は、普段の家事分担について、夫と妻のどちらが主に担当しているかについて集計したものである。食品や日用品などの普段の買い物については、夫が21.0%、妻が79.0%と、約8割の夫婦世帯で主に妻が買い物に行っていると回答している。

図5－6 夫婦世帯の家事分担

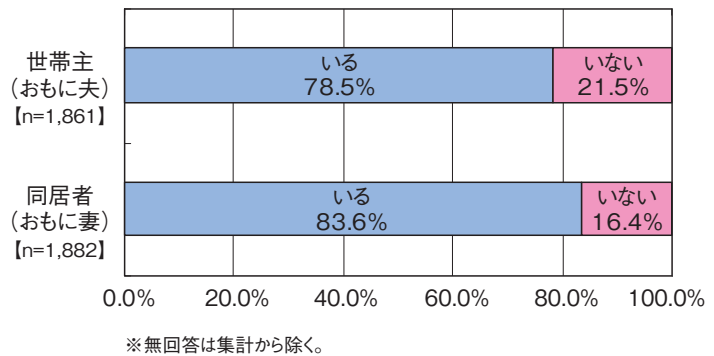


食事の準備を主に担当しているのは、夫は9.5%、妻は90.5%と回答しており、掃除や洗濯は、夫が14.1%、妻が85.9%といずれも9割前後の世帯で、主に妻が担当していることがわかる。

一方、区役所等での手続きは、62.7%は夫が主に担当し、37.3%は妻が主に担当している。銀行や郵便局での手続きは、53.9%が夫、46.1%は妻が主に行っていると回答しており、手続き関係については、夫が主に担当する傾向にある。

また、配偶者以外に、生活上の困りごとを支援してくれる人の有無を夫婦別に見ると、図5-7のようになった。配偶者以外に手伝ってくれる人がいないと回答した人の割合は、夫が21.5%、妻が16.4%で夫のほうはやや高いことがわかった。

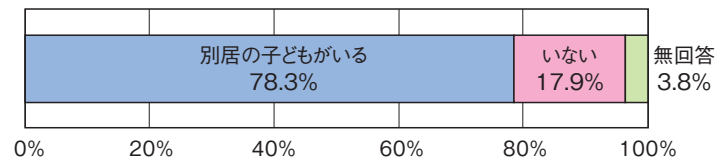
図5－7 配偶者以外に手伝ってくれる人の有無



(7) 別居の子どもの有無

図5-8は、別居する生存子の有無をたずねたものである。78.3%の夫婦世帯が、現在別居している子どもが「いる」と回答している。子どもが「いない」と回答したのは17.9%であった。

図5－8 別居の子どもの有無



(8) 行き来のある家族・親族について

最も行き来のある家族・親族についてたずねた（表5-9）。最も多かったのは「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」で、71.6%を占めた。次に多かったのは「兄弟・姉妹」で、10.1%と1割であった。一方、「誰ともほとんど行き来がない」と回答したのは7.1%、143ケースであった。

表5－9 最も行き来のある家族・親族

	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,448	71.6%
親	8	0.4%
兄弟・姉妹	205	10.1%
親戚	89	4.4%
その他	40	2.0%
誰ともほとんど行き来がない	143	7.1%
無回答	88	4.4%
合計	2,021	100.0%

表5-10は生存子の有無別に見た最も行き来のある家族・親族である。生存子がいる世帯では、最も行き来する家族・親族は「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」が最も多く、86.6%にのぼった。また、「誰ともほとんど行き来がない」世帯はわずか4.0%であった。生存子がない世帯では、当然のことであるが「子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）」と行き来する世帯は25.7%と低くなり、「兄弟・姉妹」が30.4%と高くなる。また、「誰ともほとんど行き来がない」世帯の割合が21.6%と高くなっている。

表5－10 子どもの有無別 最も行き来のある家族・親族

	子どもがいる		子どもはいない	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,341	86.6%	88	25.7%
親	5	0.3%	2	0.6%
兄弟・姉妹	91	5.9%	104	30.4%
親戚	30	1.9%	54	15.8%
その他	19	1.2%	20	5.8%
誰ともほとんど行き来がない	62	4.0%	74	21.6%
合計	1,548	100.0%	342	100.0%

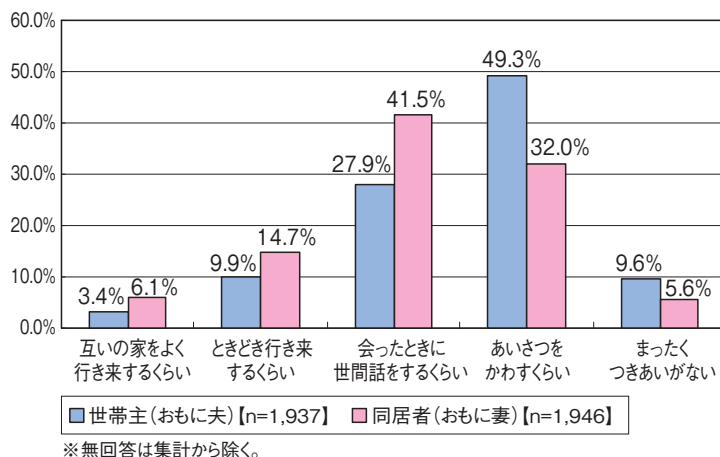
※無回答は集計から除く。

$\chi^2=572.213$ 自由度 5 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

(9) 近所づきあい

近所づきあいの程度について、夫と妻を別に集計したものが図 5-9 である。夫で最も高い割合を占めたのは「あいさつをかわすくらい」の 49.3% で夫全体の半数近くを占めている。一方、妻で最も多かったのは「会ったときに世間話をするくらい」で 41.5% であった。このことから、妻の方が夫に比べて、親密に近所づきあいをする傾向があることがわかる。

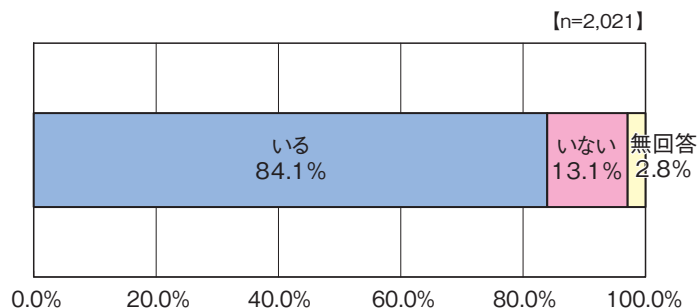
図5－9 夫婦の近所づきあいの程度



(10) 緊急時支援者の有無

急な病気やけがなど、すぐに誰かの手助けが必要なときに支援してくれる人の有無について、「いる」と回答した夫婦世帯は 1,699 ケースで 84.1% を占め、「いない」と回答した夫婦世帯は 265 ケースで 13.1% であった(図 5-10)。

図5－10 夫婦世帯の緊急時支援者の有無



緊急時の支援者が誰かについては(表 5-11)、「子ども(子どもの配偶者、孫などを含む)」が圧倒的に多く、80.5%にのぼった。

表5－11 緊急時の支援者の種類

	実数	%
子ども(子どもの配偶者、孫を含む)	1,367	80.5%
兄弟・姉妹	103	6.1%
親戚	64	3.8%
近所の人	43	2.5%
友人・知人	34	2.0%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	58	3.4%
その他	29	1.7%
合計	1,698	100.0%

緊急時の支援者の有無を、別居の子どもの有無別に集計したものが表 5-12 である。別居の子どもがいる場合には、緊急時の支援者がいない世帯の割合は 9.0% であった。一方、別居の子どもがいない場合には、緊急時の支援者がいない世帯の割合は 31.8% にものぼった。子どもの有無は、緊急時の支援者を得られるかどうかに関係が大きいことがわかる。

表5－12 別居の子どもの有無別 緊急時の支援者の有無

	別居の子どもがいる		別居の子どもはいない	
	実数	%	実数	%
緊急時支援者がいる	1,423	91.0%	242	68.2%
緊急時支援者がいない	140	9.0%	113	31.8%
合計	1,563	100.0%	355	100.0%

※無回答は集計から除く。

$\chi^2=132.184$ 自由度 1 $p=0.000$ * * $p<0.05$

(11) 正月三が日の過ごし方

正月三が日は、伝統的に家族や親族が集まる機会である。正月三が日を「同居者と2人で過ごした」と回答した夫婦世帯は882ケースで、夫婦世帯全体の43.6%を占めている（図5-11）。

別居の子どもの有無別に、正月三が日の過ごし方を集計したところ（図5-12）、別居の子どもがいる世帯では、「同居者と2人で過ごした」世帯は39.6%であったのに対して、別居の子どもがいない世帯では、正月三が日を2人で過ごした世帯は70.1%にのぼった。

(12) 外出頻度と外出時の会話の程度

外出頻度について、夫と妻を分けて集計したものが図5-13である。夫は、「ほとんど毎日」外出する人が最も多く、34.8%を占めていた。次いで「1週間に2、3日くらい」が26.2%、「1週間に4、5日くらい」が20.7%であった。一方、妻は、「1週間に2、3日くらい」が最も多く30.7%で、以下「ほとんど毎日」が30.0%、「1週間に4、5日くらい」が23.9%と続いた。夫と妻のいずれも8割程度が、最低でも1週間に2、3日程度は外出していることがわかった。

外出時の会話の程度を夫婦別に分けて集計したものが図5-14である。夫と妻ともに「普通」程度に会話をしている割合がもっとも高く、夫が44.0%で妻が45.2%であった。また「とてもよく話をする」と「よく話をする」を合わせた外出時の会話が多い傾向にある人は、夫の24.2%に比べて、妻は36.9%とやや多かった。

図5－11 夫婦世帯の正月三が日を過ごした相手

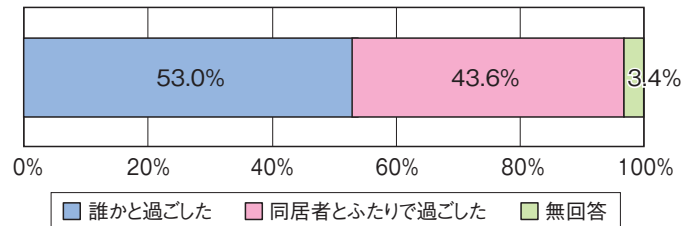


図5－12 別居の子どもの有無別 正月三が日を過ごした相手

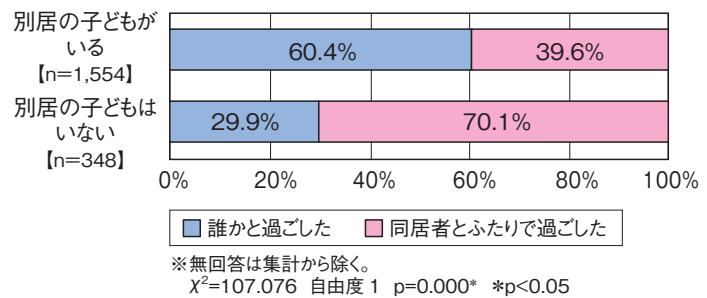


図5－13 夫婦世帯の外出頻度

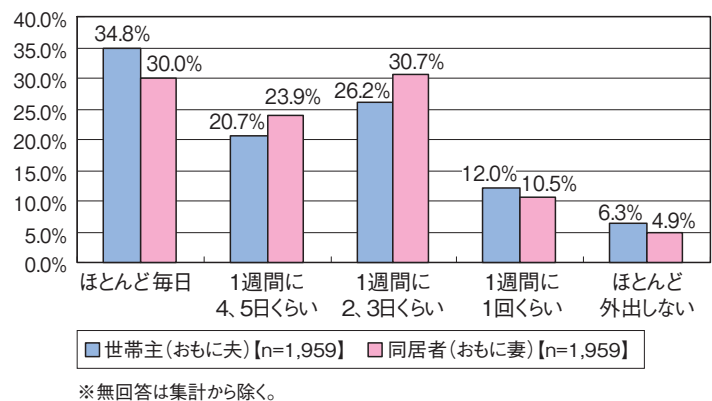
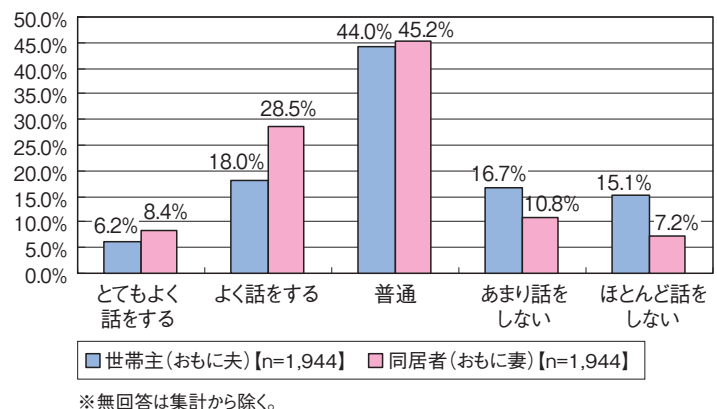


図5－14 夫婦世帯の外出時の会話の程度



(13) 社会参加の状況

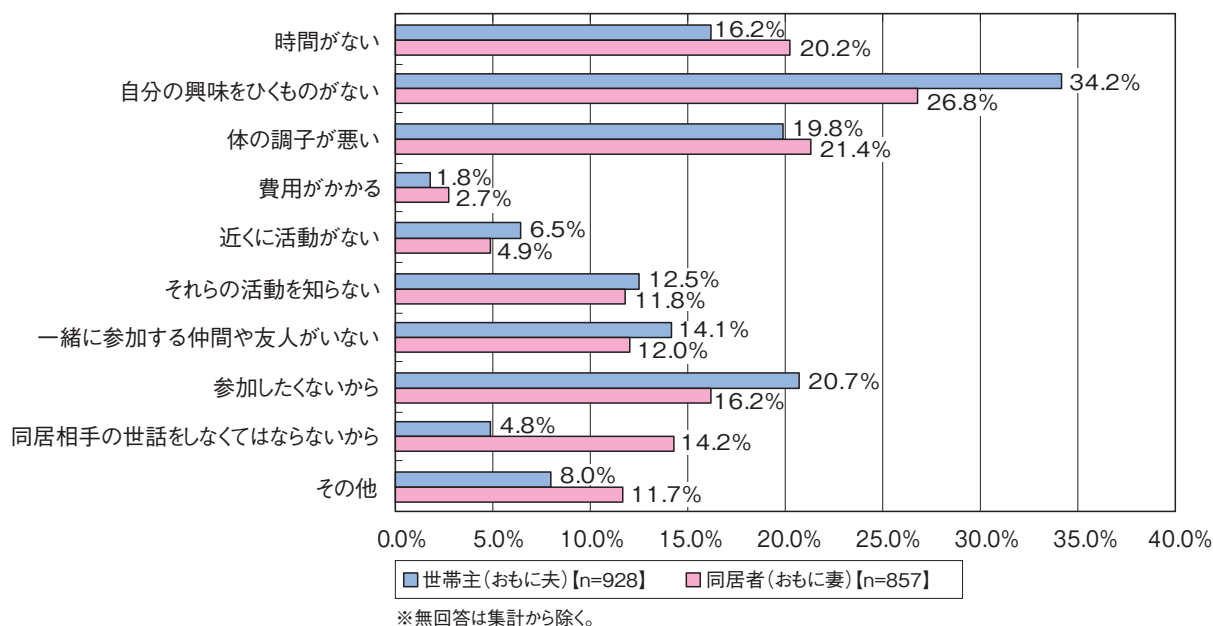
地域で参加している集まりや団体について（複数回答）、夫と妻の違いを見るために集計したものが表 5-13 である。表を見ると、妻よりも夫がより参加する傾向にあるのが、「町会・自治会」であり、妻の 18.6%に対して夫は 23.4%と 4.8 ポイント上回っている。一方、「趣味の会」や「健康づくりの活動」については、夫よりも妻の方が参加している割合が高く、夫がそれぞれ 14.6%と 13.1%であるのに対し、妻は 20.3%、22.4%であった。また「参加していない」と回答した人の割合は、夫は 48.0%、妻は 45.4%とあまり違いは見られなかった。

表5－13 夫婦の参加している社会活動（複数回答）

	世帯主（おもに夫）		同居者（おもに妻）	
	実数	%	実数	%
町会・自治会	460	23.4%	355	18.6%
防犯・防災活動	139	7.1%	66	3.5%
学習の会	50	2.5%	85	4.4%
趣味の会（囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など）	287	14.6%	387	20.3%
社会活動（同窓会・PTAなどの子育ての頃の団体・生協活動など）	108	5.5%	94	4.9%
健康づくりの活動（スポーツ・体操教室など）	258	13.1%	429	22.4%
介護予防事業（健康トレーニング・筋力向上トレーニングなど）	103	5.2%	147	7.7%
老人クラブ	67	3.4%	67	3.5%
ボランティア活動	93	4.7%	114	6.0%
その他	96	4.9%	70	3.7%
参加していない	944	48.0%	868	45.4%

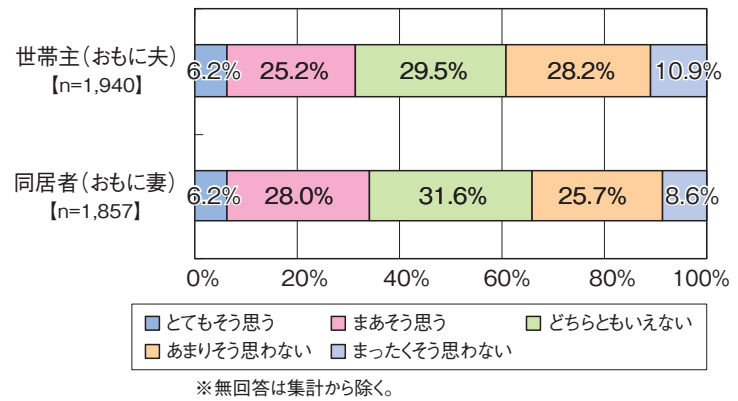
つづいて、地域活動に「参加していない」人について、その理由を見ていく。地域活動に参加しない理由（複数回答）を、夫と妻で別々に集計したものが図 5-15 である。夫婦とも最も多かった理由は、「自分の興味をひくものがない」であり、夫の 34.2%、妻の 26.8%が回答していた。夫はほかに、「参加したくないから」が 20.7%と2割を超えている。妻は、「体の調子が悪い」、「時間がない」がそれぞれ 21.4%、20.2%と2割を超えており、また「夫の世話をしなくてはならないから」が 14.2%と、夫の「妻の世話をしなくてはならないから」の 4.8%に比べて、9.4 ポイントの差が見られた。

図5－15 夫婦世帯の社会活動に参加しない理由（複数回答）



今後地域活動に参加したいかどうかの意向についての回答を集計したものが図 5-16 である。夫婦とも「どちらともいえない」と回答した人が最も多かった。「とてもそう思う」と「まあそう思う」を合わせた今後地域活動に参加したいと思っている人の割合は、夫が 31.4%、妻が 34.2%でほぼ同程度であった。一方、「あまりそう思わない」と「まったくそう思わない」を合わせた今後地域活動に参加したいと思わない人の割合は、夫が 39.1%、妻が 34.3%であり、夫のほうがやや高い傾向が見られる。

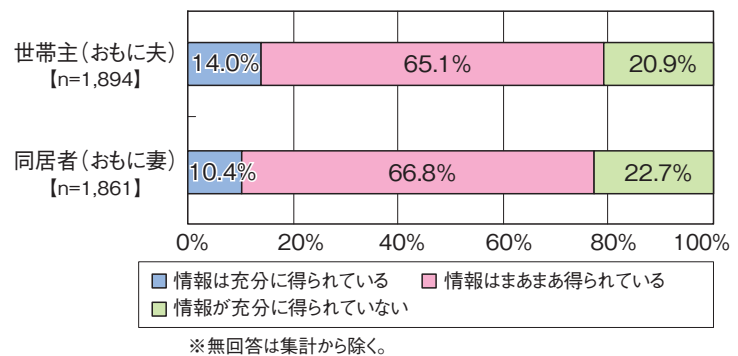
図5－16 夫婦世帯の地域活動への参加意向



(14) 情報の充足について

区の行政サービスに関する情報の充足度合いについて、集計したものが図 5-17 である。「情報は十分に得られている」と「情報はまあまあ得られている」をあわせた情報が得られていると認識している割合は、夫が 79.1%、妻が 77.2%と同程度であった。「情報が十分に得られていない」と感じている人についても、夫が 20.9%、妻が 22.7%とあまり違いがみられなかった。

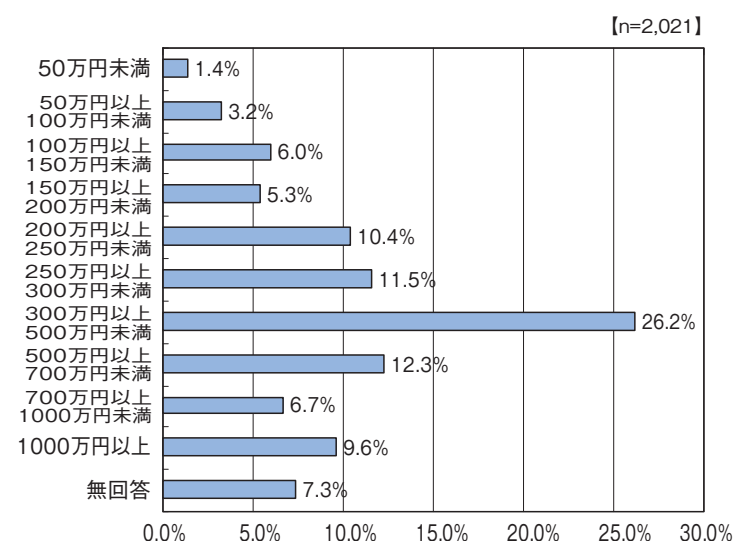
図5－17 夫婦世帯の情報の充足



(15) 経済状況について

世帯の年間収入について、最も割合が高かったのは「300 万円以上 500 万円未満」で 26.2%を占めた（図 5-18）。年間収入が 250 万円未満の世帯は、全体の 26.3%を占めている。

図5－18 夫婦世帯の年間収入



経済状況の感じ方については（図5-19）「余裕はないが生活していくには困らない」が最も多く54.9%を占めた。「かなり余裕がある」と「やや余裕がある」を合わせて「余裕がある」と回答した世帯の割合は、24.0%、「やや苦しい」と「かなり苦しい」を合わせて「苦しい」と回答した世帯は17.7%であった。

おもな収入源について、夫婦別に集計したものが図5-20である。夫婦ともに「年金」が最も多くそれぞれ70.1%、67.7%を占めた。夫と妻の主収入源にそれほど違いは見られない。

家計で負担に感じている費目については（図5-21）、「税金」がもっとも多く、32.0%であった。次いで「医療費・通院費」が18.5%、「社会保険料」が12.8%であった。

図5－19 夫婦世帯の経済状況の感じ方

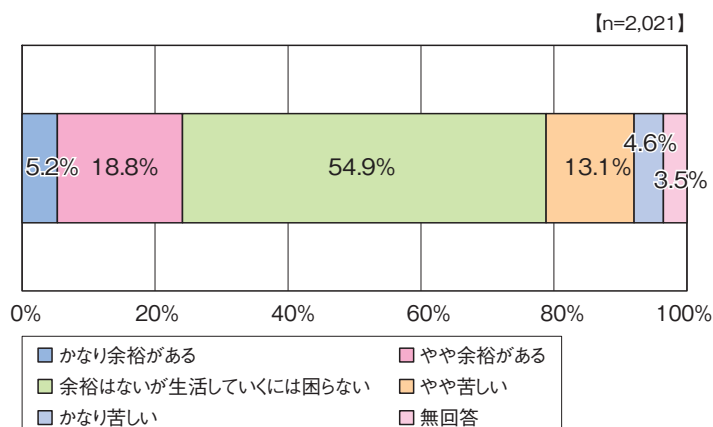


図5－20 夫婦世帯の主な収入源

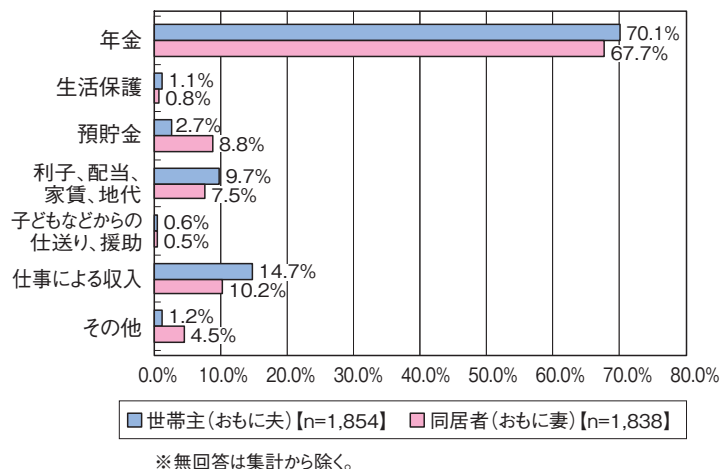
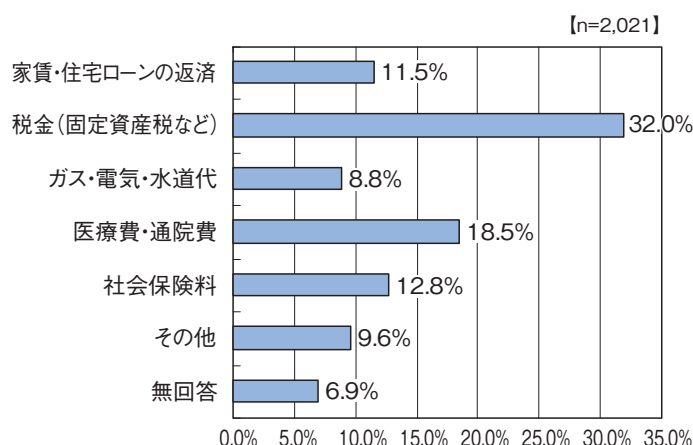


図5－21 夫婦世帯の家計の負担になっている科目



(16) 生活意識について

生活に関する意識(10項目)について、集計したもののうち、夫と妻でやや違いが見られた4つの項目について図示したものが図5-22から図5-25である。まず生活上のストレスや不安の程度を聞いた「今の暮らしにはストレスが多い」(図5-22)、「生活していて不安や心配がある」(図5-23)を見ると、夫よりも妻のほうが、ストレスや不安を感じている割合がやや高いことがわかる。「今の暮らしにはストレスが多い」では、「とてもそう思う」と「まあそう思う」をあわせた今の暮らしにストレスが多いと思っている人たちが、夫が18.9%であったのに対し、妻は28.8%であった。「生活していて不安や心配がある」についても、「とてもそう思う」と「まあそう思う」をあわせた生活に不安や心配があると思っている人たちが、夫が31.6%である一方、妻は37.6%とやや高い傾向にあった。

続いて、友人関係や近所づきあいなど、配偶者以外の人とのつながりに関する意識を尋ねた「友人との関係に満足している」(図5-24)と「近所づきあいに満足している」(図5-25)を夫婦別に見てみると、夫よりも妻のほうが配偶者以外の人とのつながりに満足している傾向にある。

「友人との関係に満足している」では、「とてもそう思う」と「まあそう思う」をあわせた友人関係に満足している割合が、夫は58.0%であったのに対し、妻は70.0%と妻のほうが高かった。また「近所づきあいに満足している」をみると、「とてもそう思う」と「まあそう思う」をあわせた近隣関係に満足している人が、夫は33.2%である一方、妻は40.5%だった。

図5-22 今の暮らしにはストレスが多い

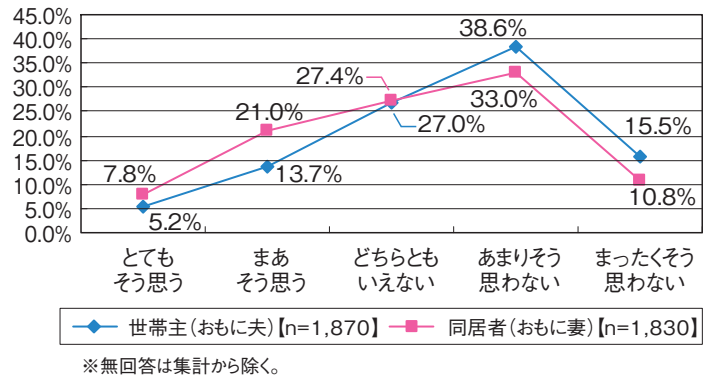


図5-23 生活していて不安や心配がある

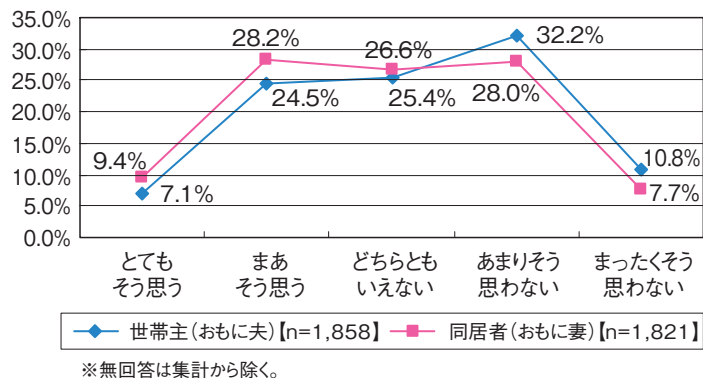


図5-24 友人との関係に満足している

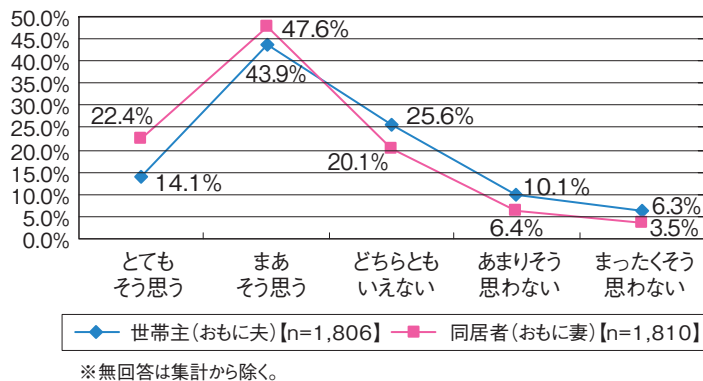
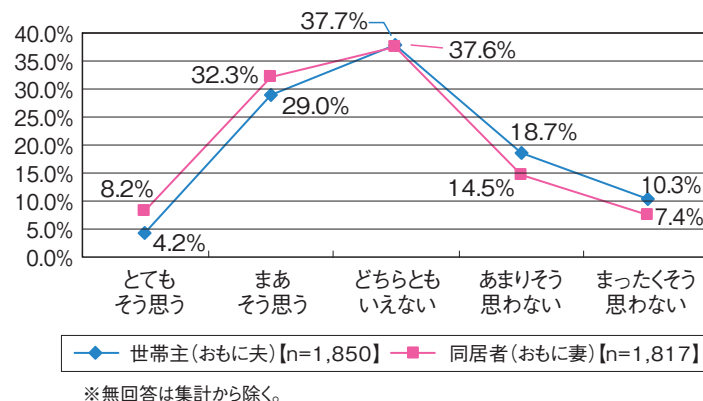


図5-25 近所づきあいに満足している

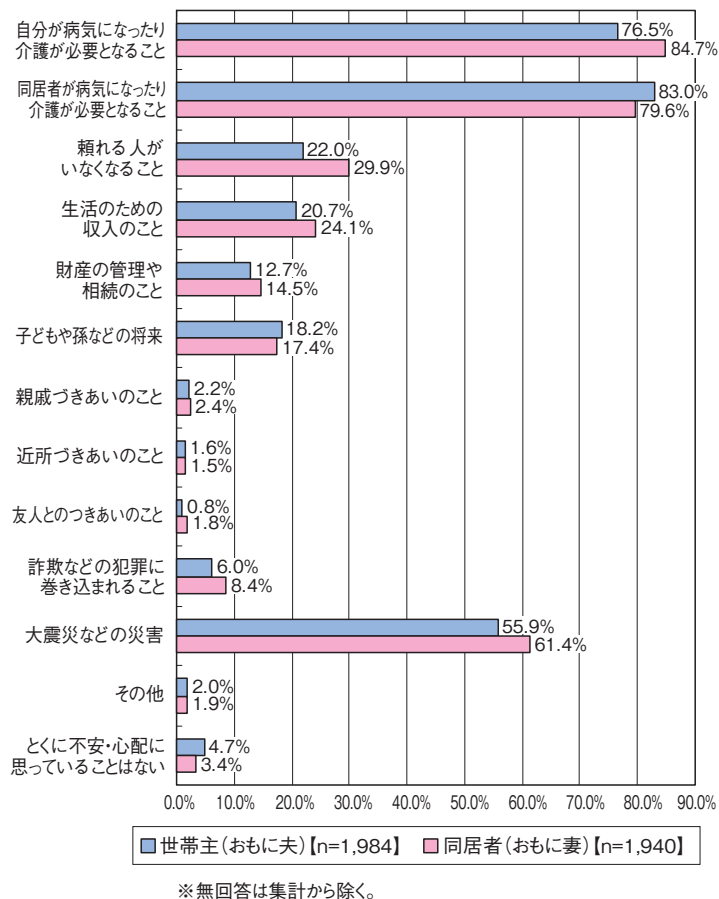


(17) 将来の不安や心配

自身の感じている将来の不安や心配の内容について、夫婦別に集計したものが図 5-26 である。夫でもっとも割合が高かったのは、「同居者が病気になったり介護が必要となること」で 83.0%、次いで「自分が病気になったり介護が必要となること」76.5%であった。一方妻は逆に、「自分が病気になったり介護が必要となること」が 84.7%ともっとも高く、次いで「同居者が病気になったり介護が必要となること」が 79.6%であった。

夫婦世帯の将来の不安や心配については、夫婦間にそれほど違いが見られず、夫婦で同様の不安を抱えている傾向にあるといえる。

図5－26 夫婦世帯の将来の不安・心配（複数回答）



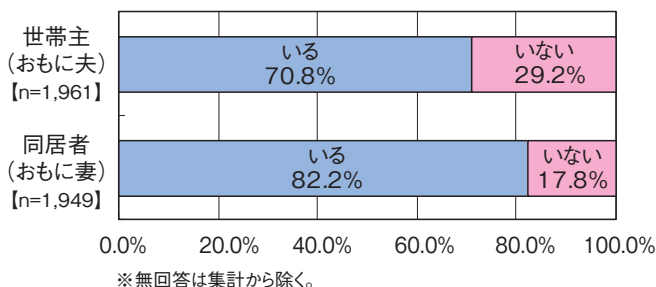
2 夫婦世帯の地域ネットワークの状況

本稿では、高齢者夫婦世帯における友人関係や近所づきあいなどの人間関係を見ていく。親しい友人とのつきあいや近所との地域ネットワークが強ければ、緊急時においても、世帯の生活を支える助けとなることが期待される。しかし、近年では、都心部を中心に高齢者世帯の地域とのつながりの希薄さが指摘されている。このような視点から、ここでは、夫婦世帯の夫と妻を分けて、それぞれの友人・知人関係、近所づきあいの程度、社会活動への参加などを見ていくことで、夫婦世帯のネットワークの状況を探っていくこととする。

(1) 夫婦世帯の友人・知人関係

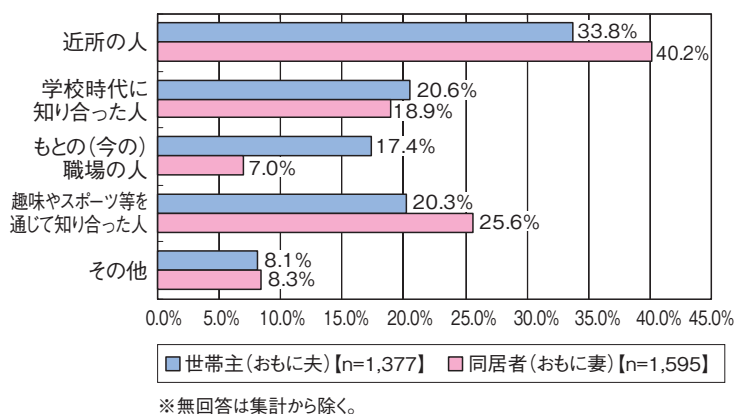
夫婦別の親しい友人・知人の有無について集計したものが図 5-27 である。親しい友人がいる妻が 82.2%と 8 割を超えている一方、夫のほうは 70.8%と 11.4 ポイントの差が出ている。夫の 3 割近くが親しい友人・知人がいないと回答しており、夫は妻よりも友人関係が希薄な傾向にあることが伺える。

図5－27 親しい友人・知人の有無



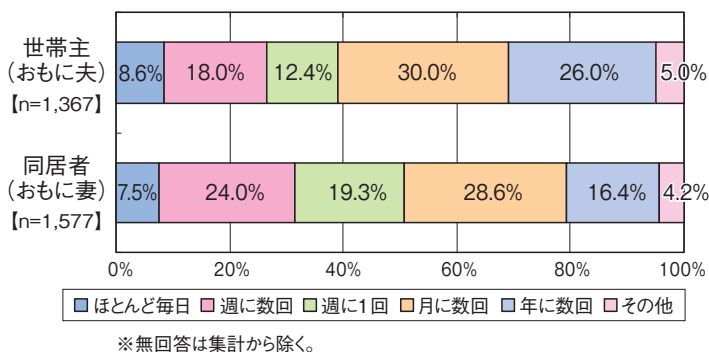
次に、友人・知人の種類を、夫と妻それぞれ集計したものが図 5-28 である。「近所の人」と回答した割合は、夫が 33.8%、妻が 40.2%と妻の方が高かった。「趣味やスポーツ等を通じて知り合った人」についても、夫が 20.3%であったのに対して、妻は 25.6%と高い。一方、「もとの（今の）職場の人」と回答した人の割合は、夫が 17.4%で、妻の 7.0%に比べて高い。「学校時代に知り合った人」については、夫が 20.6%、妻が 18.9%とそれほど差は見られなかった。

図5－28 友人・知人の種類



その友人・知人との連絡・行き来の頻度を夫婦別で見たものが、図 5-29 である。「ほとんど毎日」と回答した割合は、夫が 8.6%、妻が 7.5%と違いは見られなかったが、「週に数回」、「週に1回」と回答した割合は、夫がそれぞれ 18.0%と 12.4%、妻が 24.0%と 19.3%と、連絡・行き来の頻度については、妻のほうやや多い傾向が見られる。また、夫は「年に数回」との回答が 26.0%で、4分の1程度を占めている。

図5－29 友人・知人との連絡・行き来の頻度

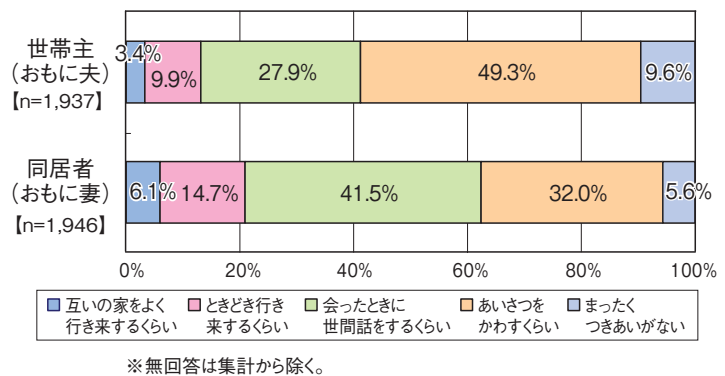


(2) 夫婦世帯の近所づきあいの程度

次に夫婦世帯の近所づきあいの状況を、夫婦別に見ていく。図5-30は、近所づきあいの程度について、夫と妻を分けて集計したものである。

夫は、「あいさつをかわすくらい」がもっとも多く49.3%と約半数を占め、「会ったときに世間話をするくらい」が27.9%であった。「まったくつきあがない」と回答した人も9.6%と1割近く存在し、「互いの家をよく行き来するくらい」、「ときどき行き来するくらい」と回答した人は3.4%、9.9%であった。一方妻は、「会ったときに世間話をするくらい」と回答した人の割合が41.5%でもっとも多く、次いで「あいさつをかわすくらい」が32.0%であった。「互いの家をよく行き来するくらい」、「ときどき行き来するくらい」の回答割合もそれぞれ6.1%、14.7%をあわせて2割を超えており、夫よりも親密に近所づきあいをする傾向にあることが分かる。

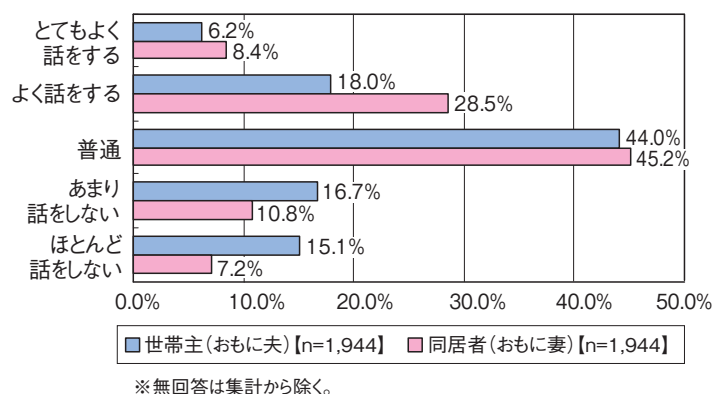
図5-30 近所づきあいの頻度



(3) 夫婦世帯の外出時の会話の程度

つづいて、外出した際にどの程度会話をしているかについて、夫婦別に集計した(図5-31)。夫の場合、「よく話をする」と回答した人は18.0%で、「とてもよく話をする」(6.2%)とあわせても24.2%で4分の1に満たなかった。反対に、「あまり話をしない」は16.7%、「ほとんど話をしない」は15.1%を占め、両者をあわせて31.8%の人が外出時に会話をしない傾向にあることが分かる。

図5-31 外出時の会話の程度



一方、妻は、「よく話をする」と回答した割合は28.5%で、夫に比べて10.5ポイント高く、「とてもよく話をする」(8.4%)とあわせると36.9%の人が外出時によく話をするとは回答している。「あまり話をしない」(10.8%)と「ほとんど話をしない」(7.2%)をあわせても18.0%で2割以下であり、妻には、夫よりも外出時に会話をする傾向が見られる。

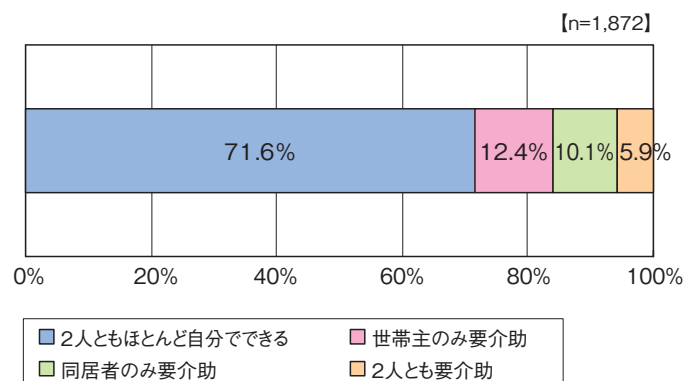
3 介助の必要性和夫婦世帯の生活状況

日常生活上、なんらかの介助を必要とする人がいる夫婦世帯の生活状況について見ていく。夫婦世帯の8割以上に緊急時の支援者がいるなど、先述の基本的特徴を見る限りでは、夫婦世帯の生活は比較的安定しているように見える。しかし、高齢者夫婦世帯では、世帯の一方がもう一方を介護するのに精一杯で、生活の様々な部分に困難を抱えているケースもあり、そういった世帯は、孤立する可能性もありうる。ここでは、特に介助を必要としている人がいる夫婦世帯に着目し、介助を必要としている人がいない世帯と比較をしながら、その状況を見ていくこととする。

(1) 夫婦世帯と介助の必要性

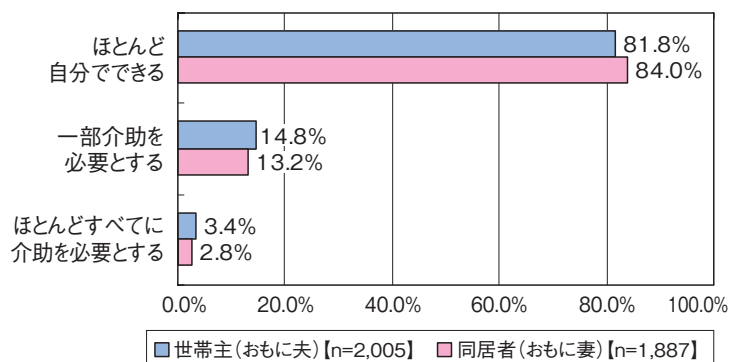
図5-32は夫婦世帯の介助の必要性を見たものである。「2人ともほとんど自分でできる」と回答した割合が71.6%と最も高かった。「世帯主のみ要介助」と「同居者のみ要介助」をあわせた、世帯に1人要介助の人がいる割合は22.5%、世帯の2人ともが要介助である世帯の割合が5.9%であり、夫婦世帯の約3割に、要介助の人が少なくとも1人いることがわかった。

図5-32 夫婦世帯の介助の必要性



つづいて、自らの介助の必要性について夫婦での違いを見るため、夫と妻の回答を比較した図5-4を再掲すると、介助の必要性については、夫と妻で割合にあまり差がないことがわかっている。

(再掲) 図5-4 夫婦の介助の必要性



※無回答は集計から除く。

(2) 介助の必要性和家事分担

夫婦世帯においては、表5-14で示されているように、「ふだんの買い物」、「食事の準備」、「掃除や洗濯」については、妻が担当している割合が圧倒的に高い。一方、「区役所等での手続き」や「銀行や郵便局での手続き」など事務的なものについて担当しているのは、夫が多いあるいは夫と妻が半々という結果が出ている。しかし、夫婦世帯の一方に介助が必要になれば、この家事分担も変わり、介助をしている方への負担が大きくなることが考えられる。そこで、介助の必要性別に夫と妻の家事分担がどのように変化するかを見ていくこととする。

表5-14 夫婦世帯の家事分担

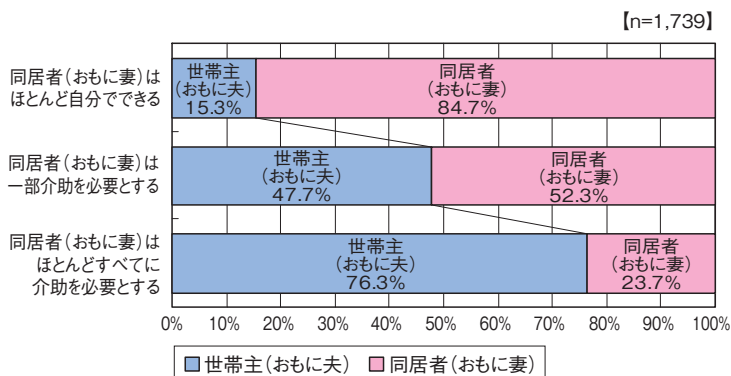
	世帯主 (おもに夫)		同居者 (おもに妻)	
	実数	%	実数	%
ふだんの買い物	390	21.0%	1,465	79.0%
食事の準備	177	9.5%	1,689	90.5%
掃除や洗濯	261	14.1%	1,593	85.9%
区役所等での手続き	1,166	62.7%	694	37.3%
銀行や郵便局での手続き	1,005	53.9%	858	46.1%

※無回答は集計から除く。

①ふだんの買い物

図 5-33 は、夫婦世帯全体を見たときにふだんの買い物を担当する割合が高かった妻の介助の必要性別に、買い物を夫と妻のどちらが担当しているかを表したものである。妻に介助が不要で「ほとんど自分でできる」世帯は、84.7%がふだんの買い物を妻が担当していると回答しているが、妻が「一部介助を必要とする」世帯は 52.3%、妻が「ほとんどすべてに介助を必要とする」世帯は 23.7%となっている。妻が「ほとんどすべてに介助を必要とする」夫婦世帯では、76.3%が買い物を夫が担当していることがわかる。

図5－33 「同居者（おもに妻）の介助必要性別」ふだんの買い物の担当

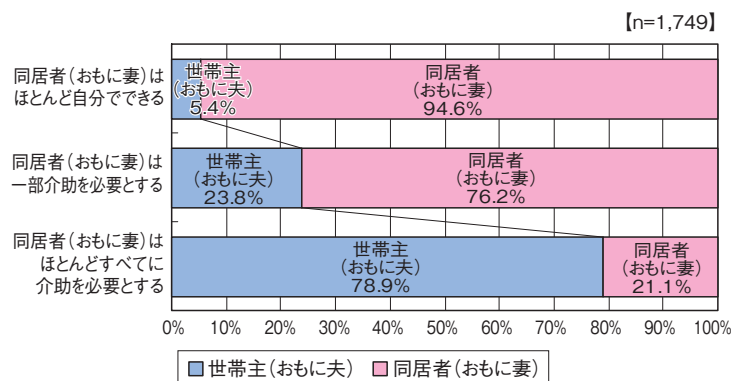


※無回答は集計から除く。X²=195.131 自由度 2 p=0.000* *p<0.05

②食事の準備

つづいて、夫婦世帯全体の 90.5%において、妻が担当している食事の準備について見てみる。図 5-34 で、妻の介助の必要性別に、食事の準備を夫と妻のどちらが担当しているかを示した。妻に介助が不要で「ほとんど自分でできる」世帯は、94.6%が食事の準備を妻が担当している。しかし、妻が「一部介助を必要とする」世帯は 76.2%、妻が「ほとんどすべてに介助を必要とする」世帯は 21.1%と減少している。妻が「ほとんど自分でできる」世帯で夫が食事の準備をしているのは 5.4%であるのに対し、「ほとんどすべてに介助を必要とする」夫婦世帯では、78.9%が食事の準備を夫が担当しており、73.5 ポイントもの差があった。

図5－34 「同居者（おもに妻）の介助必要性別」食事の準備の担当

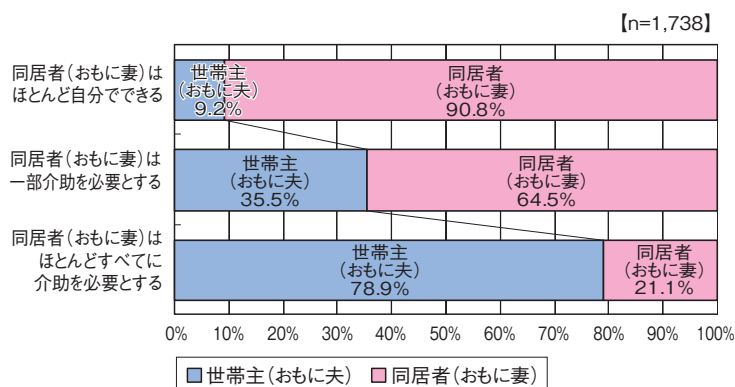


※無回答は集計から除く。X²=299.672 自由度 2 p=0.000* *p<0.05

③掃除や洗濯

次に、夫婦世帯全体の 85.9%で妻が主に担当している掃除や洗濯について、妻の介助の必要性別に、夫と妻のどちらが担当しているかを示したものが、図 5-35 である。妻が日常生活のことを「ほとんど自分でできる」世帯は、90.8%が掃除や洗濯を妻が担当していると回答しているが、妻が「一部介助を必要とする」世帯は 64.5%、妻が「ほとんどすべてに介助を必要とする」世帯は 21.1%となっている。妻

図5－35 「同居者（おもに妻）の介助必要性別」掃除や洗濯の担当



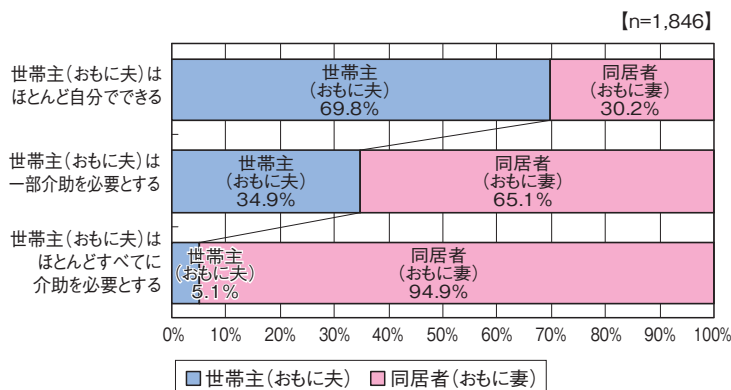
※無回答は集計から除く。X²=245.316 自由度 2 p=0.000* *p<0.05

が「ほとんど自分でできる」ほどに元気な頃は、夫が掃除等をしている世帯は9.2%と1割に満たないが、介助が必要になるにつれて、その割合は高くなる。妻が「ほとんどすべてに介助を必要とする」夫婦世帯は、その78.9%で夫が掃除等を担当していることがわかった。

④区役所等の手続き

夫婦世帯全体の62.7%で夫が行っていた区役所等の手続きについて見てみる。図5-36は、夫の介助の必要性別に、区役所等の手続きを夫と妻のどちらが担当しているかを示したものである。夫に介助が不要で「ほとんど自分でできる」世帯は、69.8%が区役所等の手続きを夫が担当している。しかし、夫が「一部介助を必要とする」世帯は34.9%、夫が「ほとんどすべてに介助を必要とする」世帯はわずか5.1%であった。

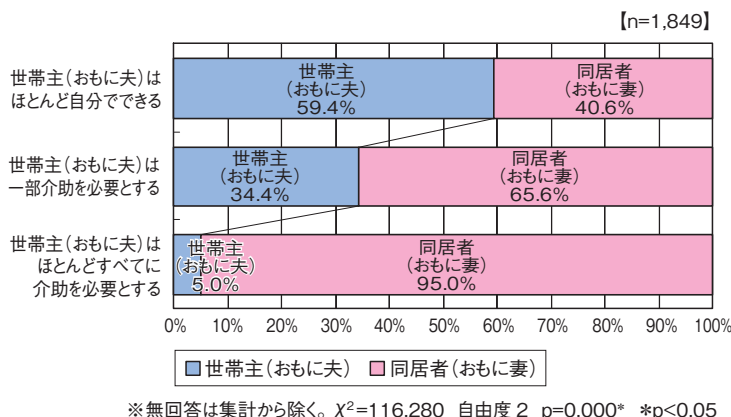
図5-36 「世帯主（おもに夫）の介助必要性別」区役所等の手続きの担当



⑤銀行や郵便局での手続き

銀行や郵便局での手続きをする割合が高い夫の介助の必要性別に、銀行等での手続きを夫と妻のどちらが担当しているかを表したものが図5-37である。夫が日常生活のことを「ほとんど自分でできる」世帯は、59.4%が銀行や郵便局での手続きを夫が担当していると回答している。しかし、夫が「一部介助を必要とする」世帯は34.4%、夫が「ほとんどすべてに介助を必要とする」世帯は5.0%となっている。

図5-37 「世帯主（おもに夫）の介助必要性別」銀行や郵便局での手続きの担当



⑥夫婦世帯の家事分担について言えること

これまでの家事分担のデータからわかるように、高齢者夫婦世帯の一方に介助が必要になると、介助が必要になった相手方がそれまで担当していた家事を、もう一方が担当することで負担が大きくなる。なかでも、夫の家事への負担感には注目したい。本調査の回答者である夫の平均年齢は80.3歳である。この世代の男性は、掃除や洗濯、炊事などの家事を配偶者に任せることが一般的であったと考えられる。それは、妻が元気であれば、日常の買い物から食事の準備、掃除や洗濯などの家事はほとんどの世帯で妻が担っているという今回の調査結果からももうかがえる。それだけに、夫婦世帯の妻が要介助となった場合、妻の世話をしながら、慣れない家事も担うことになった高齢の夫の家事への負担感は、大きいのではないかと考えられる。

(3) 同居相手が要介助である人の生活意識

次に、同居相手の介助の必要有無別に、生活意識の違いを見ていく。ここでは、同居相手の介助の必要性を図るものとして、同居相手の介助の必要性を客観的に見た「同居している方は、日常生活を送るためになんらかの介助を必要としていますか」という質問への回答を用いる。

① 介助者のストレスや不安、将来の安心

まず、同居している相手方に介助が必要だと感じている人が、不要と考えている人と比べて、感じるストレスや不安に違いがあるかについて、生活意識に関する回答から見ていくこととする。

図 5-38 を見ると、今のくらしにストレスが多いかについて、「とてもそう思う」と「まあそう思う」という回答をあわせたストレスが多いと感じている割合について、妻に介助が不要だと感じている夫は 16.9% がストレスが多いと感じているとしたのに対し、介助が必要だと考えている夫は 28.7% と高い傾向にあった。一方、図 5-39 では、夫に介助が不要と感じている妻でストレスが多いと感じている人が 23.0% であったのに対し、夫に介助が必要だと考えている妻の 49.5% が今のくらしにはストレスが多いと回答している。

夫婦世帯の相手方に介助が必要だと感じている人は、そう感じていない人に比べて、日々の暮らしにストレスを感じる傾向にあり、それは、妻のほうでより顕著に見られる。

次に、「生活していて不安や心配がある」という問いに対する相手方に介助が必要と感じる人とそうでない人の回答を比較したものが図 5-40 (夫) と図 5-41 (妻) である。「とてもそう思う」と「まあそう思う」をあわせた生活していて不安や心配がある夫は、妻に介助が不要であると考えている人が 28.7% であったのに対し、妻に介助が必要だと考えている人は、44.2% と 15.5 ポイントの差があった。同様に、妻を見てみると、生活していて不安や心配があるとした、夫に介助が不要と考えている妻は 32.1% であったのに対し、必要と考えている妻は 57.4% と半数以上が生活していて不安や心配があると回答している。

図5-38 世帯主(おもに夫)「今のくらしにはストレスが多い」

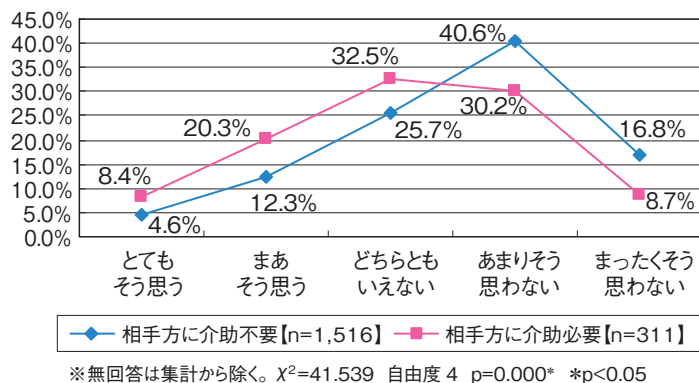


図5-39 同居者(おもに妻)「今のくらしにはストレスが多い」

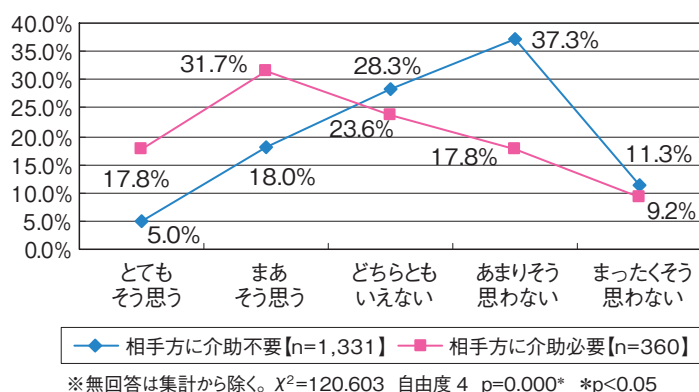
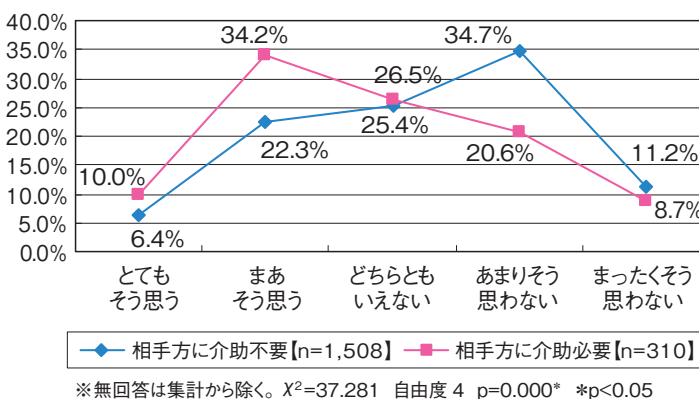


図5-40 世帯主(おもに夫)「生活していて不安や心配がある」



前述のストレスと同様、不安や心配についても、相手方に介助が不要と考えている人よりも必要と考えている人、夫よりも妻のほうが感じる傾向にあり、しかもストレスよりも、その傾向が強いことがわかった。

最後に、将来の生活は安心できるかどうかを聞いた設問の回答状況を見てみる。まず、夫についてである。妻の介助が不要と感じている人と必要と感じている人の回答結果をグラフにしたものが図 5-42 である。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」をあわせた将来の生活が安心できないと思っている割合は、妻に介助が不要と感じている夫が 24.8%、必要と感じている夫が 31.6%で前述のストレスや不安と比べると差は小さいが、必要と感じている夫のほうが割合はやや高く出ている。一方、妻で将来の生活が安心できないと思っている割合は、夫に介助が不要と考えている人が 24.1%、必要と考えている人が 25.3%であり、夫の介助が必要と感じている妻は、将来の生活が安心できないと考えている割合が夫の介助は不要と考えている人に比べてやや高いことがわかる。

将来の生活の安心についても、これまで見てきたストレスや不安と同様の傾向が見られるが、前述の2つよりは、相手方に介助が不要と考えている人と必要と考えている人との差は小さいことがわかった。

図5－41 同居者（おもに妻）「生活していて不安や心配がある」

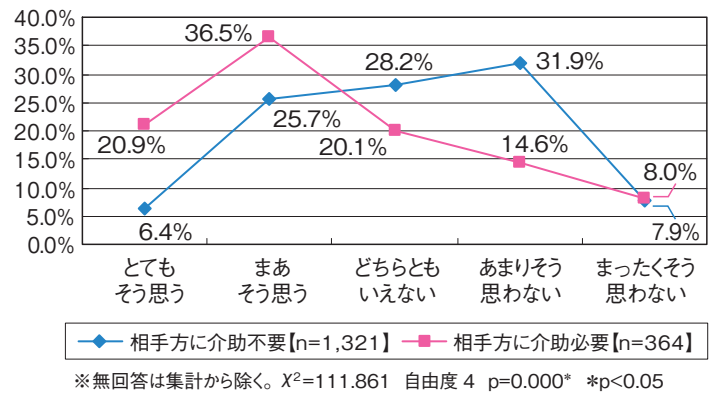


図5－42 世帯主（おもに夫）「将来の生活は安心できる」

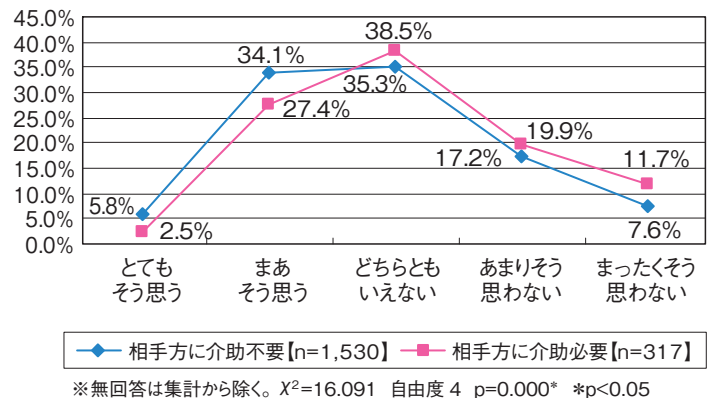
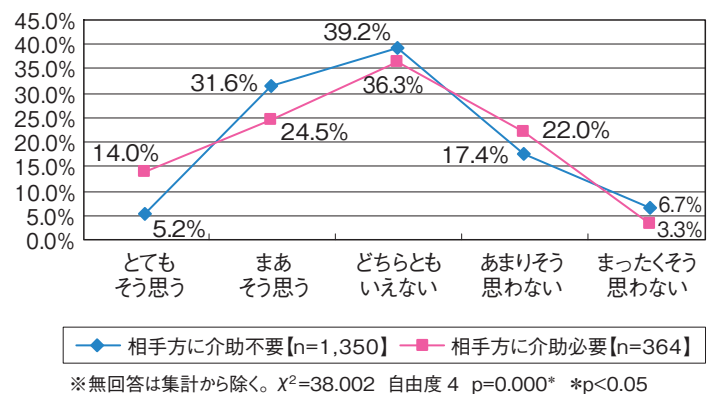


図5－43 同居者（おもに妻）「将来の生活は安心できる」



② 介護者のくらしの張り合いや生活の充実

つづいて、今の生活そのものについて、相手方に介護が必要と感じている人とそうでない人で意識が異なるかを調査結果から見ていく。

夫の「今のくらしには張り合いがある」という設問への回答結果について、妻の介護の必要性別に集計したものが図 5-44 である。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」という回答をあわせた今のくらしに張り合いがないと思っている夫は、妻に介護が不要であるとした夫が 10.8% であったのに対し、必要であるとした夫は 18.2% であった。

同様に妻の回答状況を見ると（図 5-45）、夫の介護が不要であるとした妻が 7.7%、必要であるとした妻は 25.5% であり、くらしに張り合いがないと回答する割合が 4 分の 1 を超える結果が出ている。

夫と妻のどちらも、相手方に介護が必要と考えている人のほうが、今のくらしに張り合いを感じていない傾向が見て取れる。また、妻のほうが、その傾向が強い。

図 5-46 は、妻に介護が必要とした夫とそうでない夫を分けて、「生活は充実している」という設問に対する回答を集計したものである。「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」をあわせて、生活が充実していないと思っている人の割合は、妻に介護が不要とした夫では 10.9%、必要とした夫では 16.5% と後者がやや高いことがわかる。

図5－44 世帯主（おもに夫）「今のくらしには張り合いがある」

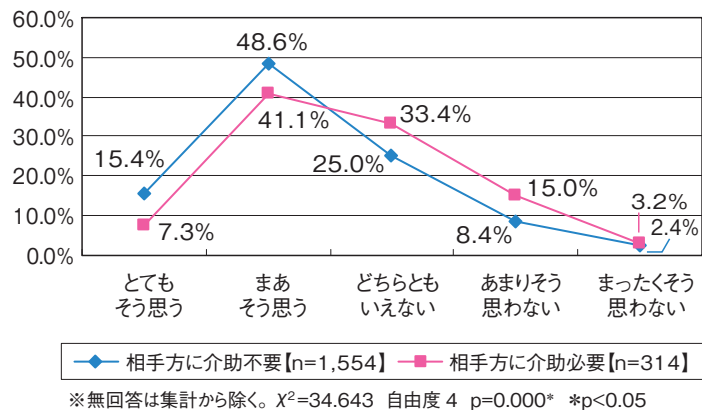


図5－45 同居者（おもに妻）「今のくらしには張り合いがある」

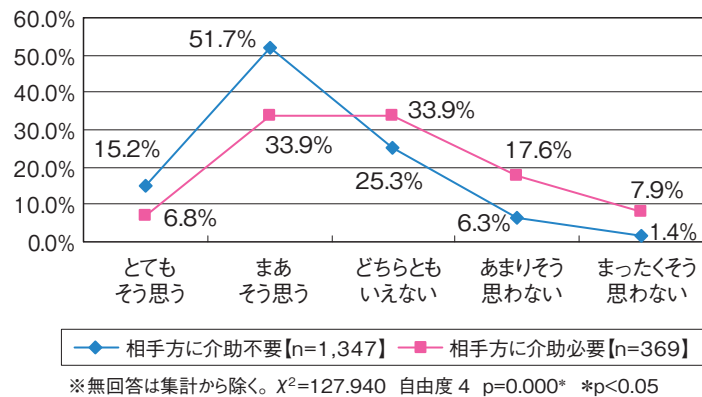
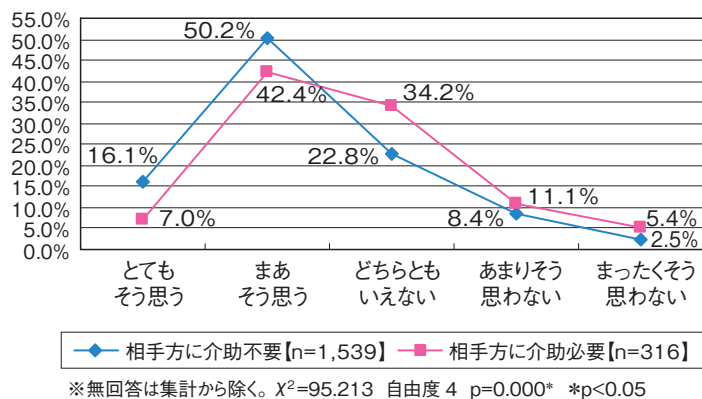


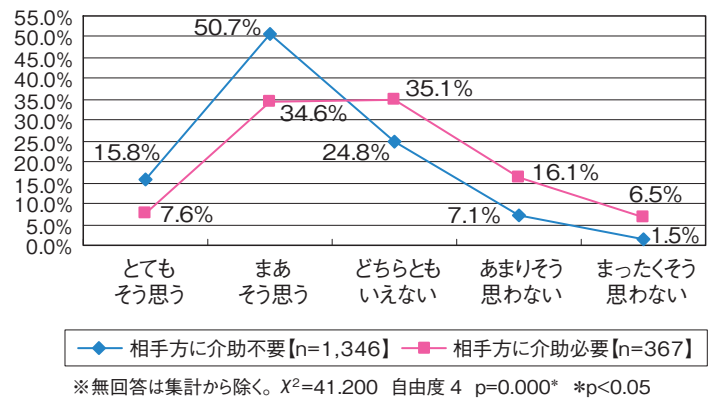
図5－46 世帯主（おもに夫）「生活は充実している」



同様に、妻の意識については（図5-47）、生活が充実していないと思っている妻は、夫に介助が不要とした人では8.6%、必要とした人は22.6%と14ポイントの大きな差があった。

介助をしている人のほうが生活は充実していないと感じる傾向にあり、夫を介助する妻の場合には、その傾向が強いことがわかった。

図5－47 同居者（おもに妻）「生活は充実している」



③同居相手が要介助である場合の意識について言えること

家事分担でも見てきたように、高齢者夫婦世帯の一方に介助が必要になれば、もう一方への負担が著しく増大することになる。同居相手には介助が必要だと考えている人は、そうでない人よりもストレスや不安を感じる傾向にあることは、家事分担をはじめとした日常生活における負担が影響を与えているためと推測される。また、同居相手に介助が必要だと考えている人は、くらしの張り合いや生活の充実感が少ない傾向にあり、要介助の同居相手の世話をしている人自身の生きがいや楽しみを探す余裕がないという状況も考えられる。また、意識の面では、妻が要介助である世帯の夫と比べて、夫が要介助である世帯の妻のほうが、ストレスや不安を感じる傾向にあることがわかった。

(4) 介助が必要な人がいる夫婦世帯の経済状況

最後に介助が必要な人がいる夫婦世帯の経済状況を見ていく。表5-15は、世帯の経済状況の感じ方と世帯の介助が必要な人の人数の関係を示した表である。世帯の経済状況について「余裕がある」と回答した夫婦世帯は、日常生活が「2人ともほとんど自分でできる」介助が必要な人がいない世帯の割合が最も高く、26.1%であった。世帯の「1人が要介助」、「2人とも要介助」はそれぞれ22.4%と15.1%であり、世帯に介助が必要な人が多いほど、経済状況に「余裕がある」と回答した割合が少ない傾向が見られる。逆に経済状況が「苦しい」と回答した割合は、「2人とも要介助」である世帯が26.4%と最も高く、「1人が要介助」が21.6%、「2人ともほとんど自分でできる」が16.9%であった。なお、年間収入では有意な差が見られなかった。

表5－15 経済状況の感じ方（3区分）×世帯の介助の必要性（3区分）

	世帯の介助の必要性（3区分）							
	2人ともほとんど自分でできる		1人が要介助		2人とも要介助		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
余裕がある	341	26.1%	89	22.4%	16	15.1%	446	24.6%
余裕はないが生活していくには困らない	747	57.1%	223	56.0%	62	58.5%	1,032	56.9%
苦しい	221	16.9%	86	21.6%	28	26.4%	335	18.5%
合計	1,309	100.0%	398	100.0%	106	100.0%	1,813	100.0%

※無回答は集計から除く。X²=13.456 自由度 4 p=0.009* *p<0.05

つづいて、表 5-16 は、家計負担の大きい科目と世帯の介助が必要な人数のクロス表である。介助との関連が考えられる「医療費・通院費」が家計に負担であると回答した割合に着目すると、日常生活が「2人ともほとんど自分でできる」介助が必要な人がいない世帯は 14.4%であったが、世帯の「1人が要介助」は 31.3%、「2人とも要介助」は 39.2%であり、世帯に介助が必要な人が多いほど、「医療費・通院費」が負担であると感じている傾向がある。

表5－16 家計負担の大きい科目×世帯の介助の必要性（3区分）

	世帯の介助の必要性（3区分）							
	2人ともほとんど自分でできる		1人が要介助		2人とも要介助		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
家賃・住宅ローンの返済	164	13.0%	47	12.3%	8	7.8%	219	12.5%
税金（固定資産税など）	474	37.5%	97	25.3%	26	25.5%	597	34.2%
ガス・電気・水道代	122	9.7%	32	8.4%	9	8.8%	163	9.3%
医療費・通院費	182	14.4%	120	31.3%	40	39.2%	342	19.6%
社会保険料	186	14.7%	46	12.0%	15	14.7%	247	14.1%
その他	135	10.7%	41	10.7%	4	3.9%	180	10.3%
合計	1,263	100.0%	383	100.0%	102	100.0%	1,748	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=88.002$ 自由度 10 $p=0.000$ * * $p<0.05$

4 ひとり暮らし高齢者社会調査との比較

ここでは、夫婦世帯とひとり暮らし高齢者の生活状況を比較していくこととする。平成23年6月、港区政策創造研究所は、研究所最初の取組みとして、「港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査（以下ひとり暮らし高齢者社会調査）」を実施した。その調査で得たひとり暮らし高齢者に関するデータと今回の調査結果の中で特に夫婦世帯のものとを比較をすることで、それぞれの生活状況の違いや特徴等を把握していく。

(1) 平均年齢

まずは平均年齢である。2人世帯調査の対象は、どちらか一方が75歳以上の世帯であり、ひとり暮らし高齢者調査は、その対象を65歳以上の高齢者としていることから、全体的に、平均年齢は2人世帯調査の方が高くなる。

それをふまえて、それぞれの平均年齢を見ると、夫婦世帯の夫は80.32歳、夫婦世帯の妻は76.23歳であった。ひとり暮らし高齢者の男性は75.36歳、ひとり暮らし高齢者の女性は77.60歳であった。以下、生活状況の違いを見ていく際に、この年齢の違いも考慮に入れておきたい。

表5－17 平均年齢

平均年齢	世帯主（おもに夫）	同居者（おもに妻）	ひとり暮らし男性	ひとり暮らし女性
	80.32 歳	76.23 歳	75.36 歳	77.60 歳
調査対象	どちらかが75歳以上のふたり暮らし世帯		65歳以上のひとり暮らし世帯	

(2) 住宅の種類

住宅の種類について、夫婦世帯とひとり暮らし世帯の違いをみたものが、表5-18である。「持ち家（一戸建て）」は、夫婦世帯が32.6%、ひとり暮らし世帯が15.8%であり、夫婦世帯のほうが16.8ポイント高く、「持ち家（分譲マンション）」の割合も、夫婦世帯が41.0%、ひとり暮らし世帯が37.0%と夫婦世帯のほうが高かった。以上の2項目の割合をあわせた持ち家率は、夫婦世帯が73.6%、ひとり暮らし世帯は52.8%となる。一方、「民間の賃貸住宅」と「都営・区営住宅」は、夫婦世帯がそれぞれ4.8%、12.7%であったのに対し、ひとり暮らし世帯は15.7%、20.5%と、先ほどの持ち家とは逆に、ひとり暮らし世帯のほうが割合は高い傾向にある。

高齢者にとって、自身の住宅が持ち家であるか否かは、家賃負担など経済的な側面からも、生活安定のための重要な要素であるといえ、住宅の種類という観点では、ひとり暮らし世帯よりも夫婦世帯のほうが安定している傾向にあることがわかる。

表5－18 住宅の種類の比較

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
持ち家（一戸建て）	659	32.6%	624	15.8%
持ち家（分譲マンション）	828	41.0%	1,460	37.0%
民間の賃貸住宅	97	4.8%	620	15.7%
都営・区営住宅	257	12.7%	811	20.5%
都市再生機構（UR）等の公的賃貸住宅	59	2.9%	172	4.4%
社宅・公務員住宅・管理人住宅	23	1.1%	35	0.9%
高齢者用住宅・シルバーピア	12	0.6%	69	1.7%
その他	77	3.8%	99	2.5%
無回答	9	0.4%	57	1.4%
合計	2,021	100.0%	3,947	100.0%

(3) 生存子の有無

一緒に住んでいない生存子の有無について集計したものが表 5-19 である。夫婦世帯では、「生存子がいる」世帯の割合が 78.3%、「生存子はいない」世帯の割合が 17.9%で、約 8 割が別居の子どもがいると回答している。一方、ひとり暮らし世帯では、「生存子がいる」人が 52.1%と約半分にどまり、「生存子はいない」と回答した人が 42.8%であった。

表5－19 生存子の有無比較

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
生存子がいる	1,583	78.3%	2,055	52.1%
生存子はいない	361	17.9%	1,689	42.8%
無回答	77	3.8%	203	5.1%
合計	2,021	100.0%	3,947	100.0%

(4) 最も行き来する家族・親族

最も行き来する家族・親族については、夫婦世帯、ひとり暮らし世帯ともに「子ども（その配偶者、孫などを含む）」が最も多かったが、夫婦世帯は 71.6%、ひとり暮らし世帯は 42.5%と 29.1 ポイントの大きな差がみられた。「兄弟・姉妹」という回答した割合は、夫婦世帯には 10.1%と 1 割程度しかなかったのに対し、ひとり暮らし世帯では 25.9%と 4 分の 1 を上回っている。また「誰ともほとんど行き来がない」という回答についても、夫婦世帯は 7.1%であったが、ひとり暮らし世帯は 12.9%と、ひとり暮らし世帯の方にやや高い傾向がみられた。

表5－20 最も行き来する家族・親族比較

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫などを含む）	1,448	71.6%	1,678	42.5%
親	8	0.4%	25	0.6%
兄弟・姉妹	205	10.1%	1,021	25.9%
親戚	89	4.4%	305	7.7%
その他	40	2.0%	202	5.1%
誰ともほとんど行き来がない	143	7.1%	511	12.9%
無回答	88	4.4%	205	5.2%
合計	2,021	100.0%	3,947	100.0%

表 5-19 で見たように、ひとり暮らし世帯よりも夫婦世帯のほうが子どもがいる割合が高い。それが行き来する家族・親族の回答にも表れている。ひとり暮らし世帯は「子ども」という回答が少ない分、「兄弟・姉妹」の割合が高くなっていると推測される。

(5) 緊急時の支援者

急病など緊急の際に駆けつけてくれる人＝緊急時の支援者の有無について（表 5-21）、「いる」と回答した割合は、夫婦世帯が 84.1%、ひとり暮らしが 79.9%とやや夫婦世帯のほうが高い。一方、「いない」と回答している人の割合は、夫婦世帯が 13.1%、ひとり暮らし世帯が 16.7%と若干の違いはあったが、大きな差はみられなかった。

表5－21 緊急時の支援者の有無比較

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
緊急時の支援者がある	1,699	84.1%	3,152	79.9%
緊急時の支援者はいない	265	13.1%	658	16.7%
無回答	57	2.8%	137	3.5%
合計	2,021	100.0%	3,947	100.0%

緊急時の支援者の種類（複数回答）については、上記緊急時支援者の有無と異なり、夫婦世帯とひとり暮らし世帯との間に違いがみられた。夫婦世帯では「子ども」が 80.5%と 8 割を占め、ほかの選択肢は 1 割にも満たなかった。一方、ひとり暮らし世帯では、最も多かったものが「子ども」である

点は夫婦世帯と変わらないものの、その割合は50.1%と低かった。そのほか、「兄弟・姉妹」が21.1%、「友人・知人」とした人が11.1%と1割以上を占めていた。

表5－22 緊急時の支援者の種類比較（複数回答）

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
子ども（子どもの配偶者、孫を含む）	1,367	80.5%	1,579	50.1%
兄弟・姉妹	103	6.1%	665	21.1%
親戚	64	3.8%	236	7.5%
近所の人	43	2.5%	114	3.6%
友人・知人	34	2.0%	349	11.1%
ケアマネジャーやヘルパーなど介護事業者	58	3.4%	91	2.9%
その他	29	1.7%	113	3.6%
無回答	1	0.1%	5	0.2%
合計	1,699	100.0%	3,152	100.0%

(6) 同居者以外に困りごとを手伝ってもらう人

同居者以外に日常生活における困りごとを手伝ってもらう人について、夫婦世帯の夫と妻、そしてひとり暮らしの男女の4つに分けて、違いを見ていく（表5-23）。大きく違っているのは「別居の子ども（子どもの配偶者、孫など含む）」の回答割合で、夫婦世帯の夫と妻がそれぞれ59.3%、62.3%と6割前後であるのに対し、ひとり暮らし男性は28.6%で3割弱、ひとり暮らし女性は42.5%で4割強であった。反対に、ひとり暮らし世帯では、「別居の兄弟・姉妹」（男性:15.4%、女性:21.0%）や「友人・知人」（男性:22.6%、女性:25.1%）の割合が高かった。また、ひとり暮らし女性は、「近所の人」と回答した人の割合が12.4%で、他よりも高かった。

「同居者以外では手伝ってもらう人がいない」人については、夫婦世帯の夫とひとり暮らし男性の割合が高く、それぞれ21.5%、21.2%であった。

日常生活の中での困りごとがあったとき、夫婦世帯では主に子どもに手伝ってもらうことが多い傾向にあり、ひとり暮らしの人は子ども以外にも兄弟・姉妹や友人・知人、近所の人など様々な関係の人の助けを得ている傾向にあることがわかる。

表5－23 同居者以外に困りごとを手伝ってもらう人（複数回答）比較

	世帯主 （おもに夫）		同居者 （おもに妻）		ひとり暮らし 男性		ひとり暮らし 女性	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
別居の子ども （子どもの配偶者、孫など含む）	1,103	59.3%	1,172	62.3%	204	28.6%	1,264	42.5%
別居の兄弟・姉妹	97	5.2%	162	8.6%	110	15.4%	625	21.0%
別居の親戚	80	4.3%	58	3.1%	43	6.0%	328	11.0%
友人・知人	98	5.3%	146	7.8%	161	22.6%	746	25.1%
近所の人	88	4.7%	110	5.8%	42	5.9%	369	12.4%
民生委員	14	0.8%	11	0.6%	20	2.8%	65	2.2%
町会・自治会の人	55	3.0%	39	2.1%	17	2.4%	63	2.1%
マンションの管理人	109	5.9%	95	5.0%	35	4.9%	263	8.8%
ホームヘルパー	86	4.6%	100	5.3%	60	8.4%	287	9.7%
ケアマネジャー	114	6.1%	91	4.8%	28	3.9%	136	4.6%
高齢者相談センター （地域包括支援センター）の人	40	2.1%	46	2.4%	26	3.6%	131	4.4%
役所の人	23	1.2%	12	0.6%	19	2.7%	33	1.1%
その他	119	6.4%	137	7.3%	76	10.7%	244	8.2%
同居者以外では手伝ってもらう人がいない（夫婦世帯） ／誰も手伝ってくれる人がいない（ひとり暮らし）	401	21.5%	308	16.4%	151	21.2%	277	9.3%
合計	1,861	100.0%	1,882	100.0%	713	100.0%	2,974	100.0%

(7) 正月三が日を過ごした相手

正月三が日を過ごした相手について(表5-24)、夫婦世帯、ひとり暮らし世帯ともに最も多かったのは「別居の子ども(子どもの配偶者、孫を含む)」であったが、夫婦世帯が49.0%と半分近いのに対し、ひとり暮らし世帯は37.4%と11.6ポイントの差があった。ひとり暮らし世帯は夫婦世帯に比べ、「別居の兄弟・姉妹」と「友人・知人」がそれぞれ15.9%と14.9%で1割を超えており、夫婦世帯(それぞれ5.2%、2.5%)と比べて高い傾向にある。「同居者と2人で過ごした(夫婦世帯)/ひとりで過ごした(ひとり暮らし)」については、夫婦世帯が36.7%、ひとり暮らし世帯が33.4%であり、どちらも3割強を超えている。

正月三が日を過ごした相手も緊急時支援者や困りごとを手伝ってもらう人と同様、夫婦世帯は「子ども」という回答が非常に多く、ひとり暮らし世帯は夫婦世帯よりもやや回答が分散する傾向にある。

表5-24 正月三が日を過ごした相手比較

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
別居の子ども(子どもの配偶者、孫を含む)	1,177	49.0%	1,434	37.4%
別居の親	15	0.6%	40	1.0%
別居の兄弟・姉妹	125	5.2%	610	15.9%
別居の親戚	73	3.0%	243	6.3%
近所の人	22	0.9%	68	1.8%
友人・知人	60	2.5%	571	14.9%
その他	48	2.0%	214	5.6%
同居者と2人で過ごした(夫婦世帯)/ひとりで過ごした(ひとり暮らし)	882	36.7%	1,283	33.4%
合計	2,402	100.0%	3,838	100.0%

(8) 近所づきあい

近所づきあいの程度について、夫婦世帯の夫と妻、ひとり暮らしの男性と女性の4つを比較する(表5-25)。「よく行き来する」と「ときどき行き来する」をあわせて、比較的親密に近所づきあいをしている人の割合は、ひとり暮らし女性が29.8%と最も高く、次いで夫婦世帯の妻が20.1%であった。また、ひとり暮らし男性が13.1%、夫婦世帯の夫が12.7%で、ほぼ同程度の割合を示した。近所とは「まったくつきあいがいい」と回答した人の割合は、ひとり暮らし男性が12.4%で最も高く、次いで夫婦世帯の夫が9.2%であった。ほか、夫婦世帯の妻は5.4%、ひとり暮らし女性は5.1%でほぼ同じくらいの割合であった。

夫婦世帯の妻とひとり暮らし女性は、近所づきあいが比較的親密な傾向にある。一方、夫婦世帯の夫とひとり暮らし男性は、近所づきあいが比較的疎遠な傾向にあることがわかる。このことは、程度の差は多少あるものの、夫婦世帯であるかひとり暮らしであるかにかかわらず、女性は近所づきあいが親密な傾向にあり、男性は疎遠な傾向にあると言い換えることができるだろう。

表5-25 近所づきあいの程度比較

	世帯主 (おもに夫)		同居者 (おもに妻)		ひとり暮らし 男性		ひとり暮らし 女性	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	65	3.2%	119	5.9%	34	4.5%	299	9.6%
ときどき行き来するくらい	192	9.5%	287	14.2%	65	8.6%	628	20.2%
会ったときに世間話をするくらい	541	26.8%	808	40.0%	181	23.9%	1,051	33.7%
あいさつをかわすくらい	954	47.2%	623	30.8%	344	45.4%	865	27.8%
まったくつきあいがいい	185	9.2%	109	5.4%	94	12.4%	159	5.1%
無回答	84	4.2%	75	3.7%	40	5.3%	114	3.7%
合計	2,021	100.0%	2,021	100.0%	758	100.0%	3,116	100.0%

(9) 親しい友人・知人

親しい友人・知人の有無について見てみよう（表 5-26）。親しい友人が「いる」と回答した人の割合が最も高いのはひとり暮らし女性であり、83.8%であった。次いで、夫婦世帯の妻が79.3%であった。夫婦世帯の夫は、親しい友人が「いる」と回答した人の割合が68.7%で、ひとり暮らし男性の66.9%とほぼ同程度であった。これらのことから、近所づきあいと同様に、夫婦世帯かひとり暮らし世帯かにかかわらず、男性は、親しい友人がいる人の割合が、女性よりも低い傾向にあることがわかる。

表5－26 親しい友人・知人の有無比較

	世帯主 (おもに夫)		同居者 (おもに妻)		ひとり暮らし 男性		ひとり暮らし 女性	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
親しい友人・知人がいる	1,389	68.7%	1,603	79.3%	507	66.9%	2,611	83.8%
親しい友人・知人はいない	572	28.3%	346	17.1%	214	28.2%	406	13.0%
無回答	60	3.0%	72	3.6%	37	4.9%	99	3.2%
合計	2,021	100.0%	2,021	100.0%	758	100.0%	3,116	100.0%

親しい友人・知人の種類については（表 5-27）、夫婦世帯の夫と妻、ひとり暮らし男性および女性のいずれも「近所の人」の割合が最も高く、それぞれ33.5%、40.0%、34.5%、40.0%であった。また、夫婦世帯とひとり暮らし世帯に共通して、次に高い割合を示したのは「趣味やスポーツを通じて知り合った人」であり、夫婦世帯の夫が20.1%、妻が25.5%、ひとり暮らし男性が20.5%、ひとり暮らし女性が21.8%であった。

「学校時代に知り合った人」については、夫婦世帯とひとり暮らし世帯で違いが見られた。夫婦世帯の夫は20.4%、妻は18.8%でともに2割前後であったのに対して、ひとり暮らし男性は13.4%、ひとり暮らし女性は13.0%でやや低い値であった。

「もとの(今の)職場の人」については、夫婦世帯の夫は17.2%、ひとり暮らし男性は19.5%と、比較的高い割合を示し、次にひとり暮らし女性が13.6%で1割強であった。夫婦世帯の妻は7.0%で、1割に満たず、低い割合であった。

表5－27 親しい友人・知人の種類比較

	世帯主 (おもに夫)		同居者 (おもに妻)		ひとり暮らし 男性		ひとり暮らし 女性	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
近所の人	465	33.5%	641	40.0%	175	34.5%	1,044	40.0%
学校時代に知り合った人	283	20.4%	301	18.8%	68	13.4%	340	13.0%
もとの(今の)職場の人	239	17.2%	112	7.0%	99	19.5%	356	13.6%
趣味やスポーツを通じて知り合った人	279	20.1%	408	25.5%	104	20.5%	569	21.8%
その他	111	8.0%	133	8.3%	54	10.7%	279	10.7%
無回答	12	0.9%	8	0.5%	7	1.4%	23	0.9%
合計	1,389	100.0%	1,603	100.0%	507	100.0%	2,611	100.0%

(10) 社会活動

参加している社会活動について見ていく(表 5-28、複数回答)。「町会・自治会」活動については、夫婦世帯では、夫の 23.4%、妻の 18.6%が参加している団体として挙げているが、ひとり暮らし世帯の場合、男性の 11.1%、女性の 10.2%で参加している人の割合が1割と低くなっている。「趣味の会(囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など)」については、夫婦世帯の妻(20.3%)とひとり暮らし女性(20.4%)が同じくらいの割合で参加していると回答していた。男性は、世帯主の夫が 14.6%、ひとり暮らし男性が 11.1%で女性に比べて低く、とくにひとり暮らし男性の割合が低かった。これは、「健康づくりの活動(スポーツ・体操教室など)」についても同様の傾向が見られる。

社会活動に「参加していない」人の割合については、夫婦世帯の夫が 48.0%、妻が 45.4%、ひとり暮らし女性が 43.3%で、4割台を占めていたが、ひとり暮らし男性の場合には 61.4%と6割にものぼり、参加していない人が多いことがうかがえる。

表5-28 参加している社会活動(複数回答)比較

	世帯主(おもに夫)		同居者(おもに妻)		ひとり暮らし男性		ひとり暮らし女性	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
町会・自治会	460	23.4%	355	18.6%	76	11.1%	286	10.2%
防犯・防災活動	139	7.1%	66	3.5%	-	-	-	-
学習の会	50	2.5%	85	4.4%	19	2.8%	159	5.7%
趣味の会(囲碁・将棋・俳句・カラオケ・お花・盆栽・お茶など)	287	14.6%	387	20.3%	76	11.1%	571	20.4%
社会活動(同窓会・PTAなどの子育ての頃の団体・生協活動など)	108	5.5%	94	4.9%	20	2.9%	116	4.1%
健康づくりの活動(スポーツ・体操教室など)	258	13.1%	429	22.4%	71	10.4%	628	22.4%
介護予防事業(健康トレーニング・筋力向上トレーニングなど)	103	5.2%	147	7.7%	33	4.8%	275	9.8%
老人クラブ	67	3.4%	67	3.5%	21	3.1%	169	6.0%
ボランティア活動	93	4.7%	114	6.0%	20	2.9%	166	5.9%
その他	96	4.9%	70	3.7%	47	6.9%	264	9.4%
参加していない	944	48.0%	868	45.4%	419	61.4%	1,213	43.3%
合計	1,965	100.0%	1,911	100.0%	682	100.0%	2,801	100.0%

※「防犯・防災活動」はひとり暮らし高齢者社会調査では、選択肢として設けていない。

(11) 経済状況の感じ方

経済状況の感じ方については、夫婦世帯とひとり暮らし世帯に大きな差は見られなかった。どちらも最も多かった回答は「余裕はないが生活していくには困らない」であり、夫婦世帯が 54.9%、ひとり暮らし世帯が 51.4%と約半数を占めている

表5-29 経済状況の感じ方

	夫婦世帯		ひとり暮らし	
	実数	%	実数	%
かなり余裕がある	105	5.2%	146	3.7%
やや余裕がある	380	18.8%	641	16.2%
余裕はないが生活していくには困らない	1,109	54.9%	2,029	51.4%
やや苦しい	264	13.1%	567	14.4%
かなり苦しい	93	4.6%	294	7.4%
無回答	70	3.5%	270	6.8%
合計	2,021	100.0%	3,947	100.0%

5 夫婦世帯の生活状況の分類－因子分析とクラスタ分析

夫婦世帯の生活状況をさらに詳細に分析していくため、多変量解析による分析を行い、世帯の特徴から6つのグループに分けた。

(1) 夫婦世帯の生活状況－因子分析・因子得点

夫婦世帯について、その生活状況を分析していくために、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転を採用）を行った。因子分析に用いた変数は、世帯主と同居者のものを合わせて20の項目である（表5-30）。これらは、夫婦世帯の生活状況を、経済面、人間関係、不安やストレスといった心理面からとらえるものと考え、採用した。

その結果を見てみよう。表5-31は夫婦世帯の因子分析のパターン行列を、表5-32は夫婦世帯の因子分析の構造行列を示している。この分析により、5つの因子を抽出することができた。変数の構成から、第1因子を「妻（同居者）の生活の充実」、第2因子を「夫（世帯主）の生活の充実」、第3因子を「世帯の不安・ストレスの少なさ」、第4因子を「世帯の近所づきあいへの満足感」、第5因子を「世帯の経済状況への満足感」と解釈した。

表5－30 夫婦世帯の因子分析に用いた項目

	質問項目	
1	【世帯主】今の暮らしには張り合いがある	世帯主 問 33(1)
2	【世帯主】今の暮らしにはストレスが多い	世帯主 問 33(2)
3	【世帯主】生活は充実している	世帯主 問 33(3)
4	【世帯主】生活していて不安や心配がある	世帯主 問 33(4)
5	【世帯主】友人との関係に満足している	世帯主 問 33(6)
6	【世帯主】近所づきあいに満足している	世帯主 問 33(7)
7	【世帯主】自分は頼りにされていると思う	世帯主 問 33(8)
8	【世帯主】将来の生活は安心できる	世帯主 問 33(10)
9	【同居者】今の暮らしには張り合いがある	同居者 問 21(1)
10	【同居者】今の暮らしにはストレスが多い	同居者 問 21(2)
11	【同居者】生活は充実している	同居者 問 21(3)
12	【同居者】生活していて不安や心配がある	同居者 問 21(4)
13	【同居者】友人との関係に満足している	同居者 問 21(6)
14	【同居者】近所づきあいに満足している	同居者 問 21(7)
15	【同居者】自分は頼りにされていると思う	同居者 問 21(8)
16	【同居者】将来の生活は安心できる	同居者 問 21(10)
17	【世帯主】近所づきあいの程度	世帯主 問 23
18	【同居者】近所づきあいの程度	同居者 問 13
19	年間収入	問 34
20	経済状況の感じ方	問 37

表5－31 夫婦世帯の因子分析（パターン行列）

	因子				
	1	2	3	4	5
【同居者】今の暮らしには張り合いがある	0.807				
【同居者】生活は充実している	0.783				
【同居者】友人との関係に満足している	0.575				
【同居者】自分は頼りにされていると思う	0.559				
【世帯主】今の暮らしには張り合いがある		0.879			
【世帯主】生活は充実している		0.748			
【世帯主】友人との関係に満足している		0.558			
【世帯主】自分は頼りにされていると思う		0.445			
【世帯主】今の暮らしにはストレスが多い			0.742		
【世帯主】生活していて不安や心配がある			0.719		
【同居者】今の暮らしにはストレスが多い			0.597		
【同居者】生活していて不安や心配がある			0.568		
【同居者】近所づきあいの程度				-0.634	
【世帯主】近所づきあいに満足している		0.349		0.583	
【同居者】近所づきあいに満足している	0.367			0.572	
【世帯主】近所づきあいの程度				-0.571	
経済状況の感じ方					-0.749
年間収入					0.667
【世帯主】将来の生活は安心できる					0.524
【同居者】将来の生活は安心できる	0.367				0.433

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 0.3 以下は非表示

表5－32 夫婦世帯の因子分析（構造行列）

	因子				
	1	2	3	4	5
【同居者】今の暮らしには張り合いがある	0.841	0.421	0.438	0.382	0.345
【同居者】生活は充実している	0.829	0.428	0.450		0.410
【同居者】友人との関係に満足している	0.591				
【同居者】自分は頼りにされていると思う	0.547				
【世帯主】今の暮らしには張り合いがある	0.406	0.869	0.417	0.365	0.392
【世帯主】生活は充実している	0.427	0.819	0.470		0.468
【世帯主】友人との関係に満足している		0.603			
【世帯主】自分は頼りにされていると思う		0.542			0.388
【世帯主】生活していて不安や心配がある			0.716	0.348	0.456
【世帯主】今の暮らしにはストレスが多い			0.655		
【同居者】生活していて不安や心配がある	0.376		0.620		
【同居者】今の暮らしにはストレスが多い	0.320		0.564		
【同居者】近所づきあいに満足している	0.501	0.495		0.667	0.348
【世帯主】近所づきあいに満足している				0.658	
【同居者】近所づきあいの程度				-0.624	
【世帯主】近所づきあいの程度				-0.579	
経済状況の感じ方		-0.316	-0.390		-0.743
【世帯主】将来の生活は安心できる		0.485	0.537		0.691
年間収入		0.312			0.606
【同居者】将来の生活は安心できる	0.558		0.518		0.590

因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 0.3 以下は非表示

この因子分析の結果を得点化し、その得点の平均値をいくつかの条件別に集計して比較した。

まずは、夫の仕事の有無による違いを見たい。表 5-33 は、夫の仕事の有無別に、各因子得点の平均値を集計したものである。夫が仕事をしているグループでは、第 4 因子「近所づきあいの充実」については、平均値が -0.034 で、仕事をしていないグループの平均値 0.011 に比べて低い値であるが、それ以外の因子得点の平均値は、いずれも仕事をしていないグループよりも高い。夫が仕事をしていることにより、夫自身の生活の充実感が高いことと併せて、妻の生活の充実感も高いことがわかった。

表5－33 夫（おもに世帯主）の仕事の有無別 各因子得点の平均値

	仕事をしている	仕事はしていない
第 1 因子 妻の生活の充実感	0.152	-0.075
第 2 因子 夫の生活の充実感	0.325	-0.162
第 3 因子 不安・ストレス	0.012	-0.015
第 4 因子 近所づきあいの充実	-0.034	0.011
第 5 因子 経済状況への安心感	0.306	-0.148

次に、世帯の介助の必要性ごとに、各因子得点の平均値を集計した（表 5-34）。「2 人ともほとんど自分でできる」世帯の場合には、すべての因子得点の平均値が高い。反対に、世帯内のだれかが要介助の状態である場合には、因子得点の平均値は低くなる。夫のみが要介助の場合、第 2 因子「夫の生活の充実感」の得点にくわえて、第 5 因子「経済状況への安心感」の得点が低くなることが特徴である。妻のみが要介助のグループでは、第 1 因子「妻の生活の充実感」にくわえて、第 4 因子「近所づきあいの充実」の得点が低くなることが特徴である。

夫だけが要介助の世帯では、夫自身が生活の充実感に乏しくなり、また、経済状況への安心感が少なくなることがわかる。また、妻だけが要介助の世帯では、妻自身の生活の充実感が少なくなり、近所づきあいの充実度合いが低くなることがわかる。

表5－34 夫婦世帯の介助の必要性別 各因子得点の平均値

	2人ともほとんど自分でできる	夫（世帯主）のみ要介助	妻（同居者）のみ要介助	2人とも要介助
第1因子 妻の生活の充実感	0.196	-0.271	-0.865	-0.705
第2因子 夫の生活の充実感	0.180	-0.829	-0.115	-0.700
第3因子 不安・ストレス	0.147	-0.448	-0.313	-0.732
第4因子 近所づきあいの充実	0.048	-0.108	-0.269	0.077
第5因子 経済状況への安心感	0.089	-0.367	-0.143	-0.411

表5-35は、住宅の種類別に各因子得点の平均値を集計したものである。「持ち家」のグループは、第4因子「近所づきあいの充実」を除いた4つの因子得点の平均値が高かった。「民間賃貸・公的賃貸（UR等）住宅」は、すべての因子得点の平均値が低く、そのうち第1因子「妻の生活の充実感」が-0.369、第3因子「不安・ストレス」が-0.235、第4因子「近所づきあいの充実」の値が-0.302で、4つの住宅の種類の中で最も低い値であった。「都営・区営住宅」は、第4因子「近所づきあいの充実」の平均値がもっとも高く0.218であったほかは、全体的に値が低い。とくに第2因子「夫の生活の充実感」の得点が-0.481、第5因子「経済状況への安心感」の得点が-0.670で、4つの住宅の種類の中で最も低い値を示した。

これらの数値から、持ち家に住む世帯は、全体的に安定していること、民間賃貸や公的賃貸住宅に住む世帯は、妻の生活の充実感が低く、不安やストレスを感じやすく、近所づきあいの充実度合いが低いこと、都営・区営住宅は、夫の生活の充実感が低く、経済状況への安心感に乏しいということがわかった。

表5－35 夫婦世帯の介助の必要性別 各因子得点の平均値

	持ち家	民間賃貸・公的賃貸（UR等）住宅	都営・区営住宅	その他
第1因子 妻の生活の充実感	0.060	-0.369	-0.207	0.088
第2因子 夫の生活の充実感	0.080	-0.067	-0.481	0.009
第3因子 不安・ストレス	0.036	-0.235	-0.151	0.096
第4因子 近所づきあいの充実	-0.009	-0.302	0.218	0.005
第5因子 経済状況への安心感	0.141	-0.460	-0.670	0.152

(2) 夫婦世帯の生活状況の分類－クラスタ分析

次に、(1)で得られた因子得点を用いて、非階層的クラスタ分析（K-means法）によって、夫婦世帯の生活状況の分類を行った（有効ケース数1,225ケース）。それにより、6つのクラスタに分類した。クラスタごとにケース数と因子得点の平均値を集計したものが表5-36、それをグラフで示したものが図5-48である。

表5－36 【夫婦世帯】各クラスタのケース数・割合と因子得点の平均値

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	クラスタ4	クラスタ5	クラスタ6
ケース数	224	107	237	292	193	172
%	18.3%	8.7%	19.3%	23.8%	15.8%	14.0%
第1因子 妻の生活の充実感	-0.171	-1.547	0.462	0.183	-0.717	1.042
第2因子 夫の生活の充実感	-0.711	-1.519	0.295	0.373	-0.239	1.101
第3因子 不安・ストレス	-0.710	-1.133	0.724	-0.143	-0.161	1.056
第4因子 近所づきあいの充実	0.198	-0.712	-0.506	0.711	-0.926	0.715
第5因子 経済状況への安心感	-0.782	-1.330	0.615	-0.009	0.033	0.977

クラスタ1（224 ケース、18.3%）は、「妻の生活の充実感」の因子得点の平均値が-0.171 で、6 つのクラスタ中3番目に低く、「夫の生活の充実感」は-0.711 で2番目に低い。また、「不安・ストレス」は-0.710、「経済状況への安心感」は-0.782 で、どちらも2番目に低い。「近所づきあいの充実感」については、0.198 で、やや高い。妻の生活への充実感と、近所づきあいの充実度が、やや高めであるほかは、全体的に不安定な傾向を示しているグループである。

クラスタ2（107 ケース、8.7%）は、「近所づきあいの充実」の平均値以外は、すべてにおいて最も低い値を示し、近所づきあいの充実についても、-0.712 で、6 クラスタ中2番目の低さである。夫婦ともに生活への充実感に乏しく、経済状況をはじめ生活全般において不安定なグループである。

クラスタ3（237 ケース、19.3%）は、「近所づきあいの充実」が-0.506 で低いほかは、平均値が高く、安定している。夫婦ともに生活への充実感があり、経済状況への安心感が高いものの、近所づきあいの充実度合いが低いグループである。

クラスタ4（292 ケース、23.8%）は、「近所づきあいの充実」が0.711 で2番目に高いほかは、4つの因子の得点の平均値が、6 クラスタ中2番目か3番目に高い数値を示している。全体に、生活は中庸ながら安定傾向にあり、なかでも近所づきあいが充実しているグループである。

クラスタ5（193 ケース、15.8%）は、「妻の生活の充実感」が-0.717 で2番目に低く、「近所づきあいの充実」は-0.926 で最も低い値を示した。その一方で、「夫の生活の充実感」は-0.239 で「妻の生活の充実感」よりはやや高く、「経済状況への安心感」は0.033 で3番目に高い数値であった。近所づきあいへの充実感に乏しい一方で、夫の生活の充実感がやや高く、経済状況への安心感が普通程度のグループである。

クラスタ6（172 ケース、14.0%）は、すべての因子得点の平均値が6 クラスタ中最も高い。夫婦ともに生活が充実し、安定しているグループである。

これら6つのクラスタを、その特徴ごとに大きく4つに分類しなおし、表にまとめた（表5-37）。また、各クラスタの特徴をそれぞれレーダーグラフで示したものが図5-49である。

図5-48 【夫婦世帯】各クラスタの因子得点の平均値（グラフ）

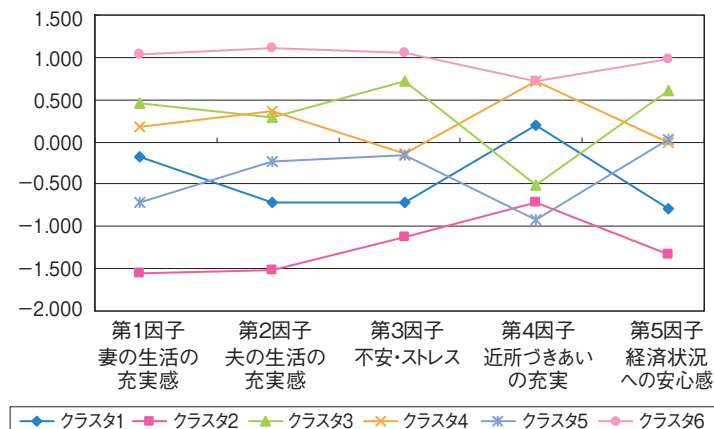
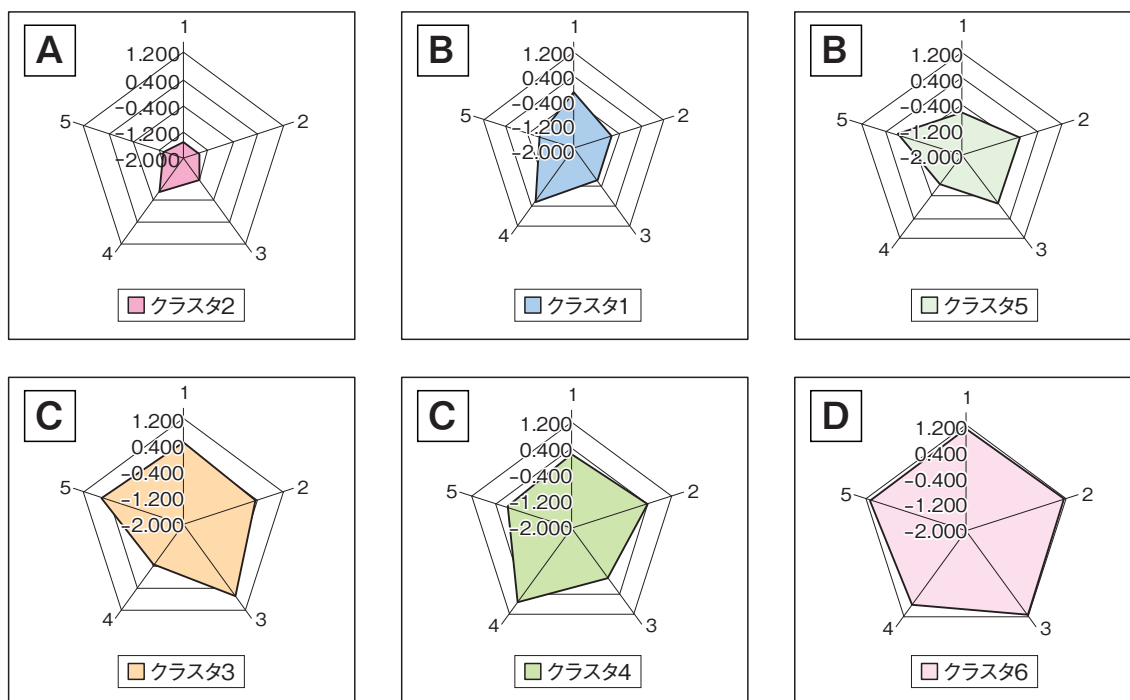


表5－37 クラスタの特徴とグループ分け

A 生活困難グループ	クラスタ2	全般にわたり充実感や安心感に乏しく、不安やストレスが強い
B 低め安定グループ	クラスタ1	夫の生活の充実感、経済状況への安心感が低く、不安ストレスがある
	クラスタ5	妻の生活の充実感、近所づきあいの充実感が低い、ほかはやや安定
C 高め安定グループ	クラスタ3	不安がなく、経済的に安定しているが近所づきあいの充実度が低い
	クラスタ4	やや不安があるものの、近所づきあいは充実し、経済状況は中庸
D 生活安定グループ	クラスタ6	全般にわたり充実感があり、不安やストレスが少なく安定している

図5－49 各クラスタの特徴とグループ（レーダーグラフ）



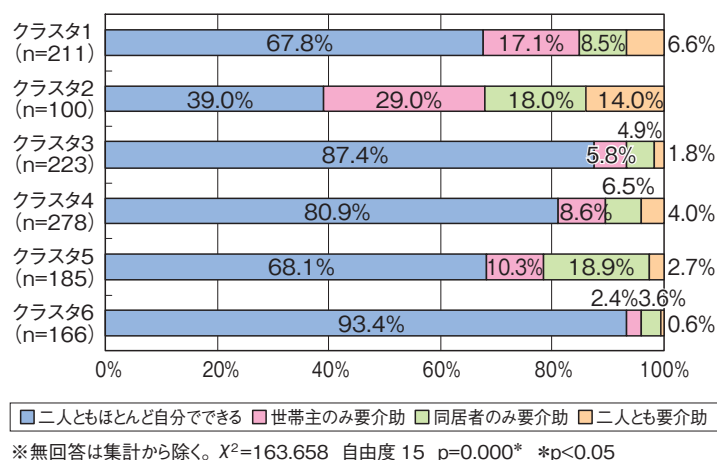
1	第1因子	妻の生活の充実感	4	第4因子	近所づきあいの充実
2	第2因子	夫の生活の充実感	5	第5因子	経済状況への安心感
3	第3因子	不安・ストレス			

これらのクラスタごとの特徴を、クロス集計により見ていく。

まずは、世帯内の介助の状況である。図5-50は、クラスタごとに、世帯の介助の必要性を集計したものである。A生活困難グループであるクラスタ2は、「2人ともほとんど自分でできる」世帯の割合が39.0%で6クラスタ中最も低く、ひとりまたは2人とも介助を必要としている世帯の割合が6割を占めている。B低め安定グループであるクラスタ1とクラスタ5は、「2

人ともほとんど自分でできる」人の割合がそれぞれ67.8%、68.1%と7割弱を占め、ひとりまたは2人とも介助を必要としている世帯の割合は3割程度である。クラスタ1は、「世帯主（おもに夫）のみ要介助」の世帯が17.1%で、「同居者（おもに妻）のみ要介助」の8.5%よりも高いことが特徴である。ク

図5－50 【夫婦世帯】各クラスタ別 世帯の介助の状況



ラスト5は、反対に、「同居者（おもに妻）のみ要介助」の世帯が18.9%で、「世帯主（おもに夫）のみ要介助」（10.3%）よりも高い。クラスタ1は、夫の生活の充実感を示す因子得点の平均値が低く、クラスタ5は、妻の生活の充実感の因子得点の平均値が低い。介助を必要とする人の生活への充実感は低くなることがわかっており、その影響を受けていると考えられる。

C高め安定グループであるクラスタ3とクラスタ4は、「2人ともほとんど自分でできる」世帯の割合がそれぞれ87.4%、80.9%と高く、介助を必要とする人がいる世帯の割合が2割から1割強である。

D生活安定グループであるクラスタ6は、93.4%が「2人ともほとんど自分でできる」世帯であり、要介助の人がいる世帯はわずかであった。

これらのことから、世帯内に介助を必要とする人がいるかどうかによって、生活の安定感に影響があることがわかる。

次に、緊急時の支援者の有無をクラスタ別に集計した（表5-38）。緊急時の支援者が「いない」世帯の割合が最も高いのは、クラスタ2で21.7%、次いでクラスタ5では20.4%であった。最も低いのはクラスタ6で7.1%であった。

表5-38 【夫婦世帯】クラスタ別 緊急時の支援者の有無

	クラスタ1		クラスタ2		クラスタ3		クラスタ4		クラスタ5		クラスタ6	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
支援者がいる	190	85.6%	83	78.3%	208	88.5%	261	90.3%	152	79.6%	158	92.9%
支援者はいない	32	14.4%	23	21.7%	27	11.5%	28	9.7%	39	20.4%	12	7.1%
合計	222	100.0%	106	100.0%	235	100.0%	289	100.0%	191	100.0%	170	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=24.838$ 自由度5 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

緊急時の支援者として最も頼りにされるのは子どもであるが、別居している子どもの有無をクラスタ別に集計した（表5-39）。別居の子どもが「いない」と回答した世帯の割合が最も高かったのは、クラスタ5で26.7%を占め、次いでクラスタ2が22.6%、クラスタ1が21.1%であった。最も低かったのはクラスタ6で10.1%である。

表5-39 【夫婦世帯】クラスタ別 別居の子どもの有無

	クラスタ1		クラスタ2		クラスタ3		クラスタ4		クラスタ5		クラスタ6	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
別居の子どもがいる	172	78.9%	82	77.4%	193	82.1%	240	83.9%	137	73.3%	152	89.9%
別居の子どもはいない	46	21.1%	24	22.6%	42	17.9%	46	16.1%	50	26.7%	17	10.1%
合計	218	100.0%	106	100.0%	235	100.0%	286	100.0%	187	100.0%	169	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=19.521$ 自由度5 $p=0.002^*$ * $p<0.05$

以上のことから、クラスタ2とクラスタ5は、緊急時の支援者としてもっとも頼りにされている子どもがいない人の割合が高く、それが緊急時の支援者がいない世帯の割合の高さにつながっているのではないかと考えられる。

次に、住宅の種類をクラスタ別に集計した（表5-40）。「持ち家」は一戸建てと分譲マンションを合わせたものであるが、最も持ち家率が高かったのはクラスタ6で、83.5%を占めた。クラスタ3（82.2%）とクラスタ5（82.4%）も同程度に高い割合を示している。これら3つのクラスタは、第5因子「経済状況への安心感」が0.0以上の値を示しており、住宅が持ち家で安定していることと、経済状況への安心感に関わりがあることがうかがえる。

クラスタ4は、これら3つのクラスタよりやや低くなるものの、持ち家率が73.9%と比較的高めであることと、「都営・区営住宅」の割合が14.8%で6クラスタ中3番目に高いことが特徴である。クラスタ4は、第4因子「経済状況への安心感」の平均値が-0.009で、クラスタ5とあまり変わらず、比較的安定した傾向にある。くわえて、近所づきあいの充実感が高いことが特徴である。

クラスタ1は、持ち家率が64.7%で6クラスタ中2番目に低く、都営・区営住宅に居住する世帯の割合が21.0%と高い。クラスタ2は、持ち家率が57.0%で最も低く、都営・区営住宅に居住する世帯の割合は27.1%で最も高い。また、「民間賃貸・公的賃貸（UR等）住宅」に住む世帯の割合が13.1%で、最も高い。クラスタ1とクラスタ2は、経済状況への安心感がともに低い。持ち家率が低いことと関わりがあると考えられるだろう。

表5－40 【夫婦世帯】クラスタ別 住宅の種類

	クラスタ1		クラスタ2		クラスタ3		クラスタ4		クラスタ5		クラスタ6	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
持ち家	145	64.7%	61	57.0%	194	82.2%	215	73.9%	159	82.4%	142	83.5%
民間賃貸・公的賃貸（UR等）住宅	18	8.0%	14	13.1%	17	7.2%	16	5.5%	19	9.8%	4	2.4%
都営・区営住宅	47	21.0%	29	27.1%	9	3.8%	43	14.8%	8	4.1%	14	8.2%
その他	14	6.3%	3	2.8%	16	6.8%	17	5.8%	7	3.6%	10	5.9%
合計	224	100.0%	107	100.0%	236	100.0%	291	100.0%	193	100.0%	170	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=90.981$ 自由度 15 $p=0.000^*$ * $p<0.05$